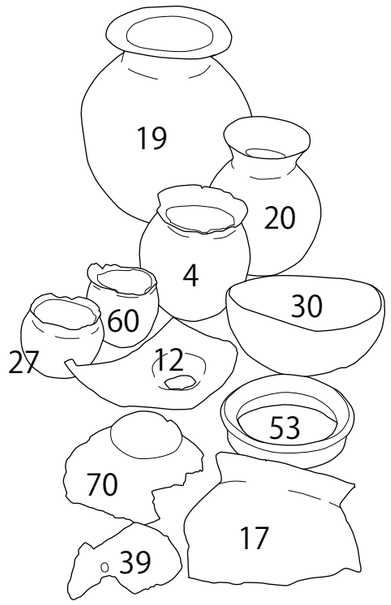
高松市立山田中学校校舎改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

北山下遺跡（きたやましたいせき）

2015 年 3 月

高松市教育委員会



＊番号は本文中の遺物実測図番号に対応する。

例　言

1　本書は、高松市立山田中学校校舎改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、北山下遺跡の報告を収録した。

2　発掘調査地並びに調査期間は次のとおりである。
調 査 地：高松市川島東町 1257 番地 1
発掘調査：平成 26 年 3 月 3 日～同年 7 月 31 日（実働 72 日）
整理作業：平成 26 年 7 月 1 日～平成 27 年 2 月 27 日
調査面積：約 2,038 ㎡

3　発掘調査から報告書の編集まで高松市教育委員会が担当した。

4　現地調査は高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課職員　高上拓と同課非常勤嘱託職員　森原奈々が担当した。報告書の整理作業及び原稿執筆は、森原が担当した。

5　本書の編集は森原が担当し、高上が補佐した。

6　発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するにあたって、下記の方々および関係諸機関から御協力と御教示を得た。記して厚く謝意を表する（五十音順、敬称略）。
小竹興業・四国開発建設・エヌケー建設特定建設工事共同企業体 ・ 高松市立山田中学校・
佐藤　竜馬（香川県埋蔵文化財センター）

7　本調査に関連して、以下の業務を委託発注により実施した。
遺物写真撮影　　西大寺フォト
自然科学分析（珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析）　パリノ・サーヴェイ株式会社

8　標高は東京湾平均海面高度を基準とし、座標は国土座標第Ⅳ系（世界測地系）に従った。また、図中の方位は座標北を示す。

9　本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
SD：溝　　SB：掘建柱建物　　SK：土坑　　SP：柱穴　　SX：性格不明遺構

10　本書で使用している挿図の縮尺は、遺構図は平面図適宜・断面図 1/40、土器・土製品の実測図は 1/4、石器の実測図は 1/1・1/4 を原則とした。また、写真図版における遺物の縮尺はすべて任意である。

11　遺物実測図のうち、弥生土器・土師質土器の断面は白塗り、須恵器の断面は黒塗りで示した。

12　発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

本 文 目 次

第１章　調査の経緯と経過

第１節　発掘調査の経緯……1
第２節　発掘調査の経過（調査日誌抄）……1
第３節　整理作業の日程……2

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境……3
第２節　歴史的環境……4

第３章　発掘調査の成果

第１節　調査方法……6
第２節　調査区の概要と調査の具体的方法……7
第３節　基本層序と検出遺構面……13
第４節　弥生時代の遺構と遺物……15
第５節　中世の遺構と遺物……30
第６節　近世以降の遺構と遺物……52

第４章　北山下遺跡の自然科学分析

第１節　試料……58
第２節　分析方法……58
第３節　結果……60
第４節　考察……63

第５章　まとめ

第１節　弥生時代～古墳時代前期の遺構変遷……71
第２節　条里地割と中世集落……72

挿 図 目 次

第１図　北山下遺跡の位置と主な河川……3
第２図　周辺の遺跡……5
第３図　調査区の設定……6
第４図　北壁・東壁断面図①（S=1/50）……8
第５図　東壁断面図②（S=1/50）……9
第６図　東西方向断面図①（S=1/50）……10
第７図　東西方向断面図②・第２遺構面遺構配置図……11-12
第８図　第１遺構面・第２遺構面等高線図……14
第９図　ＳＤ201・ＳＤ202・ＳＤ203・ＳＤ204平面図・断面図…16
第10図　ＳＤ205・ＳＤ206・ＳＤ207・ＳＸ201平面図・断面図……17
第11図　ＳＤ202・ＳＤ203・ＳＤ206・ＳＤ207出土遺物実測図……19
第12図　ＳＤ208・ＳＤ209・ＳＸ202平面図・断面図及び出土遺物実測図……21
第13図　ＳＤ210～ＳＤ214・ＳＸ203平面図・断面図……22
第14図　ＳＤ214・ＳＸ203断面図及び出土遺物実測図……23
第15図　ＳＫ201平面図・断面図……24
第16図　Ａ・Ｂ層　出土遺物実測図……26
第17図　Ｖ層　出土遺物実測図①……27
第18図　Ｖ層　出土遺物実測図②……28
第19図　第２遺構面精査中出土遺物実測図……29
第20図　第１遺構面遺構配置図……31-32
第21図　ＳＡ101・ＳＡ102平面図・断面図……33
第22図　ＳＡ103平面図・断面図及びＳＡ101・ＳＡ102・ＳＡ103出土遺物実測図……34
第23図　ＳＢ101・ＳＤ106平面図・断面図……35
第24図　ＳＢ101出土遺物実測図……36
第25図　ＳＢ102平面図・断面図及び出土遺物実測図……37
第26図　ＳＢ103平面図・断面図……38
第27図　ＳＢ103出土遺物実測図……39
第28図　ＳＢ104・ＳＢ105平面図・断面図……40
第29図　ＳＤ101～104・107～111平面図……42
第30図　ＳＤ101～104・109・110・111断面図及び出土遺物実測図……43
第31図　ＳＤ105平面図・断面図及び出土遺物実測図……44
第32図　ＳＤ112・ＳＤ113・ＳＤ114平面図・断面図……45
第33図　ＳＤ115・ＳＤ116平面図・断面図……46
第34図　ＳＤ117・ＳＤ118平面図・断面図及び出土遺物実測図…47
第35図　ＳＫ101・ＳＫ102平面図・断面図及び出土遺物実測図…48
第36図　ＳＰ平面図・断面図及び出土遺物実測図①……49
第37図　ＳＰ平面図・断面図及び出土遺物実測図②……50
第38図　第１遺構面精査中出土遺物実測図……51
第39図　ＳＤ001平面図・断面図及び出土遺物実測図…53
第40図　ＳＥ001・ＳＥ002平面図・断面図……54
第41図　ＳＫ001平面図・断面図及び出土遺物実測図…55
第42図　近世以降平面図・水田断面図及び出土遺物実測図……56
第43図　分析試料採取位置……59
第44図　花粉化石群集……61
第45図　植物珪酸体群集……62
第46図　遺跡周辺の地形分類図……66
第47図　第２遺構面時期変遷模式図……71
第48図　遺跡周辺の条里地割……73
第49図　中世集落と坪内区画割付図……73

挿 表 目 次

第１表　整理作業工程表……2
第２表　基準点座標一覧表……6
第３表　珪藻分析結果……61
第４表　花粉分析結果……62
第５表　植物珪酸体含量……63
第６表　遺構観察表①……74
第７表　遺構観察表②……75
第８表　掘立柱建物観察表……76
第９表　石器・鉄製品・銅製品観察表……76
第10表　土器・土製品観察表①……77
第11表　土器・土製品観察表②……78
第12表　土器・土製品観察表③……79
第13表　土器・土製品観察表④……80
第14表　土器・土製品観察表⑤……81
第15表　土器・土製品観察表⑥……82

写 真 図 版 目 次

巻頭図版
　北山下遺跡出土弥生土器
第４章　自然化学分析
図版１．　珪藻化石・植物珪酸体……69
図版２．　花粉化石……70
図版表紙
　第１遺構面オルソデータ
写真図版１
１．　三谷町日山から見た北山下遺跡
２．　東西方向土層断面　C-C’（北から）
写真図版２
１．　遺跡近景（南から）
２．　２区北壁①土層断面（南から）
３．　３区北壁土層断面（南東から）
４．　１区東壁土層断面⑤（西から）
５．　３区西壁土層断面（東から）
写真図版３
１．　３区第２遺構面完掘状況（西から）
２．　２区第２遺構面完掘状況（南から）
写真図版４
１．　ＳＤ 201 完掘状況（南西から）
２．　ＳＤ 201　b-b’ 土層断面（東から）
３．　ＳＤ 202 完掘状況（北西から）
４．　ＳＤ 202　c-c’ 土層断面（南から）
５．　ＳＤ 203 完掘状況（北から）
６．　ＳＤ 203　d-d’ 土層断面（南から）
７．　ＳＤ 201・ＳＤ 202　a-a’ 土層断面（南から）
８．　ＳＤ 203 遺物出土状況（東から）
写真図版５
１．　ＳＤ 204 完掘状況（南から）
２．　ＳＤ 204　e-e’ 土層断面（南から）
３．　ＳＤ 205 完掘状況（南から）
４．　ＳＤ 205　f-f’ 土層断面（南から）
５．　ＳＤ 206 完掘状況（南から）
６．　ＳＤ 206　g-g’ 土層断面（南から）
７．　ＳＤ 207　i-i’ 土層断面（北から）
８．　ＳＤ 207　h-h’ 土層断面（南から）
写真図版６
１．　ＳＤ 210・ＳＤ 211 完掘状況（南西から）
２．　ＳＤ 210 b-b’ 土層断面（北東から）
３．　ＳＤ 211 d-d’ 土層断面（西から）
４．　ＳＤ 213 完掘状況（西から）
５．　ＳＤ 213 f-f’ 土層断面（東から）
６．　ＳＤ 212 完掘状況（東から）
７．　ＳＤ 212g-g’ 土層断面（西から）
写真図版７
１．　ＳＤ 214 完掘状況（西から）
２．　ＳＤ 214 h-h’ 土層断面（西から）
３．　ＳＸ 203 完掘状況（北から）
４．　ＳＸ 203 土層断面（南西から）
５．　ＳＤ 214 i-i’ 土層断面（西から）
６．　ＳＤ 214 j-j’ 土層断面（西から）
７．　ＳＫ 201 完掘状況（南西から）
８．　ＳＫ 201 土層断面（北西から）
写真図版８
A・B 層遺物出土状況
写真図版９
１．　３区第１遺構面完掘状況（西から）
２．　５区ＳＢ 102・ＳＢ 103 完掘状況（西から）
３．　３区ＳＡ 101 完掘状況（南東から）
４．　４区ＳＢ 101 完掘状況（東から）
５．　１区ＳＢ 101 完掘状況（東から）
写真図版 10
１．　１区ＳＢ 105 完掘状況（北から）
２．　１区ＳＤ 105 完掘状況（南から）
３．　ＳＫ 101 土層断面（南西から）
４．　ＳＤ 117 完掘状況（南から）
５．　ＳＤ 101・ＳＤ 102 完掘状況（北から）
６．　ＳＤ 118 完掘状況（南から）
７．　ＳＤ 104・109・110・111 完掘状況（東から）
８．　ＳＤ 118 土層断面（南から）
写真図版 11
１．　ＳＰ 1039 根石検出状況
２．　ＳＰ 1028 土層断面
３．　ＳＰ 4003 土層断面（東から）
４．　ＳＰ 4004 土層断面（東から）
５．　ＳＰ 5077 遺物出土状況（北から）
６．　ＳＰ 5070 古銭出土状況（南から）
７．　ＳＰ 3037 土層断面（南から）
８．　ＳＰ 3038 土層断面（南から）
写真図版 12
１．　ＳＰ 1032 土層断面（南東から）
２．　ＳＰ 1036 土層断面（南東から）
３．　ＳＤ 001 完掘状況（西から）
４．　ＳＰ 4016 遺物出土状況（西から）
５．　ＳＥ 001 土層断面（北から）
６．　ＳＥ 002 土層断面（西から）
７．　ＳＫ 001 土層断面（南から）
８．　水田遺構検出状況（南から）
写真図版 13　　弥生土器①
写真図版 14　　弥生土器②
写真図版 15　　弥生土器③
写真図版 16　　弥生土器④
写真図版 17　　弥生土器⑤
写真図版 18　　中世土器①
写真図版 19　　中世土器②
写真図版 20　　中世土器他・石器・銅製品

第１章　調査の経緯と経過

第１節　発掘調査の経緯

本調査地は、高松市立山田中学校新校舎建設予定地にあたり、新校舎及び体育館等建設工事を計画した。関係課が協議を開始した段階では、体育館建設に伴う地盤改良及び基礎工事等がすでに完了した状況であったため、残された新校舎建設予定地を対象に、試掘調査を行うこととした。なお、この際対象地の西半（第３図３区）は体育館建設工の仮囲い等で使用されており、試掘調査の実施が困難な状況であったため、北半（第３図１・２区）の試掘を先行させることとした。北半の試掘調査は平成 25 年 11 月 23 日～ 24 日に実施し、埋蔵文化財の包蔵状況を確認したため、香川県教育委員会に報告したところ、周知の埋蔵文化財包蔵地「北山下遺跡」として登録された。平成 25 年 12 月 19 日付けで文化財保護法第 94 条第１項に基づく発掘通知を県教委へ提出したところ、平成 26 年１月 17 日付けで「発掘調査」の行政指導があった。これを受けて、本市教委は平成 26 年３月３日から発掘調査を実施した。なお、調査開始後に調査予定地北半の西側が一部先行する体育館工事に伴う地盤改良工事ですでに削平されていたことが判明したため、この範囲は調査の対象から除外して発掘を実施している。

発掘調査開始後に、体育館工事との工程調整の結果、対象地西半の試掘調査が可能になったため、４月 24 日に実施した。試掘調査の結果、西半においても埋蔵文化財の包蔵状況を確認したため、県教委に報告したところ、「北山下遺跡」の範囲変更がなされた。その後西半についても平成 26 年５月 15 日付けで文化財保護法第 94 条第１項に基づく発掘通知を県教委へ提出したところ、平成 26 年５月 23 日付けで「発掘調査」の行政指導があった。

また、調査区の南端（第３図５区）について、調査予定地内に既設の部室棟が所在していた。撤去が予定されていたが、発掘調査の開始時には撤去が完了しない工程であったため、部室棟部分については調査区を分けて設定し、別途調査することとした。西半の調査完了後、部室棟撤去工がなされたため、工事立会を行ったところ、埋蔵文化財の包蔵状況が確認されたため、撤去後に発掘調査を実施した。

以上の経緯を経た結果、今回の調査は新校舎建設予定地の北半を皮切りに、西半→仮設部室部分の順に調査に着手した。調査期間は総合すると平成 26 年３月３日～７月 31 日である。なお、詳細は第３章第１節調査方法で報告するが、調査区の設定にあたっては学校行事及び工事との関係から、５つの調査区に分割して調査を実施している。

第２節　発掘調査の経過（調査日誌抄）

３月　３日　　調査区 (1 区）設定フェンス搬入・重機掘削開始。
３月 10 日　　第０遺構面を検出、遺構掘削。
３月 12 日　　第０遺構面の記録を完了、重機掘削開始。
３月 17 日　　調査区南側にて第１遺構面を検出、遺構掘削。
３月 18 日　　第１遺構面の記録を完了し、掘削を開始する。
３月 24 日　　第２遺構面を検出、遺構掘削。
３月 27 日　　第２遺構面の記録を完了。

3 月 31 日　　埋め戻し終了し、撤収。
4 月 1 日　　調査区（2 区）設定。フェンス搬入・重機掘削開始。
4 月 8 日　　第 0 遺構面を検出、遺構掘削。
4 月 9 日　　第 0 遺構面の記録を完了し、重機掘削開始。
4 月 11 日　　第 1 遺構面を検出、遺構掘削。
4 月 15 日　　第 1 遺構面の記録を完了し、重機掘削開始。
4 月 22 日　　第 2 遺構面を検出、遺構掘削。
4 月 30 日　　第 2 遺構面の記録を完了。
5 月 2 日　　埋め戻し終了し、撤収。
5 月 27 日　　調査区設定（3 区）・フェンス搬入・重機掘削開始。
5 月 29 日　　(3 区) 第 1 遺構面を検出、遺構掘削
　　調査区設定（4 区）重機掘削開始。
6 月 10 日　　調査区（3 区）第 1 遺構面の記録を完了し、重機掘削開始。
6 月 13 日　　第 2 遺構面を検出、遺構掘削。
6 月 17 日　　調査区（3 区・4 区）第 2 遺構面の記録を完了。
6 月 20 日　　調査区（4 区）の埋め戻し完了。
6 月 24 日　　調査区（3 区）の埋め戻し完了し、撤収。
7 月 25 日　　調査区設定（5 区）重機掘削開始。西側から遺構検出・掘削
7 月 28 日　　第 1 遺構面の記録を完了し、重機掘削開始。
7 月 31 日　　第 2 遺構面の記録を完了。埋め戻し。

第 3 節　整理作業の日程

作業は 7 月 1 日から開始し、翌 2 月 29 日に終了した。進捗状況は第 1 表のとおりである。

第 1 表　整理作業工程表

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2
洗浄	■	■			■						
接合・復元				■							
遺物実測					■	■	■				
遺構図レイアウト					■	■					
遺構図トレース							■	■			
遺物レイアウト								■	■		
遺物トレース									■		
観察表作成								■			
遺物写真撮影									■		
写真レイアウト										■	
自然科学的分析（委託）						■	■	■			
原稿執筆								■	■	■	
編集										■	■

第 2 章　地理的・歴史的環境

第 1 節　地理的環境

高松市は、香川県のほぼ中央に位置する。平野の大部分は香東川の堆積作用による扇状地を主体とし、その東部は春日川、新川などによる氾濫平野、河口部には三角州からなる海岸平野が形成されている。東は屋島、庵治半島および前田山の丘陵が、また西側には五色台から鷲の山に続く丘陵、そして南側には和泉層群からなる讃岐山脈が平野を囲み、北側は瀬戸内海に面している。高松平野内には、讃岐層群からなる石清尾山、由良山、日山、六ツ目山などの一つ山が点在している。メサ（山頂が平らな台地状の地形）やビュート（山頂まで急な斜面が続き尖った形状）といった高松平野をはじめ讃岐平野に特徴的な地形の一つである。讃岐山脈北側には標高 600 m未満の前山丘陵が広がっており、丘陵とその北側の平野との境界には、活断層である長尾断層が東西方向に通っている。この長尾断層の活動によって約 1200 ～ 500 年前（9 世紀～ 16 世紀）に直下型地震を発生させたことが、近年の詳細な活断層調査や発掘調査によるトレンチ調査などにより明らかになってきている [3)]。

本遺跡は高松市南東部にあり、讃岐山脈に源を発し神内上池・神内池・松尾池・城池（四箇池）の大貯水池を抱く春日川が運ぶ土砂で形成された緩やかな扇状地上に位置する。春日川は現在上流では河川改修によって緩やかに蛇行して流れているが、扇状地形成過程で数多くの流路を生み

第 1 図　北山下遺跡の位置と主な河川

出したと考えられる。旧水流図を見ると春日川から分岐した旧河道が調査地の南側を流れ、東側の松宇神社丘陵との間に大きな湛水池が存在していたようである[4)]。また、春日川中流域に位置する六条・上所遺跡や東山崎・水田遺跡などでは、中世までにある程度土地が平準化され小規模な集落が展開し、その後も春日川の氾濫等で河川堆積が進行しており、比較的湿潤な環境にあったようである。

第２節　歴史的環境

北山下遺跡が所在する川島東町周辺では、旧石器時代の遺跡は現在確認されていない。縄文時代では十川東・平田遺跡から草創期と考えられる有舌尖頭器が出土し、川島本町遺跡からは後期の落ち込み状遺構や土器が出土している。

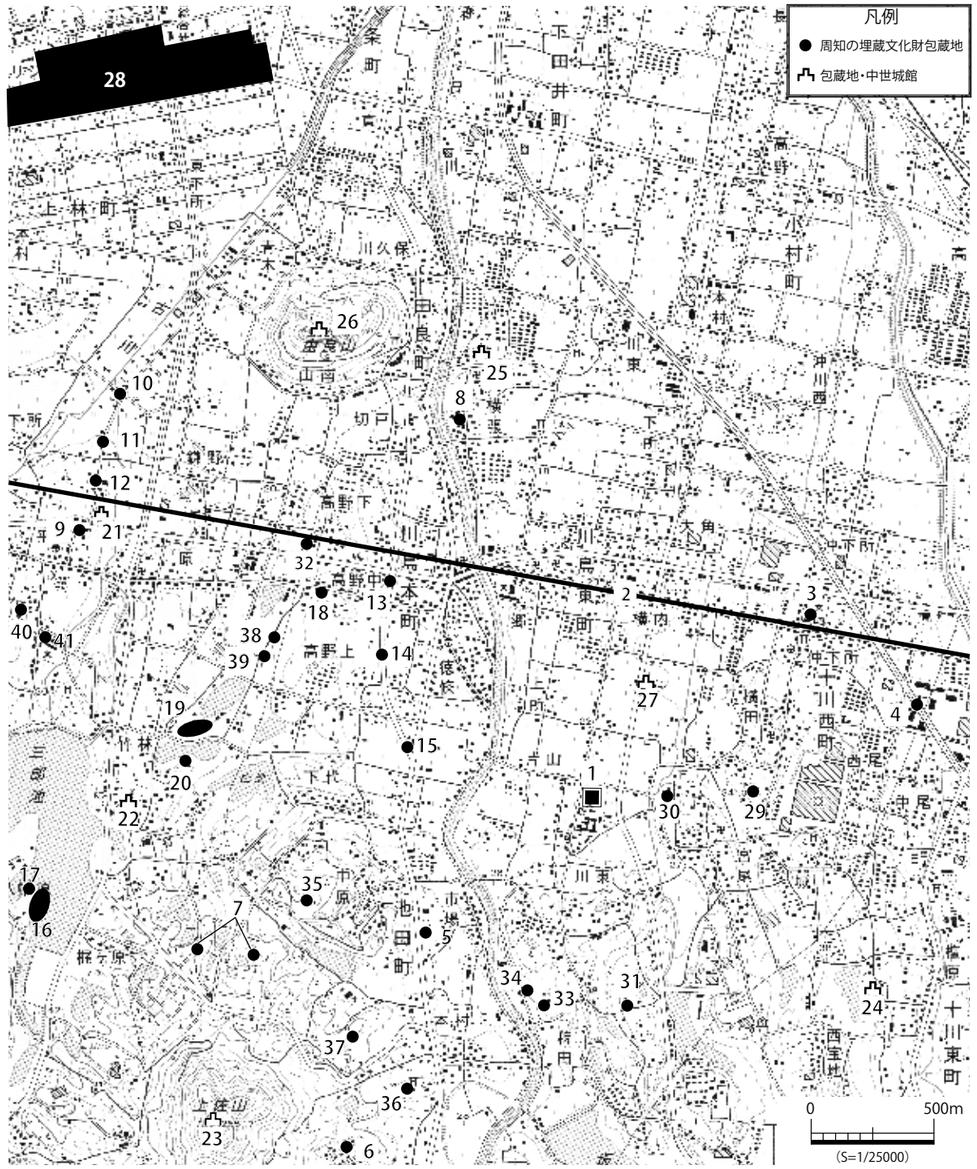
弥生時代では、春日川西岸の丘陵部などで、前期末の土器が大量に出土した光専寺山遺跡や、中期末～後期初頭に属し分銅型土製品や建物跡を検出した高地性集落の中山田遺跡が知られている。また、後期後半の土器棺が７基確認された三谷町の通り谷遺跡がある。後期後半～古墳前期になると、北野遺跡・鎌野西遺跡・川島本町遺跡など、平野部で遺跡数が増加している。

古墳時代では、刳抜式石棺を内部主体に納めた全長 88 mの前方後円墳の三谷石舟古墳や、大型円墳の高野丸山古墳が知られている。後期になると春日川西岸の上佐山裾部に群集墳が多く造営されている。窯業面では初期須恵器の窯跡として知られる三谷三郎池西岸窯跡が広く知られている。

古代の高松平野は大きく西部の香川郡、東部の山田郡に分割され、南北線が東に約９～ 11°傾く条里地割が分布し、平野を横断するように南海道が木田郡三木町白山の南麓と高松市御厩町の六ツ目山と伽藍山の間を挟んで想定されている。本遺跡周辺では弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地における学際的な調査がなされ、当地の土地利用の変遷や条里地割について重要な成果が得られている。調査地である山田中学校の西側に隣接し、条里地割の三条と四条の南北に走る径溝は明瞭である。露尾遺跡では、条里地割に合致する建物跡が検出されている。また三谷中原遺跡では官道の推定ラインにあたるとして調査されている。この他、南海道沿いの高野廃寺では、転用された礎石や奈良～平安時代の軒瓦が出土している。

中世では、平安末期に土着した植田氏が十河・神内・三谷・由良氏などに分かれ十河氏を一族の棟梁として山田郡で勢力を誇り、数多くの城館を築いた。本遺跡の北側、川島東町に三谷出羽入道の居城があったと、『全讃史』・『讃州府志』等に記述があり、三谷氏一族の砦があったものと推測される[4)]。香西氏や阿波三好氏に介入されながらも、度重なる侵攻に屈しなかった十河城だが、ついに天正 12 年長宗我部元親の侵攻により落城し、その支配下に入った。その後、徳川治世下では、松平頼重が東讃岐 12 万石を拝領し、高松城主として入封した。山田郡は 34 の村・町・郷・里に分けられた。そして、水不足解消のため農民達の多大な労力によって松尾池・公渕池・坂瀬池等のため池開発が進んだ[4)]。

＜参考文献＞
1）柴田博・糸魚川淳二 1989「瀬戸内海と古瀬戸内海」『アーバンクボタ』No.28 株式会社クボタ
2）長谷川修一・斉藤実 1989「讃岐平野の生いたち―第一瀬戸内累層群以降を中心として」『アーバンクボタ』28 株式会社クボタ
3）長谷川修一・鶴田聖子 2014『讃岐ジオサイト探訪』香川大学生涯学習教育研究センター研究報告　別冊　香川大学
4）川島校区地域おこし事業推進委員会 1995『川島郷土史』川島郷土誌編集委員会



1.北山下遺跡
2.旧南海道跡
3.西下遺跡
4.露尾（西尾）遺跡
5.光専寺山遺跡
6.中山田遺跡
7.通り谷遺跡
8.由良南原遺跡
9.横内東遺跡
10.北野遺跡
11.鎌野西遺跡
12.三谷中原遺跡
13.川島本町山田遺跡
14.川島本町遺跡
15.川島本町南遺跡
16.三谷三郎池遺跡
17.三谷三郎池西岸窯跡
18.高野廃寺
19.石舟池古墳群
20.三谷石舟古墳
21.鎌野城跡
22.三谷城跡
23.上佐山城跡
24.十河城跡
25.由良城跡
26.由良山城跡
27.出羽城跡
28.空港跡地遺跡
29.西尾天神社古墳
30.松宇八幡馬場古墳
31.金法寺遺跡
32.高野丸山古墳
33.川東1号墳
34.川東2号墳
35.下代古墳
36.池田合子神社御旅所古墳
37.上佐山東麓古墳
38.高野南1号墳
39.高野南2号墳
40.平石上1号墳
41.宮ノ浦遺跡

第２図　周辺の遺跡

第３章　発掘調査の成果

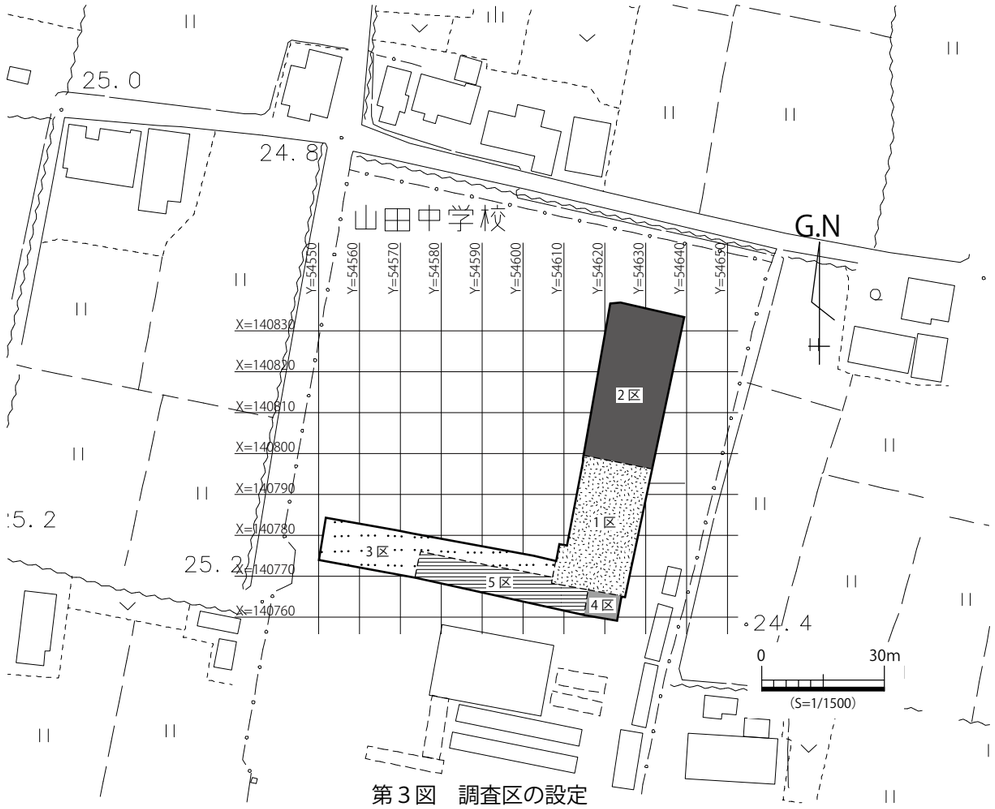
第１節　調査方法

調査対象地は高松市立山田中学校の校庭に計画した新校舎建設予定地である。発掘調査は重機による遺構面までの掘削と、人力による遺構の掘削を基本として行った。記録に際しては７点の基準点を設定し、基準点をもとに図化を行った。各基準点の座標は第２表のとおりである。このうち、５区調査時に校舎建設工事の影響ですでに打設していた基準点が失われていたので仮杭 Ｙ11 とＹ 12 を基準とした。図面は平面図を株式会社四航コンサルタントに写真測量業務として委託し、断面図は手書きで縮尺１/２０で作図した。写真撮影は 35mm フィルムカメラを主に用い、モノクロ・カラーリバーサルフィルムで記録した。また、補助的にデジタルカメラも用いて記録を行った。

第２表　基準点座標一覧表

	Y1	Y2	Y3	Y4	Y5	Y11	Y12
X	140735.095	140761.056	140832.457	140766.938	140770.785	140761.655	140756.388
Y	54628.341	54635.238	54651.755	54600.612	54580.635	54578.169	54609.235

（数値は世界測地系第Ⅳ系による）



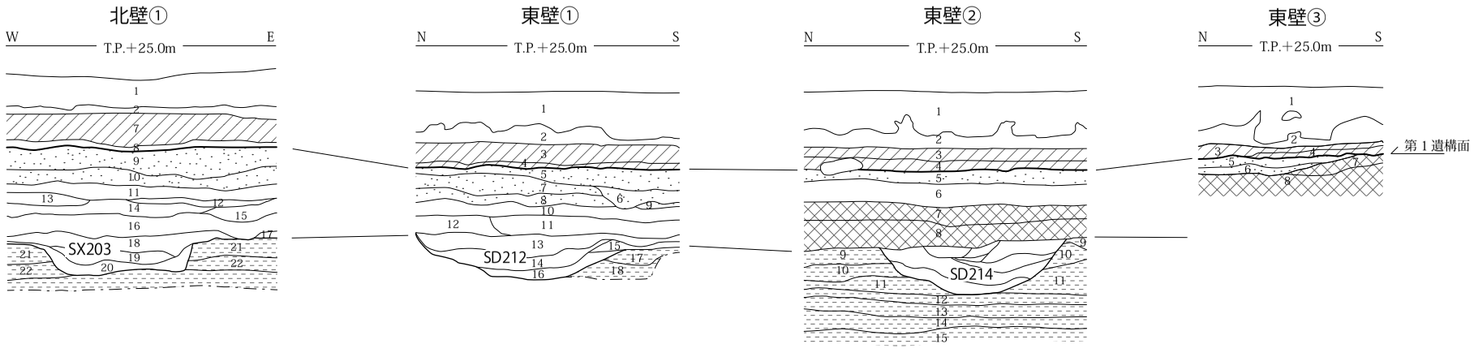
第３図　調査区の設定

第２節　調査区の概要と調査の具体的方法

調査地の周辺は、南側の前山丘陵から緩やかに北に傾斜する扇状地の扇央部分にあたり、周辺には条里地割が認められる。調査区は現状で中学校のグランドとして利用されており、現状地盤の標高はおよそ 24.6 ～ 24.9 ｍである。調査区は南北長約 76m，東西長約 75 ｍの逆Ｌ字形を呈する。工事の工程状況により、５つの調査区に区分して調査を行い、調査順に番号をつけている。

具体的な調査の方法についてであるが、上記のとおり調査は１区→２区→３区・４区→５区の順に行った。発掘調査開始前の試掘調査時の所見としては、遺構面は１面（第３章第５節の第１遺構面）で、その下層に遺物包含層（Ⅴ層）が広がるという認識であった。１区の調査時には、第１遺構面より上位で遺構面（第０遺構面。第３章第６節）を確認したため、記録に努めた。その後、第１遺構面の調査完了後の断割り時に第２遺構面の存在を新規で確認した。調査期間の制限及び第０遺構面の帰属時期が近世以降であることが確認できたため、２区以降の調査では第０遺構面の調査は行わず、重機掘削で削平することとした。なお重機掘削時の第０遺構面に関する所見であるが、全調査区で確認できており、畦畔や鋤溝を伴う近世以降の水田関係遺構が広がっていたものと考えられる。

第２遺構面の調査であるが、２区においては遺構面の上面検出を複数回にわたって重機で行い、その後人力で掘削した。基盤層が砂層であり、隣接する体育館工事における基礎杭の打設により地下水位が上昇し、湧水が著しい環境であった。このため、遺構の平面形状は検出時からやや削れて幅が狭くなっているものもある。平面形に関しては大枠で開削された方向を示すものと解されたい。３区では遺構検出に先行して北壁沿いに断割りし、断面観察を行ったところ、溝の開削と埋没に時期差が生じていることが判明した（ex. 第９図 SD201 と 203）。ただし、前述の湧水と基盤層の脆弱性及び調査期限を勘案して、遺構の検出については第７図 12 層・13 －１層まで一度に重機で掘削した。このため、掘り込み面の浅い溝についてはその上端を一部削平しており、平面図に示した溝の平面形はやや幅を減じているものがある。こちらも溝の開削方向を示すものとして提示する。第５区の調査時には既に調査が完了していた１区～４区の区間において、校舎建設に伴う基礎杭の打設が開始されており、さらに湧水面が上昇し、排水が困難な状況であった。このため、５区の第２遺構面検出は主に重機で行い、検出後すぐに平面形を記録し、断面を断割りして断面図の作成を行うという方法を採った。この際の遺構検出についても３区と同様、基盤層の下層での検出を基本としたため、平面形については、削平による幅の減少や浅い部分の断絶（ex. SD207）などがみられる。



1. 10YR5/6 黄褐　極粗粒砂　（グランド）
2. 5Y5/1 灰　中粒砂～細粒砂（水田耕作土）
7. 10YR6/6 明黄褐　極細粒砂　Fe 沈着。土器片を含む。
8. 10YR6/2 灰黄褐　細粒砂～極細粒砂　10YR7/6 明黄褐を斑状に含む。
9. 10YR5/4 にぶい黄褐　極細粒砂
10. 2.5Y5/2 暗灰黄　シルト～細粒砂　Fe 沈着
11. 7.5YR4/2 灰褐　粗粒砂混じり粘土　Fe 沈着
12. 10YR4/2 灰黄褐　粗粒砂
13. 10YR6/2 灰黄褐　粗粒砂～中粒砂
14. 10YR4/3 にぶい黄褐　極粗粒砂混じり粘土 Fe が多量に沈着
15. 10YR3/1 黒褐　粗粒砂混じり粘土
16. 10YR3/2 黒褐　細粒砂混じり粘土
17. 10YR3/2 黒褐　極粗粒砂 Fe がやや多めに沈着
18. 10YR6/6 明黄褐　極粗粒砂　粘土が少量に混じる。
19. 10YR7/6 明黄褐　極粗粒砂～粗粒砂
20. 10YR5/8 黄褐　極粗粒砂
21. 2.5Y3/1 黒褐　粘土混じり粗粒砂
22. 2.5Y5/1 黄灰　シルト～細粒砂
23. 10YR5/1 褐灰　粘土

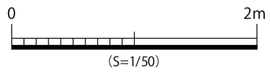
（SX203）

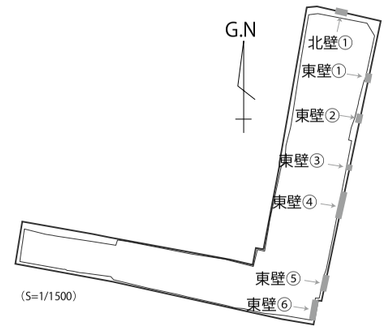
1. 10YR5/6 黄褐　極粗粒砂（グランド）
2. 2.5GY3/1 暗オリーブ灰 中粒砂～細粒砂（水田耕作土）
3. 10YR5/2 灰黄褐　中粒砂～細粒砂
4. 10YR5/6 黄褐　中粒砂
5. 10YR6/2 灰黄褐　細粒砂　Mn を含む。
6. 10YR6/2 灰黄褐　細粒砂
7. 7.5YR5/4 にぶい褐 粗粒砂
8. 10YR4/2 灰黄褐　中粒砂～細粒砂
9. 10YR6/3 にぶい黄橙　中粒砂
10. 10YR3/2 黒褐　細粒砂～シルト 粘性有り。
11. 10YR4/2 灰黄褐　中粒砂
12. 7.5YR4/3 褐　中粒砂
13. 7.5YR4/6 褐　粗粒砂
14. 10YR5/3 にぶい黄褐　粗粒砂
15. 10YR5/3 にぶい黄褐　粘土混じり粗粒砂
16. 7.5YR4/6 褐 粗粒砂
17. 2.5Y4/2 暗灰　粗粒砂混じり粘土
18. 5BG3/1 暗青灰　粗粒砂混じり粘土　粘性強い。

（SD212）

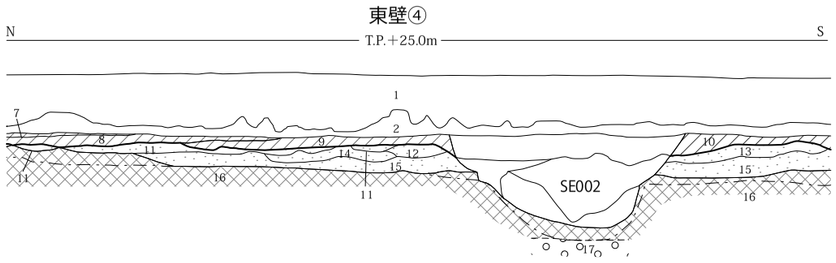
1. 10YR5/6 黄褐　極粗粒砂（グランド）
2. 2.5GY3/1 暗オリーブ灰　中粒砂～細粒砂（水田耕作土）
3. 2.5Y7/2 灰黄　粗粒砂混じり細粒砂
4. 2.5Y7/2 灰黄　粗粒砂混じり細粒砂
5. 2.5Y6/2 灰黄　細粒砂
6. 2.5Y4/2 暗灰黄　粘質シルト　6 ～ 7 層にかけて Fe 斑鉄沈着
7. 2.5Y3/2 黒褐　粗粒砂～細粒砂
8. 10YR2/3 黒褐 粗粒砂混じり細粒砂
9. 5BG5/1 青灰　細粒砂　黒色細粒砂（８層）10% 含む。
10. 5BG5/1 青灰　極粗粒砂
11. 5BG5/1 青灰　シルト
12. 5BG1.7/1 青黒　極粗粒砂混じり粘土
13. 10BG4/1 暗青灰　極粗粒砂
14. 10BG4/1 暗青灰　粘土　灰色砂ラミナ顕著
15. 5BG1.7/1 青黒　粘土（腐植質粘土）

1. 10YR5/6 黄褐　極粗粒砂（グランド）
2. 2.5GY3/1 暗オリーブ灰　中粒砂～細粒砂　（水田耕作土）
3. 2.5GY3/1 暗オリーブ灰　中粒砂～細粒砂
4. 10YR4/2 灰黄褐　中粒砂
5. 5BG4/1 暗青灰　細粒砂～シルト強グライ化
6. 5Y5/1 灰　細粒砂～シルト
7. 10YR3/3 暗褐　中粒砂～細粒砂
8. 10YR2/1 黒　極粗粒砂～粗粒砂

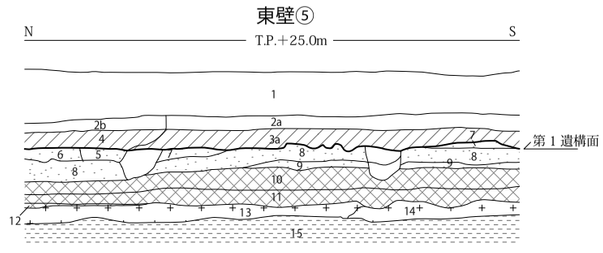




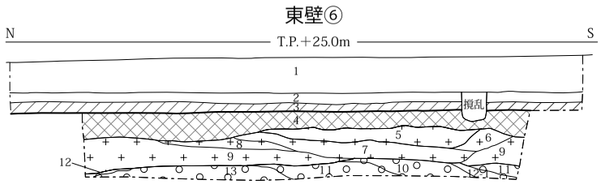
第４図　北壁・東壁断面図①　（S=1/50）



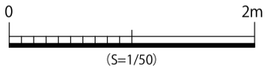
1. 2.5Y5/6 黄褐　極粗粒砂～粗粒砂　（グランド）
2. 5B5/1 青灰　粗粒砂～細粒砂
7. 7.5Y3/2 オリーブ黒　シルト
8. 10YR5/2 灰黄褐　中粒砂混じり細粒砂　Fe 集積
9. 10YR5/2 灰黄褐　シルト　網目状に Fe 沈着
10. 2.5Y5/3 黄褐　極細粒砂～シルト
11. 5Y6/4 オリーブ黄　極細粒砂～シルト　16 層ブロック 2% 含む。
12. 5Y6/6 オリーブ　細粒砂～極細粒砂
13. 7.5Y4/1 灰　極細粒砂
14. 5Y7/3 浅黄　極細粒砂
15. 5Y5/2 灰オリーブ　極細粒砂
16. 10YR2/3 黒褐　極粗粒砂～粗粒砂
17. 10YR5/2 灰黄褐　極粗粒砂



1. 2.5Y5/6 黄褐　極粗粒砂～粗粒砂　（グランド）
2a. 5B5/1 青灰　粗粒砂～細粒砂　（水田耕作土）
2b. 10G3/1 暗緑灰　中粒砂混じり細粒砂　強いグライ化（水田耕作土）
3a. 2.5GY7/1 明オリーブ灰　粗粒砂～細粒砂
4. 5G4/1 暗緑灰　中粒砂混じり細粒砂　3a 層がグライ化したもの。
5. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰　中粒砂混じり細粒砂　4 ～ 5ｃｍの黄色粘質ブロック含む。
6. 2.5GY4/1 暗オリーブ　細粒砂
7. 5Y7/1 灰白　細粒砂
8. 5Y4/1 灰　極細粒砂混じりシルト
9. 5Y2/1 黒　極細粒砂
10. 5Y4/1 灰　極粗粒砂～中粒砂
11. 5Y3/1 オリーブ黒　極細粒砂混じりシルト
12. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰　粘土～シルト
13. 5Y6/4 オリーブ黄　シルト 粘性有り。黒色ブロック 10% 含む。
14. 5Y5/2 灰オリーブ　極粗粒砂
15. 2.5GY5/1 オリーブ灰　中粒砂～細粒砂



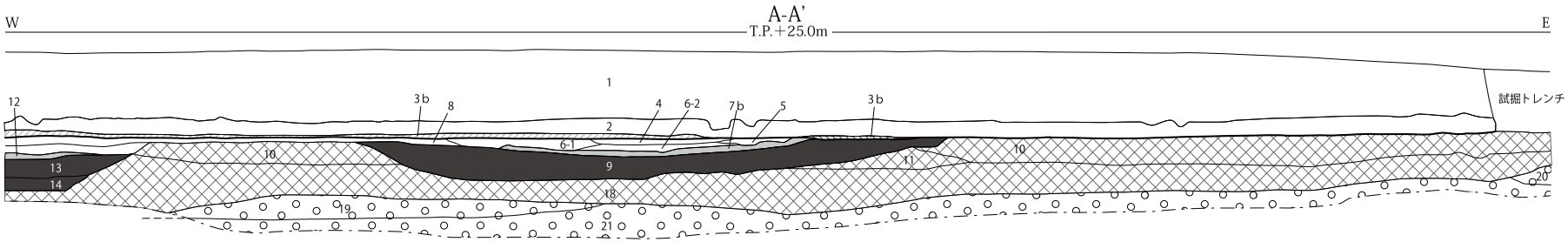
1. 花崗土　（グランド）
2. 2.5Y6/1 黄灰　極細粒砂～シルト　（水田耕作土）
3. 2.5Y5/3 黄褐　細粒砂～シルト
4. 10YR2/3 黒褐　細粒砂～極細粒砂　遺構面（上層）兼、遺物包含層
5. 10YR4/3 にぶい黄褐　中粒砂～極細粒砂
6. 10YR4/3 にぶい黄褐　中粒砂～細粒砂
7. 10YR4/2 灰黄褐　中粒砂～細粒砂
8. 10YR6/3 にぶい黄橙　粗粒砂～中粒砂
9. 10YR6/2 灰黄褐　中粒砂
10. 10YR8/2 灰白　中粒砂
11. 10Y5/1 灰　中粒砂～細粒砂
12. 5B5/1 青灰　シルト
13. 7.5Y6/1 灰　中粒砂



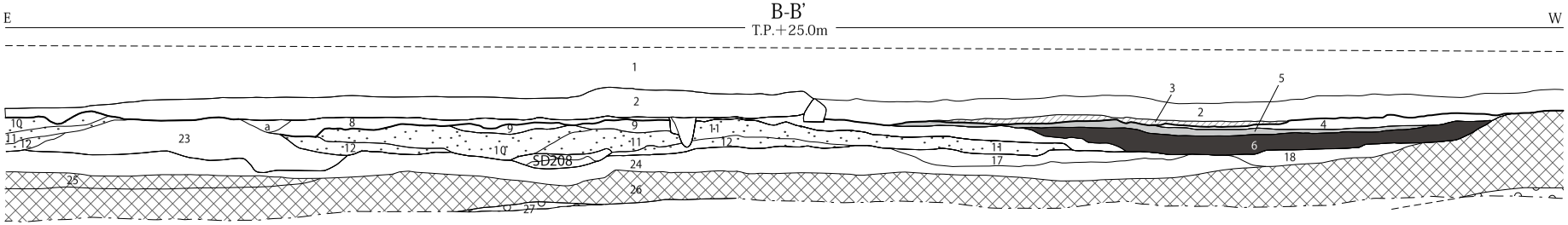
凡　例

- Ⅰ層．2.5Y5/6 黄褐　極粗粒砂～粗粒砂　（グランドの花崗土）
- Ⅱ層．2.5GY3/1 暗オリーブ灰　中粒砂～細粒砂　（水田耕作土）
- Ⅲ層．10YR5/2 灰黄褐　中粒砂～細粒砂
- Ⅳ層．10YR6/2 灰黄褐　細粒砂
- Ⅴ層．10YR2/3 黒褐　粗粒砂混じり細粒砂（包含層）
- Ⅵ層．10YR3/3 暗褐　中粒砂～細粒砂
- Ⅶ層．5BG5/1 青灰　極粗粒砂・シルト +5BG1.7/1 青黒粘土の互層堆積
- Ⅷ層．10YR5/2 灰黄褐　極粗粒砂
- A 層．10YR6/2 灰黄褐　細粒砂
- B 層．2.5Y4/2 暗灰黄　細粒砂～シルト　やや粘性有り

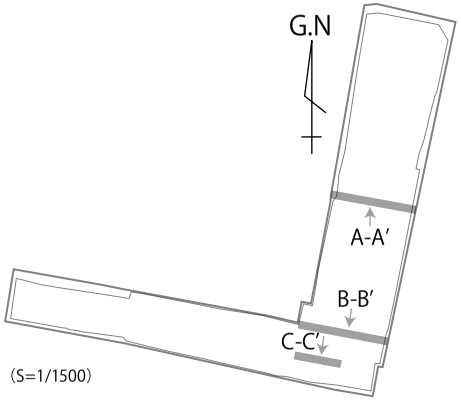
第５図　東壁断面図②　（S=1/50）

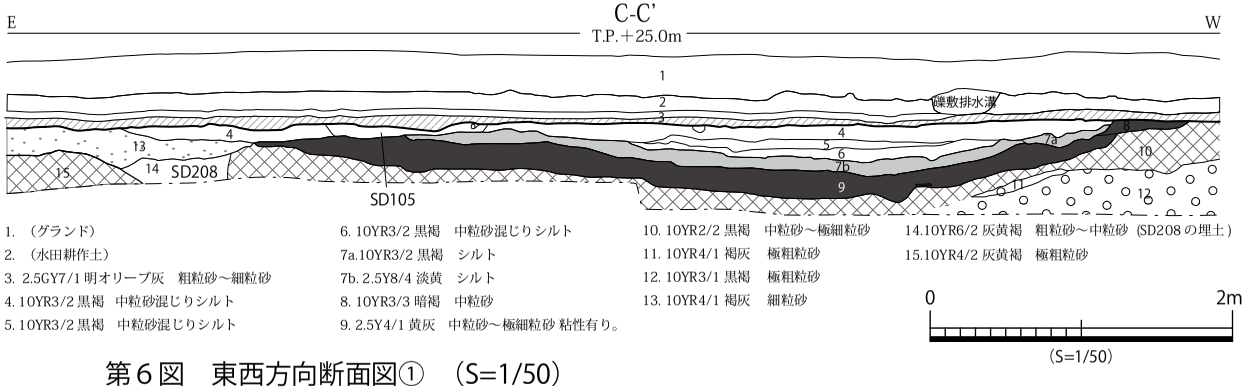


1. 2.5Y5/6 黄褐　極粗粒砂～粗粒砂（グランド）
2. 5B5/1 青灰　粗粒砂～細粒砂 (水田耕作土)
3b. 10YR5/2 灰黄褐　中粒砂混じり細粒砂 (Fe 層)
4. 7.5Y4/2 灰オリーブ　細粒砂～粘土
5. 7.5Y3/1 オリーブ黒 粗粒砂混じり粘土
6-1. 7.5Y5/1 灰　粗粒砂混じり粘土
6-2. 10YR3/2 黒褐　中粒砂混じりシルト
7b. 2.5Y8/4 淡黄　シルト
8. 7.5YR6/6 橙　粗粒砂混じり粘土
9. 2.5Y4/1 黄灰　中粒砂～極細粒砂
10. 10YR2/2 黒褐　中粒砂～極細粒砂
11. 10YR4/2 灰黄褐 極粗粒砂～粗粒砂
12. 2.5Y5/3 黄褐　シルト～粘土
13. 2.5Y3/2 黒褐　粗粒砂混じり粘土
14. 2.5Y4/1 黄灰　シルト～粘土
15. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 粘土混じり粗粒砂
16. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐　粘土混じり粗粒砂
17. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐　粘土混じり粗粒砂
18. 10YR2/3 黒褐　極粗粒砂～粗粒砂
19. 10YR4/1 褐灰　極粗粒砂～粗粒砂
20. 10YR4/2 灰黄褐　極粗粒砂～粗粒砂
21. 10YR5/2 灰黄褐　極粗粒砂



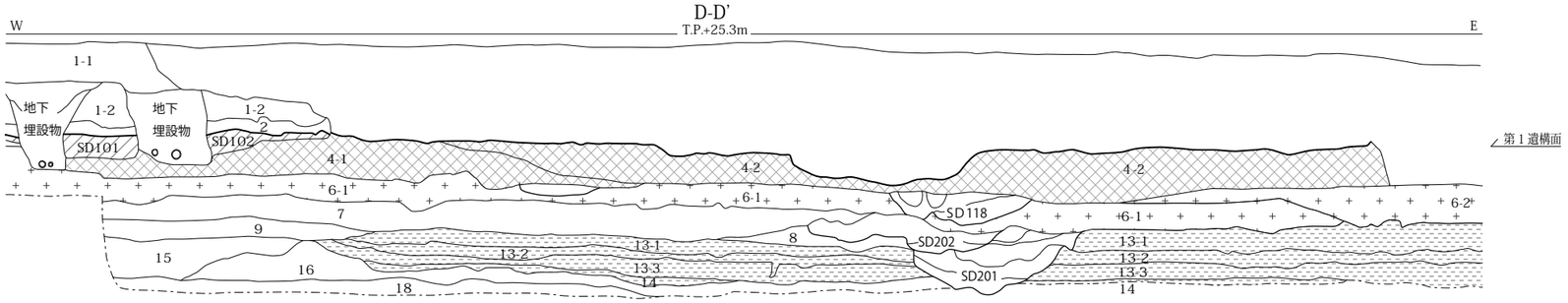
1. （グランド）
2. （水田耕作土）
3. 2.5GY7/1 明オリーブ灰　粗粒砂～細粒砂
4. C-C' の 6 層に対応
5. C-C' の 7b 層に対応
6. C-C' の 9 層に対応
8. 7.5Y4/2 灰オリーブ 細粒砂～シルト
9. 10YR4/3 にぶい黄褐極細粒砂～シルト
10. 2.5Y5/2 暗灰黄　極細粒砂
11. 2.5Y6/3 にぶい黄　極細粒砂～細粒砂
12. 2.5Y4/2 暗灰黄　粗粒砂混じり粘土
17. 5Y3/1 オリーブ黒　粗粒砂混じり粘土
18. 2.5Y3/1 黒褐　粗粒砂混じり粘土
19. 2.5Y4/3ｵﾘｰﾌﾞ 褐　細粒砂～シルト
20. 2.5Y5/6 黄褐　細粒砂
21. C-C' の 10 層と同じ
22. C-C' の 11 層と同じ
23. 5Y4/3 オリーブ褐 粗粒砂混じり粘土（水田畦の基盤層）
24. 10YR3/2 黒褐　粗砂混じり粘土
25. 0YR2/1 黒　粗砂混じり粘土
26. 10YR2/2 黒褐　粗砂混じり粘土
27. Y4/2 灰オリーブ　極粗粒砂～粗粒砂

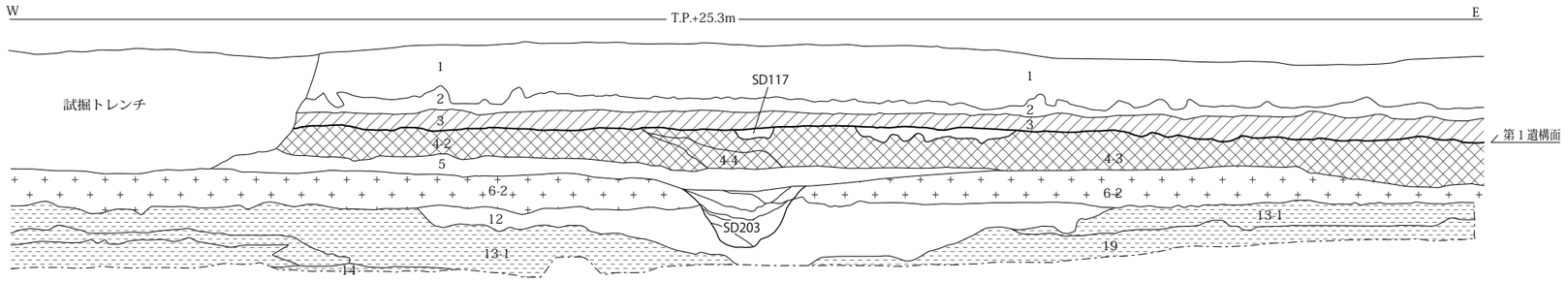


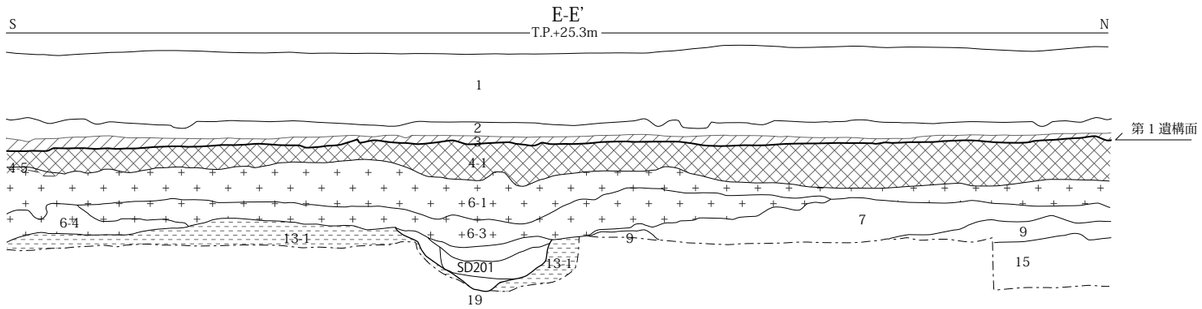


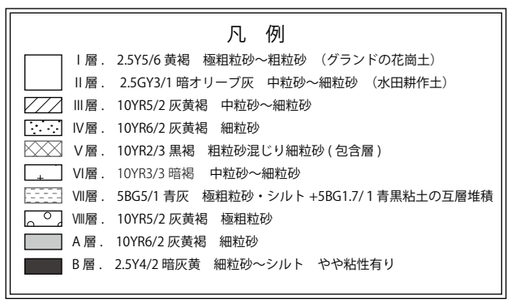
1. （グランド）
2. （水田耕作土）
3. 2.5GY7/1 明オリーブ灰　粗粒砂～細粒砂
4. 10YR3/2 黒褐　中粒砂混じりシルト
5. 10YR3/2 黒褐　中粒砂混じりシルト
6. 10YR3/2 黒褐　中粒砂混じりシルト
7a. 10YR3/2 黒褐　シルト
7b. 2.5Y8/4 淡黄　シルト
8. 10YR3/3 暗褐　中粒砂
9. 2.5Y4/1 黄灰　中粒砂～極細粒砂 粘性有り。
10. 10YR2/2 黒褐　中粒砂～極細粒砂
11. 10YR4/1 褐灰　極粗粒砂
12. 10YR3/1 黒褐　極粗粒砂
13. 10YR4/1 褐灰　細粒砂
14. 10YR6/2 灰黄褐　粗粒砂～中粒砂 (SD208 の埋土)
15. 10YR4/2 灰黄褐　極粗粒砂

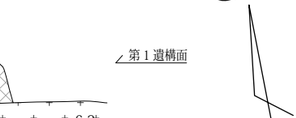
第６図　東西方向断面図①　（S=1/50）







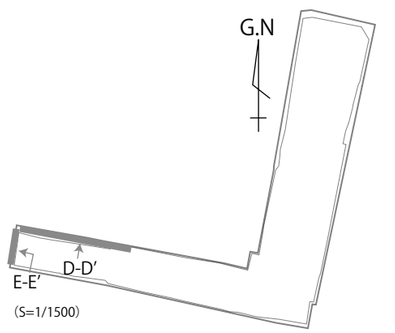




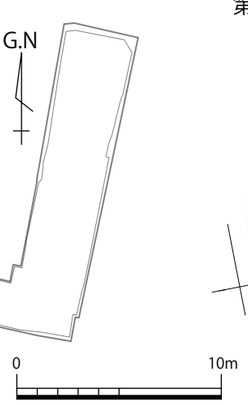
（断面図 S=1/50）

1-1. 2.5Y5/6 黄褐 細粒砂～シルト （グランド）
1-2. 2.5Y5/6 黄褐 極細粒砂～シルト （グランド）
2. 5B5/1 青灰 細粒砂～シルト （水田耕作土）
3. 10YR6/4 にぶい黄橙 細粒砂～シルト
4-1. 10YR2/3 黒褐 細粒砂～極細粒砂 遺構面（第 1 面）兼遺物包含層。Mn 斑沈着。
4-2. 10YR7/4 にぶい黄橙 中粒砂 遺構面兼包含層。Fe 少量沈着。
4-3. 7.5YR6/2 灰褐 シルト Fe 多量に沈着。
4-4. 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト Fe 少量沈着。
4-5. 5YR3/1 黒褐 細粒砂～シルト
4-6. 10YR3/2 黒褐 極細粒砂～中粒砂
5. 10YR6/2 灰黄褐 粗粒砂
6-1. 10YR3/3 暗褐 中粒砂～細粒砂
6-2. 10YR3/1 黒褐 細粒砂～シルト
6-3. 2.5Y5/6 黄褐 中粒砂～細粒砂 Fe 沈着
6-4. 2.5Y3/2 黒褐 極細粒砂～シルト
7. 10YR4/3 にぶい黄褐 粗粒砂～中粒砂
8. 10Y6/1 灰 細粒砂
9. 2.5Y3/2 黒褐 粗粒砂混じり粘土
10. 10YR4/4 褐 細粒砂～シルト
11. 5YR3/1 黒褐 細粒砂混じりシルト
12. 10G5/1 緑灰 極粗粒砂
13-1. 10Y5/1 灰 シルト
13-2. 7.5Y4/1 灰 粗粒砂混じり粘土
13-3. 10Y5/1 灰 シルト
14. 2.5Y2/1 黒 粘土
15. 2.5Y7/3 浅黄 粗粒砂
16. 7.5Y6/1 灰 粗粒砂
17. 2.5Y7/3 浅黄 粗粒砂～中粒砂
18. 2.5Y3/1 黒褐 シルト～粘土
19. 10Y2/1 黒 粘土

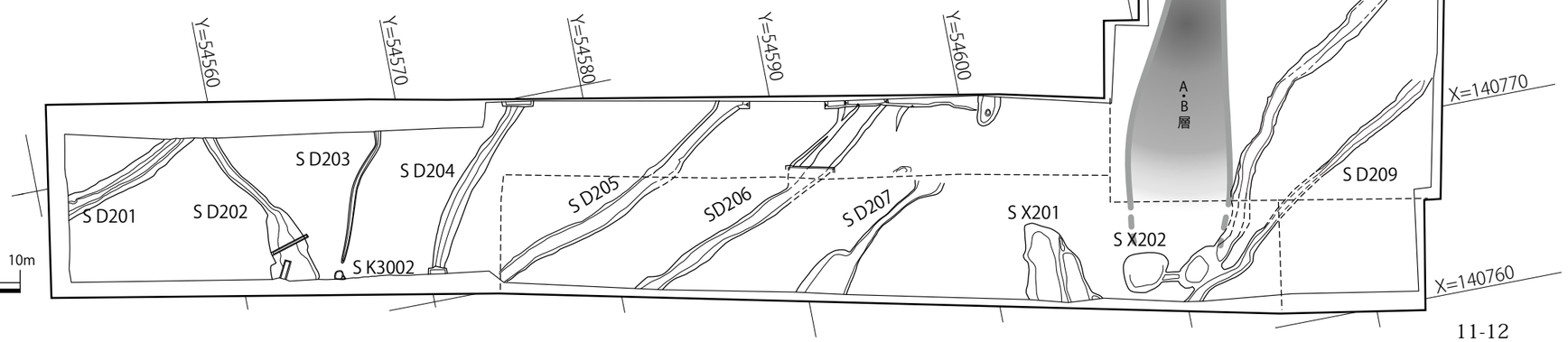
第 7 図 上段：東西方向断面図② （S=1/50）
下段：第 2 遺構面遺構配置図（S＝1/300）



（S=1/1500）



（平面図 S=1/300）



第３節　基本層序と検出遺構面

調査区は東西方向と南北方向に長い逆Ｌ字形の平面形であるが、調査時の所見から旧地形は西から東、南から北にかけて緩やかに傾斜して下ることが明らかになった。これは周辺の地形的環境とも矛盾しない。ここでは調査区の東壁・北壁、南壁の土層断面を中心に基本層序の記述を行うこととする。分層図は提示のとおり (第４～７図) だが、層相・土質からまた調査によって得られた遺構の形成状況に関する成果から、各層と遺構形成時の基盤層（遺構面）との対応関係を示すこととする。大別してⅠ～Ⅷ層にまとめ、それぞれの層の概略と地形変化を報告する。

Ⅰ層は、グラウンド造成時の花崗土である。礫敷き排水溝や電気ケーブルなどの地下埋設物が埋設されていた。上面は南側で標高 24.9 m前後、北側で 24.8 mを測る。層厚は 0.4 ～ 0.5 mである。

Ⅱ層は青灰色砂質土の水田耕作土である。水田の痕跡である畦畔や水田を区画していた木杭列などを一部確認している。この水田は特に調査区の東側を中心に顕著に認められ、広範囲で後述する第１遺構面を削平している状況が確認できた。平面的に見ると、第１調査区の X=140775 付近で段差を有し、10㎝ほど北側が低くなっており、その結果第１遺構面が削平されていた。時期は、層中から陶磁器類が出土しており、近世以降と考えられる。

Ⅲ層は、灰黄褐色中粒砂～極細粒砂である。調査区全体で見られ、基本的には水平堆積をしているが、層厚は３～ 10㎝程で、地形が下がる北東側は比較的厚く堆積する。上位は鉄分の沈着が見られ、１区東壁ではグライ化傾向があり、緑色を呈する。堆積時期は、層中から土師質土器が出土しており、中世と考えられる。

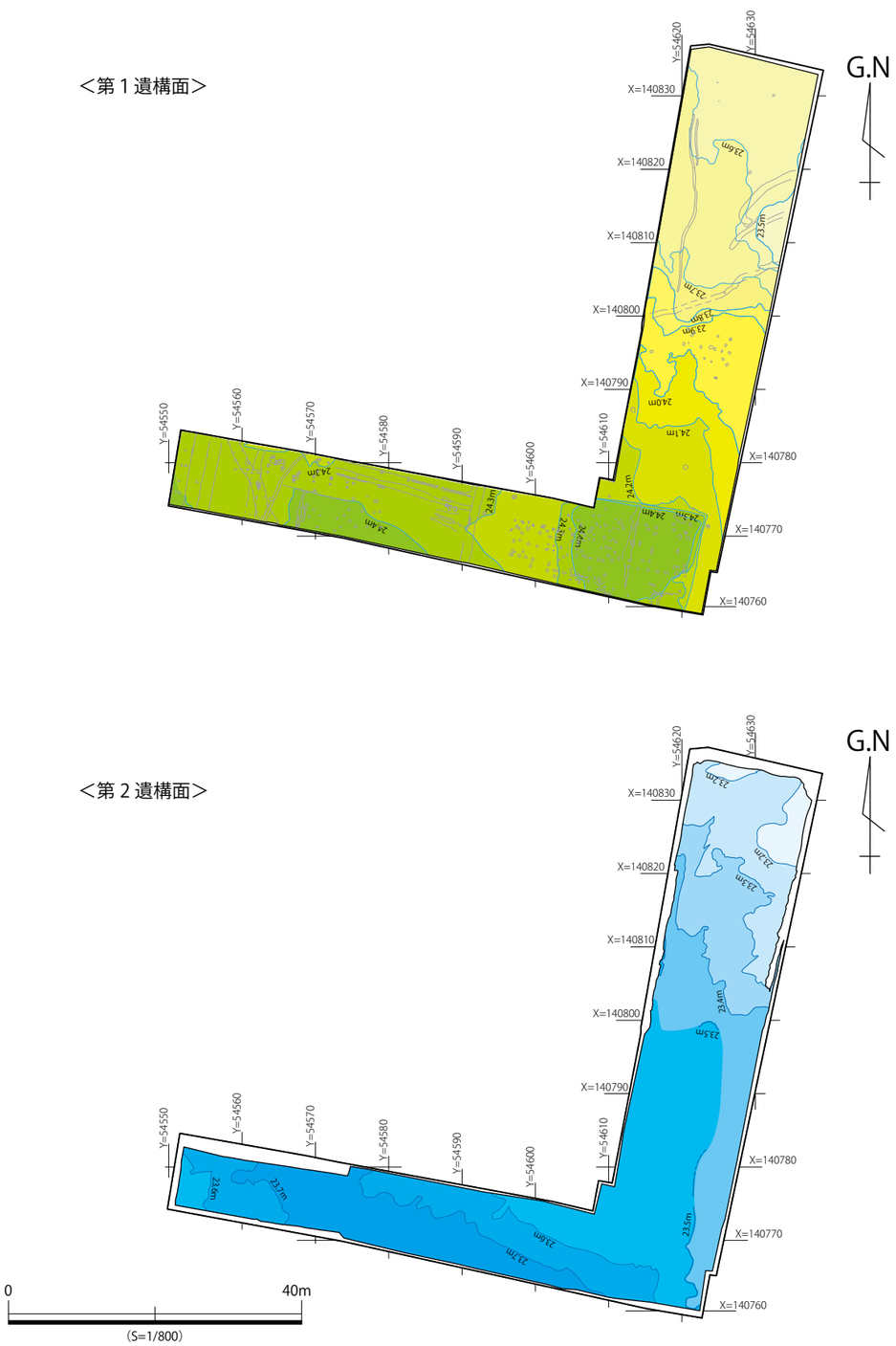
Ⅳ層は、灰黄褐色細粒砂である。１区の東半・２区の北東側などに部分的に堆積している。Ⅴ層が下がり低地になったところに堆積作用が働き、Ⅳ層が堆積したと考えられる。

Ａ・Ｂ層は、調査区の中央付近、灰黄褐色細粒砂層（Ａ層）と暗灰黄色粘質シルト層（Ｂ層）が 0.1 ～ 0.45 mの厚さでレンズ状に堆積していた。基盤をなすⅤ層と質・色調ともに明瞭に異なるため、平面的にもその広がりを検出することは容易であり、南北方向の帯状に広がる局所的な堆積であった。成因は不明だが、層中に混和物やブロック土が少なく、土色も土壌化の影響をあまり受けていない黄色を呈するため、短期間で埋没したものと考えられる。

Ⅴ層は、黒褐色粗粒砂混じり細粒砂である。調査区全体に堆積する包含層で、南西隅で層厚 0.35 mを測るが、北東にかけて層が薄くなる。北側では土層中に砂が帯状に認められ、一度に堆積したわけではなく、一定の時間幅の中で堆積が進行したことが予想される。出土遺物は、第４節で後述するが、弥生時代中期から古墳時代前期の遺物が出土している。

Ⅵ層は、調査区西側と北側で局所的に堆積する層で、層厚 0.3 ～ 0.5 m程である。黄味を帯びた暗褐色中粒砂～細粒砂で、黒褐色土ブロックを上位に含む。２区北側や３区中央では、粒径が粗く、鉄分の沈着が著しい。

Ⅶ層は、３区のＳＤ 204 より西側と、２区のＳＤ 214 より北側にかけて部分的に確認しており、



第８図　第１遺構面・第２遺構面 等高線図

南西から北東方向に流れる旧河道と考えられる。上層は灰色系のシルト～粘土と粗粒砂の互層堆積が見られ、ラミナの発達が顕著である。下層は黒色の腐植質粘土層が厚く認められ、掘削深度は底部まで達していない。遺物は確認できていない。

Ⅷ層は、灰黄褐色の極粗粒砂である。Ⅶ層が認められない１区・４区・３区東側を中心に堆積が認められる。後背の丘陵谷部から派生する開析谷を埋積した洪水粒砂と考えられる。遺物を含まず時期は不明である。

第１遺構面　調査区南側で現地表面下約 0.6 ｍの深度で検出した遺構面である。Ⅲ層で被覆され、Ⅳ層もしくはⅤ層上面が第１遺構面となっている。調査区東側は低地になっており、その低地上に堆積作用が働き、Ⅳ層が埋没して形成された平坦面が第１遺構面である。

第２遺構面　現地表面下約 1.2 ～ 1.3 ｍの深度で検出した遺構面である。第２節で述べたとおり、遺構の形成と埋没には複数の段階があり、正確には複数の遺構面の設定が可能だが、既述の調査方法を選択したことにより、ここでは単一の遺構面として記述する。Ⅵ～Ⅷ層にかかる断続的な堆積状況を示す各層がそれぞれ遺構面となっている。遺構はほとんどが南西から北東にかけて流走する溝である。第２章第１節の地理的環境で触れた調査地の南側を流走する春日川の旧水流に連動した一連の溝と考えられる。

以上のように、本調査区は、Ⅴ層以下の堆積状況から、元来、北東方向に向かって下降する地形をしていたことが窺える（第８図）。Ⅷ層は洪水流砂などに起因する層で起伏があり、Ⅶ層の旧河道が流れ次第に埋没することで平準化が進む。その過程でもさらに大小の水流を幾度と形成しながら、弥生時代後期を中心とする時期に、人の営みによって、溝掘削や遺物の埋没という結果になったと考えられる。包含層であるⅤ層は、調査区南側で厚い堆積を示し、東側の低地部を埋めるようにⅣ層が堆積し、中世段階以前には安定的な居住域として利用された。北側は低く、まとまった遺構は検出されなかった。またⅡ層以降は下層によって形成された地形を基本的に踏襲し、近世以降水田として利用され、Ⅰ層のグランド造成土によって、平準化が完了し現在に至る。

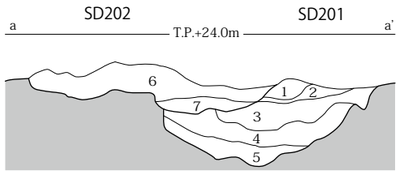
第４節　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代に属する遺構は、溝 14 条、土坑１基、性格不明遺構３基である。第２節で述べたとおり、弥生時代（第２遺構面）の遺構検出は制限が大きく、特に平面形については削平後の形状を示したものが多い。

１　溝（ＳＤ）

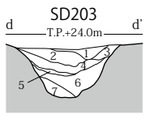
溝はほとんどすべてが南西から北東に流走し、埋土は極粗粒砂から粗粒砂を主体とする。

ＳＤ 201（第９図）　３区西側に位置しⅦ層上面で検出した。南西から北東方向に掘削されており、幅 1.1 ｍ、深さは最も深い箇所で 0.45 ｍである。底部の標高は調査区西壁で 23.2 ｍ、北壁で 23.1 ｍとなり、北東方向に流れると考えられる。掘方は逆凸状を呈し、平面形は円弧を描く。

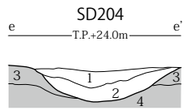


1. 5G6/1 緑灰　極粗粒砂混じりシルト
2. 2.5Y7/4 浅黄 極粗粒砂
3. 5G6/1 緑灰　極粗粒砂～粗粒砂
4. 10Y3/2 オリーブ黒 粘土混じり粗粒砂
5. 5G6/1 緑灰　細粒砂混じり粘土
6. 5Y4/1 灰　中粒砂～シルト
7. 5G4/1 暗緑灰 シルト～粘土

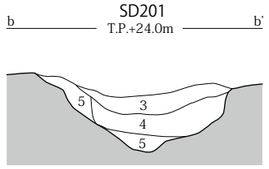
（SD202 上層）



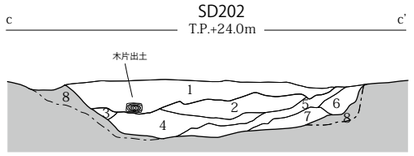
1. N5/ 灰　粘土
2. 10YR6/2 灰黄褐
3. 10Y6/1 灰　粘土　粗粒砂少量混じる。
4. N5/ 灰　粘土　Fe 少量含む。
5. 5GY6/1ｵﾘｰﾌﾞ灰
6. N4/ 灰　粘土
7. 10Y5/1 灰　中粒砂



1. 10YR4/3 にぶい黄褐　中粒砂
2. 10YR6/6 明黄褐　粘土混じり粗粒砂
   上位に Fe 沈着
3. 10YR4/4 褐　シルト～細粒砂
4. 5Y4/1 灰 粘土

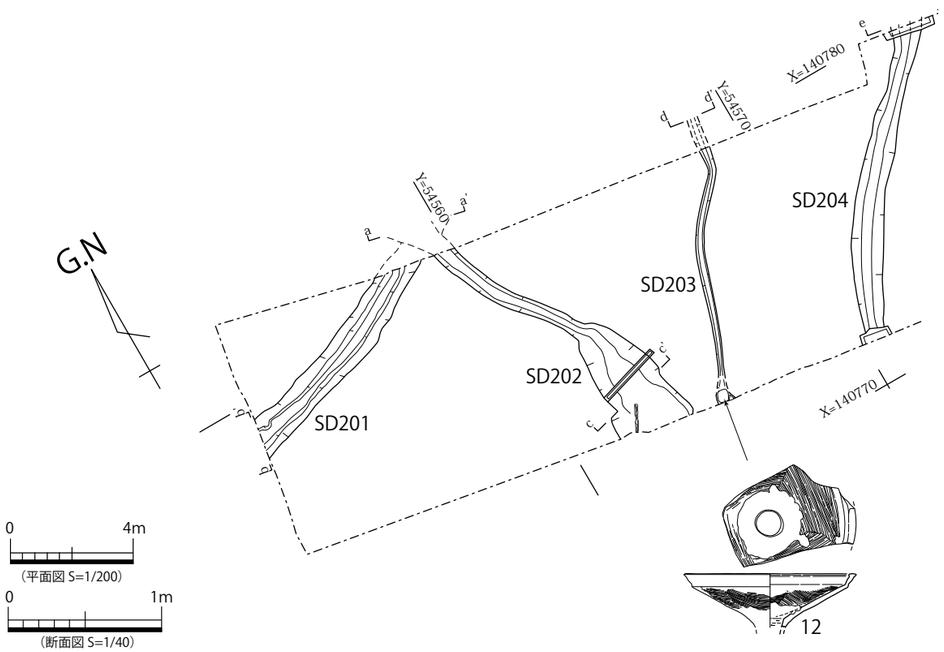


1. 5G6/1 緑灰　極粗粒砂混じりシルト
2. 2.5Y7/4 浅黄 極粗粒砂
3. 5G6/1 緑灰　極粗粒砂～粗粒砂
4. 10Y3/2 オリーブ黒 粘土混じり粗粒砂
5. 5G6/1 緑灰　細粒砂混じり粘土

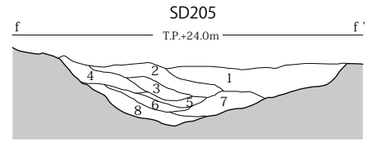


1. N3/ 暗灰　粘質土　（上層）
2. 2.5GY6/1 オリーブ灰 粗粒砂　1 層を 10% 含む。
3. 5GY6/1 オリーブ灰　極細粒砂
4. N4/ 灰　粗粒砂混じり粘土
5. 2.5Y7/4 浅黄　シルト～粘土　粗粒砂を 10% 含む。
6. N3/ 暗灰　粘土
7. 2.5GY6/1 オリーブ灰 粗粒砂
8. 5GY6/1 オリーブ灰極粗粒砂～シルト

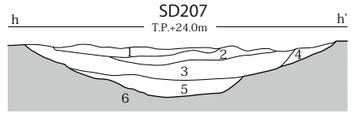
（下層）



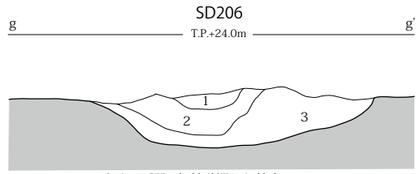
第９図　ＳＤ201・ＳＤ202・ＳＤ203・ＳＤ204 平面図・断面図



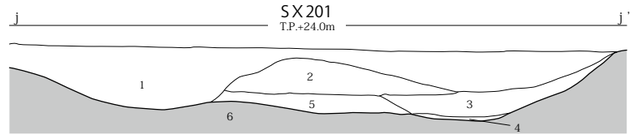
1. 10YR4/6 褐　粗粒砂
2. 10YR4/3 にぶい黄褐 極粗粒砂
3. 10YR3/4 暗褐　極粗粒砂
4. 10YR4/3 にぶい黄褐 中粒砂
5. 10YR4/2 灰黄褐　中粒砂～細粒砂
6. 10YR5/3 にぶい黄褐 中粒砂
7. 10YR4/6 褐　中粒砂～細粒砂
8. 10YR6/3 にぶい黄橙 細粒砂



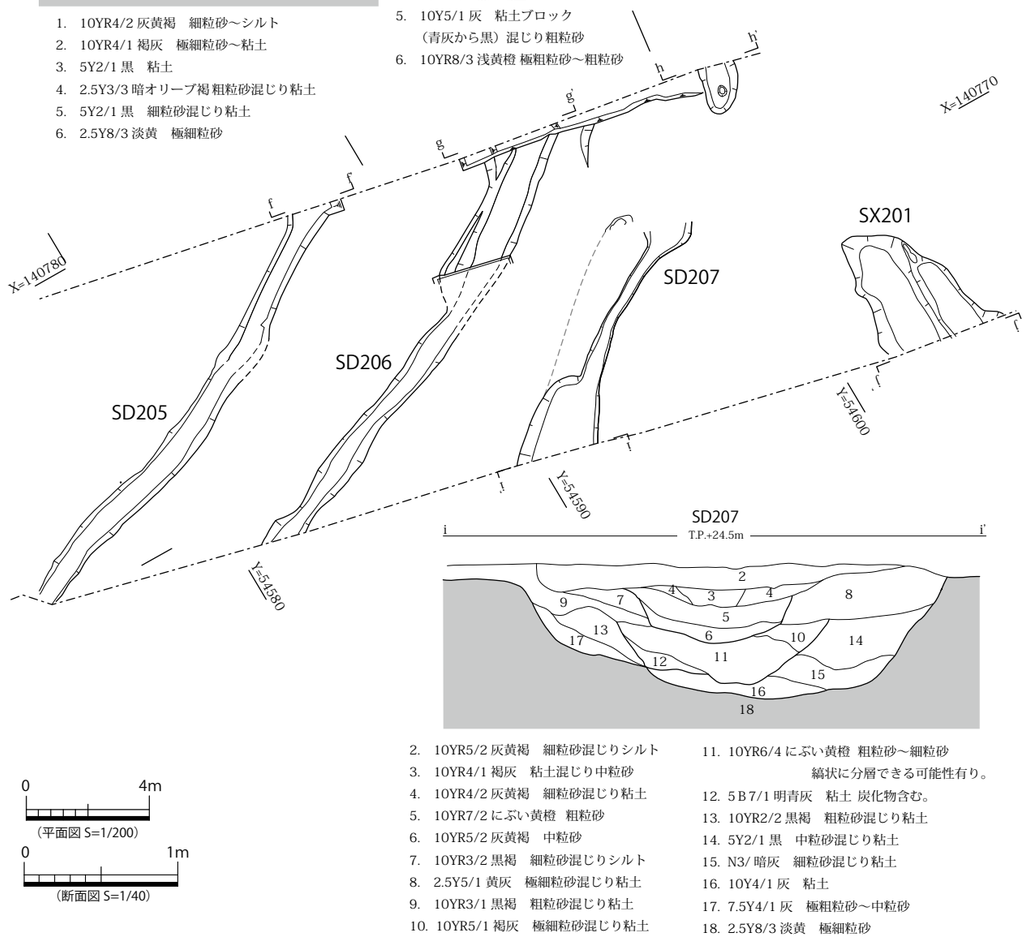
1. 10YR4/2 灰黄褐　細粒砂～シルト
2. 10YR4/1 褐灰　極細粒砂～粘土
3. 5Y2/1 黒　粘土
4. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 粗粒砂混じり粘土
5. 5Y2/1 黒　細粒砂混じり粘土
6. 2.5Y8/3 淡黄　極細粒砂



1. 5Y3/1 オリーブ黒　粗粒砂混じり粘土
2. 5Y4/1 灰　細粒砂混じりシルト
3. 5Y3/2 オリーブ黒　細粒砂～粘土



1. 7.5YR2/1 黒　中粒砂混じり粘土　土器片を含む。
2. 10YR5/3 にぶい黄褐　中粒砂　　粘土ブロック（青灰～黒）10% を含む。
3. 10YR8/4 浅黄橙　粗粒砂
4. 10YR2/1 黒　粘土
5. 10Y5/1 灰　粘土ブロック
   （青灰から黒）混じり粗粒砂
6. 10YR8/3 浅黄橙 極粗粒砂～粗粒砂



2. 10YR5/2 灰黄褐　細粒砂混じりシルト
3. 10YR4/1 褐灰　粘土混じり中粒砂
4. 10YR4/2 灰黄褐　細粒砂混じり粘土
5. 10YR7/2 にぶい黄橙　粗粒砂
6. 10YR5/2 灰黄褐　中粒砂
7. 10YR3/2 黒褐　細粒砂混じりシルト
8. 2.5Y5/1 黄灰　極細粒砂混じり粘土
9. 10YR3/1 黒褐　粗粒砂混じり粘土
10. 10YR5/1 褐灰　極細粒砂混じり粘土
11. 10YR6/4 にぶい黄橙 粗粒砂～細粒砂
    縞状に分層できる可能性有り。
12. 5B7/1 明青灰　粘土 炭化物含む。
13. 10YR2/2 黒褐　粗粒砂混じり粘土
14. 5Y2/1 黒　中粒砂混じり粘土
15. N3/ 暗灰　細粒砂混じり粘土
16. 10Y4/1 灰　粘土
17. 7.5Y4/1 灰　極粗粒砂～中粒砂
18. 2.5Y8/3 淡黄　極細粒砂

第 10 図　ＳＤ205・ＳＤ206・ＳＤ207・ＳＸ201 平面図・断面図

埋土は５層に分かれ大別すると３層にまとまる。上層は緑灰色極粗粒砂混じりシルト、中層は緑灰色極粗粒砂、下層は緑灰色細粒砂混じり粘土が堆積する。いずれもグライ化著しく、堆積物の粒径などから流水があったことを示している。北壁際でＳＤ 202 上層に切られる。

遺物は出土していないが、下層では木片が混入していた。

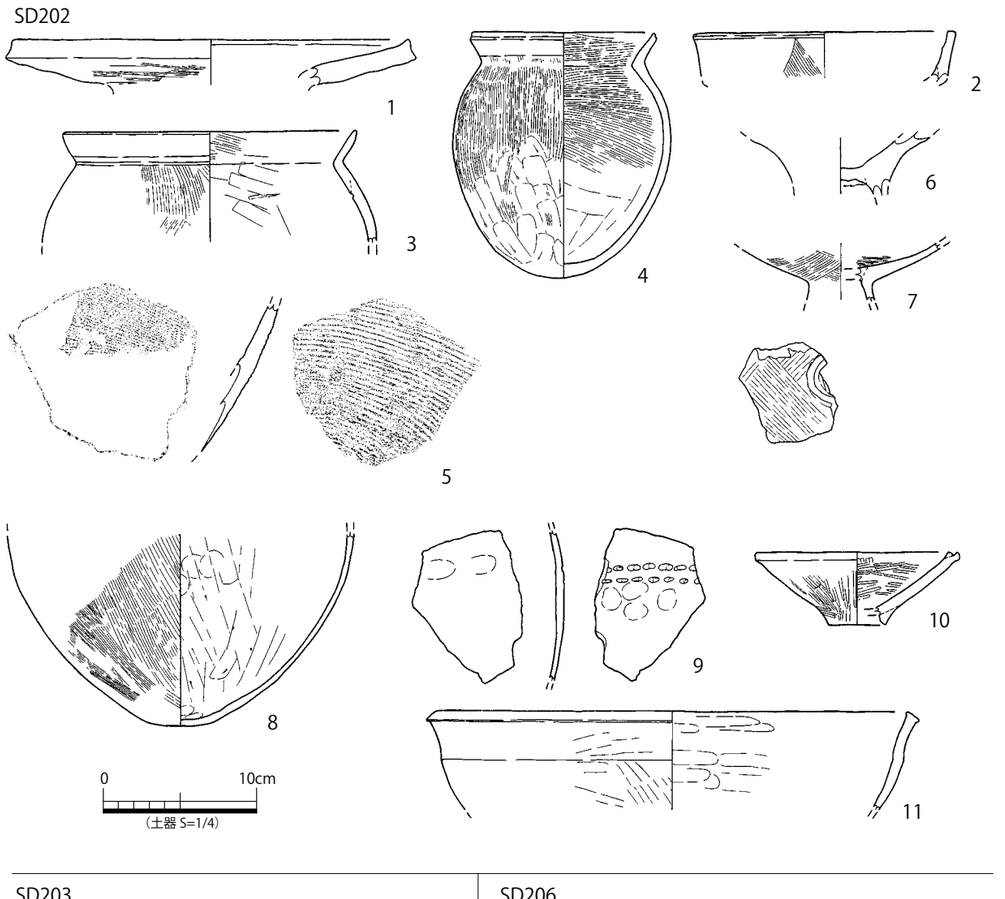
ＳＤ 202（第９・11 図）　ＳＤ 201 の東側に位置し、Ⅶ層上面で検出した。本溝は上層と下層に大別できる。上層は幅狭で 0.55 m、深度 0.28 mを測り、調査区外に延伸している。埋土は粘性の強いシルト～粘土である。下層は幅広で 1.95 m、深度 0.38 mを測り中央付近で終息し、北へは続かない。掘方は逆台形状を呈し、埋土は粘質土と砂がラミナ状の互層堆積をしていることから、流水と滞水を繰り返しながら埋没が進んだことが窺える。ＳＤ 202 は、第１遺構面で検出したＳＤ 118 と位置や平面形が同一であることから、第２遺構面で検出した他の溝とは機能や契機の差ではなく時期差と特定できる。

遺物は上層と下層が重複する南側の幅広の箇所で出土している。下層では木杭や木片が多量に混入していた。上層からは、１～７、下層からは８～ 11 が出土している。１は広口壺で、角閃石を密に含むいわゆる下川津Ｂ類（大久保 1990）の胎土である。口縁が大きく開き、端面は上方に拡張されている。２は器台か複合口縁壺の２次口縁部で、白色を呈し、外面に線鋸歯文を施す。吉備系の可能性がある。３は甕である。４は南壁近くの東肩付近で出土した完形の甕である。倒卵形の体部で、口縁部は直線的に外傾する。底部は丸底化が完了している。信里編年（信里 2011）Ｍ７かＯ６形式にあたる。５は底部に近い体部片で外面に明瞭なタタキ痕を残す。６・７は円盤充填の高杯である。６は胎土が粗い。７は下川津Ｂ類の胎土で、橙色を呈し、内外面に分割ヘラミガキを施す。８は甕で、底部の平坦面はわずかに残り、ケズリ調整によって器壁を薄く仕上げている。９は甕の体部片で刺突文が２段巡る。10 は上げ底の鉢で、口縁内面に突帯を貼り付ける。内外面はミガキを施す。11 は無文粗製鉢である。体部と口縁の境に段を持ち、口縁端部は面を持つ。縄文時代晩期から弥生時代前期前半まで下る可能性がある。

本溝は、上層より古墳時代前期前半古段階の土器が出土しており、この時期が最終埋没期と考えられる。一方下層からは、弥生時代前期から終末までの土器が出土しており巨視的に見て開削時期は、弥生時代前期までを上限とする。但し、そこまで遡る土器はわずか１点のみの出土で、最終埋没時期との時間幅が長く、基盤となるⅧ層の脆弱性を勘案し、混入品の可能性も考えられる。

ＳＤ 203（第９・11 図）　第２節で述べたとおり、本溝は上端を削平しており、底部のみの検出となった。北壁（第７図）の観察により、Ⅵ層上面から掘り込まれている。北から南西方向に掘削されており、幅 0.25 m、深度 0.3 mを測る。溝底部の標高は、北側が 23.65 m、南側が 23.6 mと、高低差が少ない。掘方はＵ字状を呈する。埋土は７層に分かれ粘土とオリーブ灰色極粗粒砂の互層堆積である。堆積物の粒径などから緩やかな流水があったことを示している。

遺物は 12 の高杯１点のみで調査区南壁沿いの溝底部で出土した。12 は杯部内外面に横方向４



第 11 図　ＳＤ 202・ＳＤ 203・ＳＤ 206・ＳＤ 207 出土遺物実測図

分割ヘラミガキ、脚部内面はヘラケズリが施されている。下川津Ｂ類胎土である。信里編年のＤ形式にあたり、所属時期は弥生時代後期前半新段階に相当し、本溝の上限を求めることができる。

ＳＤ 204（第９図）Ⅵ層上面で検出した。北から南西方向に掘削されており、幅 0.9 m、検出面からの深さは最も深い箇所で 0.2 mである。底部の標高はほとんど高低差がなく、南側が若干低くなっているが、流れの方向は判断し難い。掘方はＵ字状を呈する。埋土は２層に分かれ、粒径は粗く２層上面は鉄分が沈着している。

遺物は、細片のため図化できないが、弥生土器片が出土している。

ＳＤ 205（第 10 図）Ⅴ層直下、Ⅷ層上面で検出した。南西から北東方向に掘削されており、幅 1.1 m、検出面からの深さは最も深い箇所で 0.45 mである。底部の標高は、北側が低くなっており北東方向に流れると考えられる。掘方は浅いＵ字状を呈し、平面形は円弧を描く。埋土はⅧ層起源の細粒砂から極粗粒砂である。

遺物は出土していない。

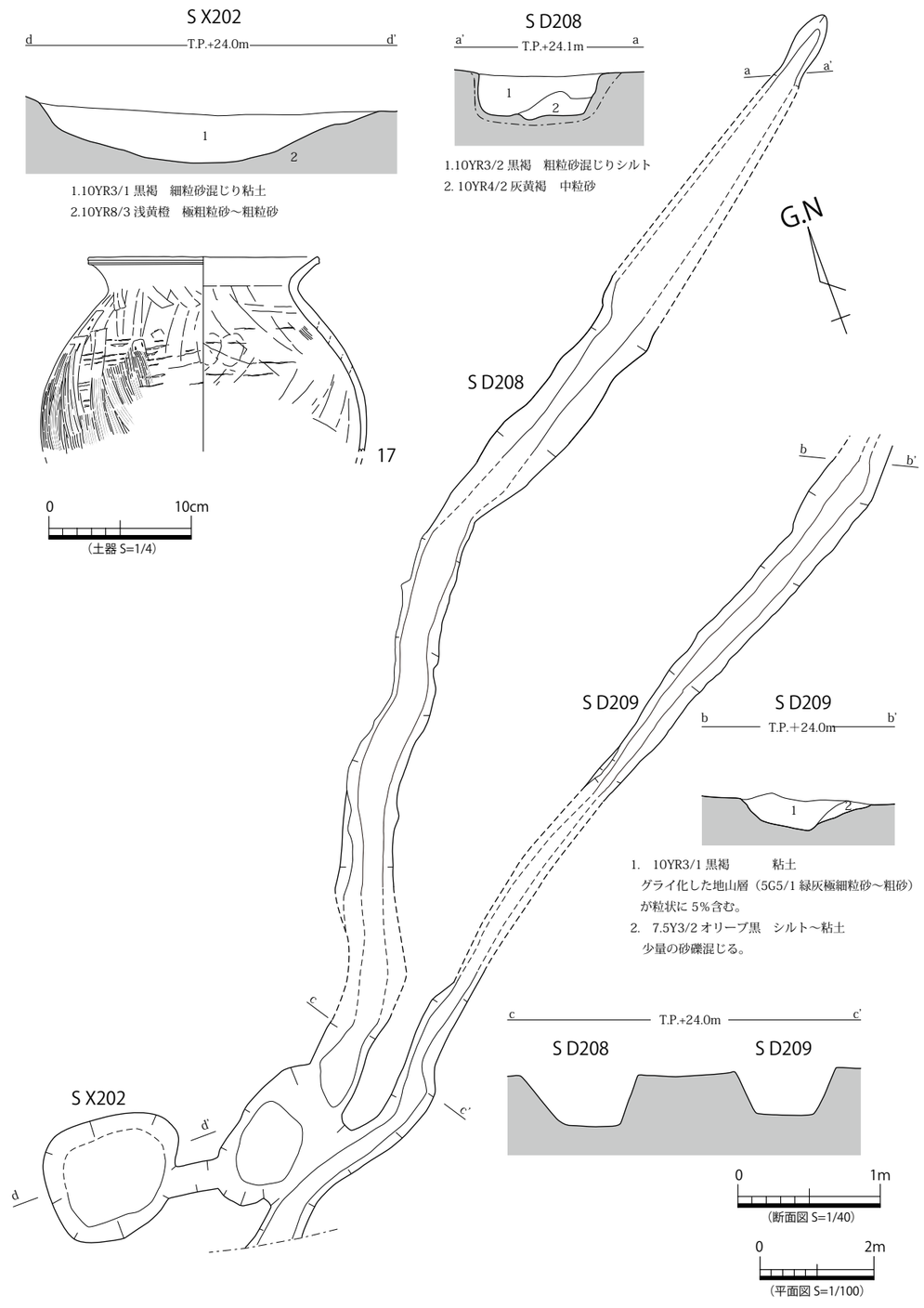
ＳＤ 206（第 10・11 図）Ⅴ層直下、Ⅷ層上面で検出した。南西から北東方向に掘削されており、幅 0.7 ～ 1.5 m、検出面からの深さは最も深い箇所で 0.38 mである。底部の標高は、北側が低くなっており北東方向に流れると考えられる。掘方は浅いＵ字状を呈し、平面形は円弧を描く。埋土はグライ化した極粗粒砂混じりシルト～粘土で、ベースのⅧ層を起源とする。

13 は広口壺である。頸部がやや外傾し口縁部にかけて大きく外反する。口縁端部は下方に拡張し、櫛描き工具による列点文、頸部にヘラ描き直線文を巡らす。口頸部内外面は丁寧なミガキを施す。14 は大型の甕の口縁部である。白色を呈し頸部がくの字状に屈曲し口縁は短く外反する。その他、細片のため図化はできないが弥生土器片が出土している。

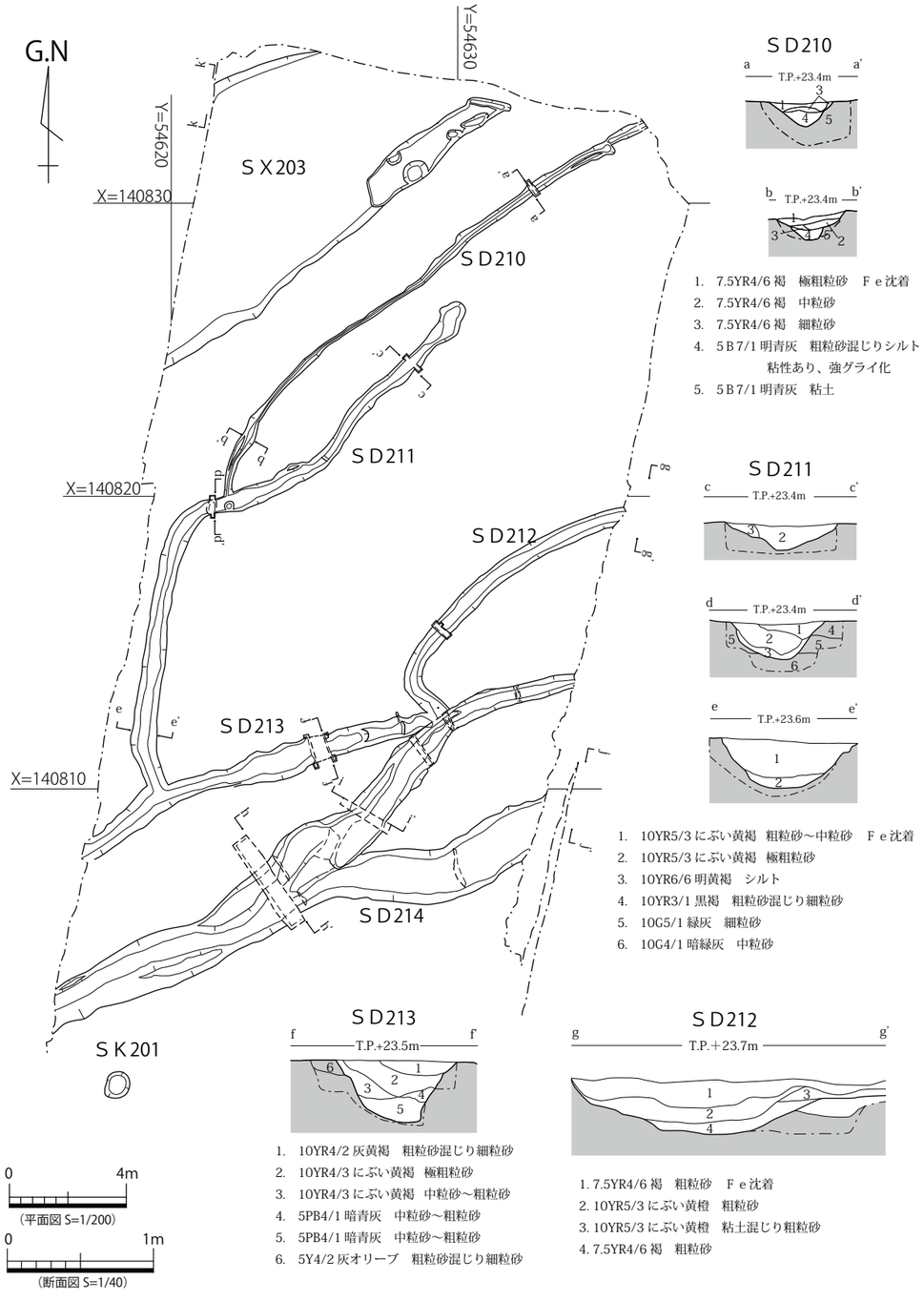
ＳＤ 207（第 10・11 図）　３区中央、ＳＤ 205・ＳＤ 206 と並走する溝群の西端に位置し、Ⅷ層上面で検出した。南西から北東方向に掘削されていると考えられるが、第２節で述べたとおり北側は連続して検出できなかった。底部の標高は、北側が低くなっており北東方向に流れると考えられる。掘方は南壁では深い逆台形状を呈し 0.7 mと深いが、北壁では 0.32 mと浅い。南壁断面土層（i-i'）の観察から最低３回の再掘・改修を想定できる。埋土は 16 層に分かれ大別すると３層にまとまる。上層は灰黄褐色粗粒砂、中層はにぶい黄褐色粗粒砂、下層は黒色の粗粒砂混じり粘土を主体としている。堆積物の粒径などから流水があったことを示している。

遺物は僅少だが、上層より 15・16 が出土している。15 は灰白色を呈する甕で、肩部はほとんど張らず口頸部は緩く屈曲し、端部がやや上方につまみあげられている。16 はローリングを受けている。信里編年高杯Ｅ１類にあたり、弥生時代後期前半以降に所属する。これらは、本溝の最終埋没期を示すものと考えられる。

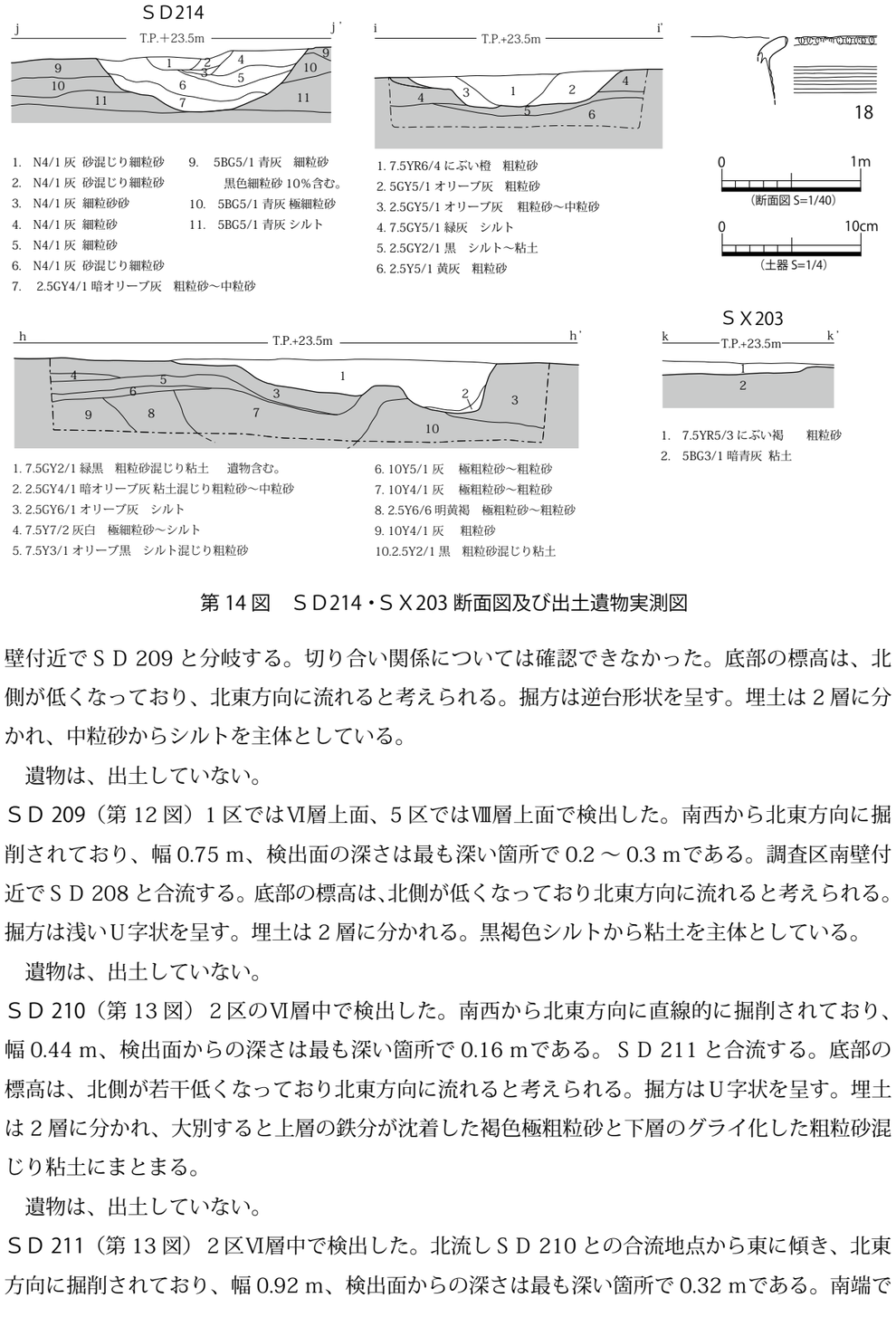
ＳＤ 208（第 12 図）本溝は１区と５区にまたがって検出しており、５区では調査の都合上Ⅷ層上面で検出しているが、１区ではⅤ層上面での掘り込みが認められた（第６図）。南西から北東方向に掘削されており、幅 1.0 m、検出面からの深さは最も深い箇所で 0.3 mである。調査区南



第 12 図　ＳＤ208・ＳＤ209・ＳＸ202 平面図・断面図及び出土遺物実測図



第 13 図　SD210 ～ SD214・SX203 平面図・断面図



第 14 図　ＳＤ214・ＳＸ203 断面図及び出土遺物実測図

壁付近でＳＤ 209 と分岐する。切り合い関係については確認できなかった。底部の標高は、北側が低くなっており、北東方向に流れると考えられる。掘方は逆台形状を呈す。埋土は２層に分かれ、中粒砂からシルトを主体としている。

遺物は、出土していない。

ＳＤ 209（第 12 図）１区ではⅥ層上面、５区ではⅧ層上面で検出した。南西から北東方向に掘削されており、幅 0.75 m、検出面の深さは最も深い箇所で 0.2 ～ 0.3 mである。調査区南壁付近でＳＤ 208 と合流する。底部の標高は、北側が低くなっており北東方向に流れると考えられる。掘方は浅いＵ字状を呈す。埋土は２層に分かれる。黒褐色シルトから粘土を主体としている。

遺物は、出土していない。

ＳＤ 210（第 13 図）２区のⅥ層中で検出した。南西から北東方向に直線的に掘削されており、幅 0.44 m、検出面からの深さは最も深い箇所で 0.16 mである。ＳＤ 211 と合流する。底部の標高は、北側が若干低くなっており北東方向に流れると考えられる。掘方はＵ字状を呈す。埋土は２層に分かれ、大別すると上層の鉄分が沈着した褐色極粗粒砂と下層のグライ化した粗粒砂混じり粘土にまとまる。

遺物は、出土していない。

ＳＤ 211（第 13 図）２区Ⅵ層中で検出した。北流しＳＤ 210 との合流地点から東に傾き、北東方向に掘削されており、幅 0.92 m、検出面からの深さは最も深い箇所で 0.32 mである。南端で

ＳＤ 213 と合流する。底部の標高は北側が若干低くなっており北東方向に流れると考えられる。掘方はＵ字状を呈す。埋土は大別すると２層に分かれ、上層のにぶい黄褐色極粗粒砂と下層のシルトにまとまる。

遺物は、出土していない。

ＳＤ 212（第 13 図）２区Ⅵ層中で検出した。南西から北東方向に掘削されており、幅 0.7 m、検出面の深さは最も深い箇所で 0.36 mである。南端でＳＤ 213・ＳＤ 214 と合流する。ＳＤ 213 との前後関係不明であるが、ＳＤ 214 には切られる。底部の標高は北側が若干低くなっており北東方向に流れると考えられる。掘方は浅いＵ字状を呈す。埋土は粗粒砂層が主体とし、他の２区の溝と同じく上層には鉄分の沈着が顕著である。

遺物は、出土していない。

ＳＤ 213（第 13 図）２区Ⅵ層上面で検出した。南西から北東方向に掘削されており、幅 1.0 m、検出面からの深さは最も深い箇所で 0.42 mである。底部の標高は北側が若干低くなっており北東方向に流れると考えられる。掘方は逆台形状を呈し南肩は緩やかだが、北肩は急である。埋土は粗粒砂層を主体とし、他の２区の溝と同じく上層には鉄分の沈着が顕著である。

遺物は、出土していない。

ＳＤ 214（第 13・14 図）２区のⅦ層とⅧ層上面で検出した。西から東方向に掘削されており調査区中央で二又に分流する。幅 1.1 ～ 2.2 m、検出面からの深さは最も深い箇所で 0.38 mである。底部の標高は北側が若干低くなっており、北東方向に流れると考えられる。掘方はＵ字状を呈し、底面は起伏がある。埋土は分岐前で黒色の粗粒砂混じり粘土層、北側はにぶい橙色の粗粒砂層と南側はグライ化した粗粒砂層となっている。

遺物は、分岐した北側の溝底から 18 の弥生時代前期後半の甕が出土した。18 は如意状の口縁部で、体部上半にヘラ描き沈線文、口縁端部に刻み目が見られる。その他図示できない弥生土器片や木片が出土した。

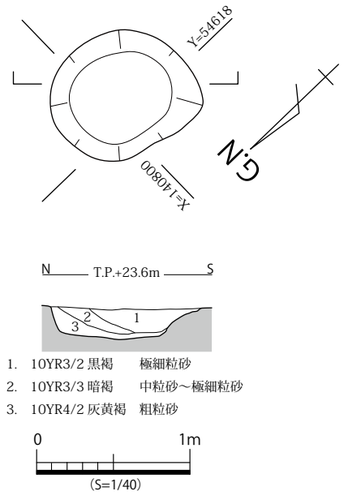
２　土坑（ＳＫ）

ＳＫ 201（第 15 図）２区の南側、Ⅷ層上面で検出した。長軸幅 0.9 m、短軸幅 0.8 mの円形で、検出面からの深さは 0.2 mである。埋土は黒褐～灰黄褐色の極粗粒砂である。

遺物は、出土していない。

３　性格不明遺構（ＳＸ）

ＳＸ 201（第 10 図）Ⅷ層上面で検出した。幅 4.0 m、検出面からの深さは最も深い箇所で 0.4 mである。掘方は浅い落ちこみを呈す。埋土は大別して２層に分かれ、上層の黒色の中粒砂混じり粘土と下層の粗粒砂で構成される。下層はⅦ層起源の粗粒砂が主で黒色粘土ブロックや黒色粘土の薄層がラミナ状に混在することから、一定程度の緩い流水と滞水状況があったことが窺がえ、上層と下層で２単位の溝の可能性がある。



第 15 図　ＳＫ 201 平面図・断面図

遺物は、細片のため図化できないが土器片が出土している。

ＳＸ 202（第 12 図）ＳＤ 208 とＳＤ 209 の合流地点の西側、Ⅷ層上面で検出した。長軸幅 2.4 m、短軸幅 2.1 m、検出面からの深さは最も深い箇所で 0.3 mである。平面形は隅丸方形、掘方は浅いＵ字状を呈す。埋土は単層の黒褐色の粗粒砂混じり粘土で、ＳＤ 208・ＳＤ 209 と連結しており関連するものと考えられる。

遺物は、弥生土器の甕が１点出土している。17 は球形の体部に短く屈曲する口縁部をもつ。体部は煤が付着している。体部外面調整はタタキのちタテケズリのちタテハケ・板ナデを施している。内面は板ナデとハケ調整を施す。信里編年の甕Ｒ４～５にあたり、弥生時代後期後半～終末期に所属する。

ＳＸ 203（第 13 図）２区の北西隅、Ⅶ層上面で検出した。南西から北東方向に掘削された溝状の落ち込みである。幅 6.6 m、検出面の深さは浅く 0.1 mである。埋土は鉄分が沈着した粗粒砂である。遺物は、出土していない。

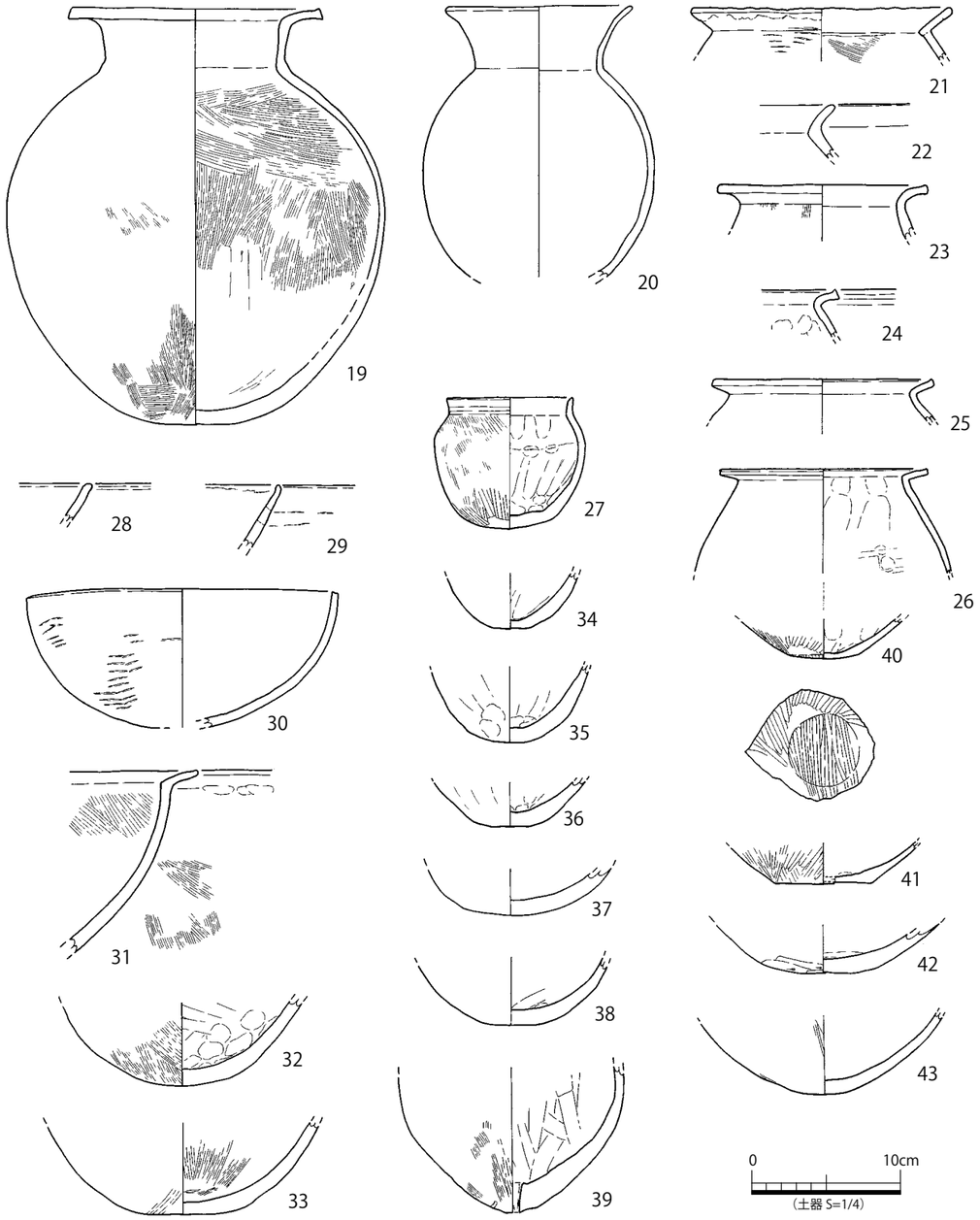
４　遺物包含層

Ａ・Ｂ層（第 7・16 図）　特に遺物がまとまって出土したのがＸ＝ 140775、Y=54613 の辺りで、遺物の出土層位は、ほとんどがＢ層上面で出土し、Ａ層に被覆されていた。摩滅はしているが土器はほぼ完形の状態で出土しており、Ａ層の層相から土砂の堆積による流れ込み等ではなく、一括廃棄の可能性がある。

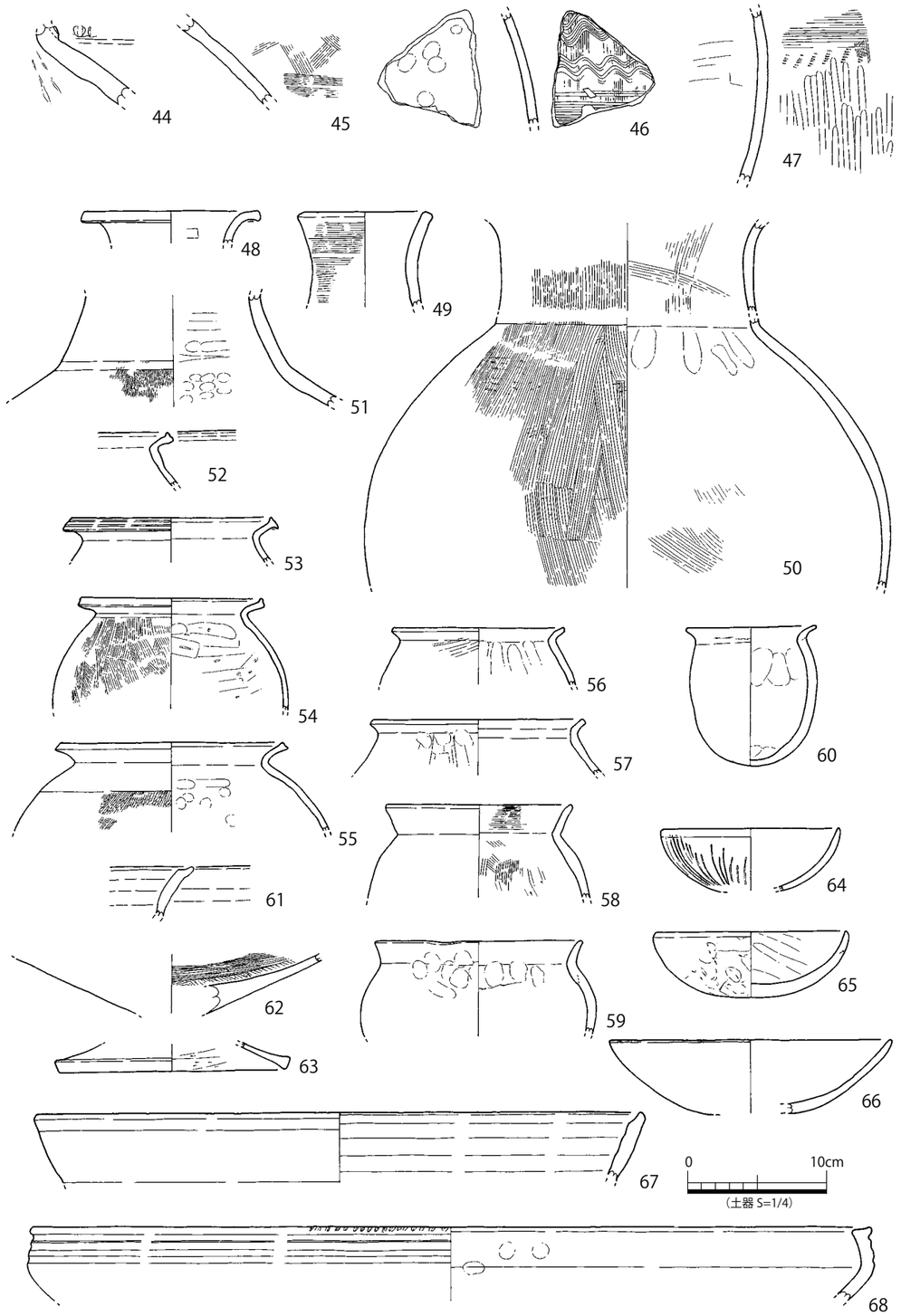
出土した遺物は、コンテナ２箱分ほどの量であった。19 は球形の体部に直立気味の頸部から水平に開く口縁部をもつ完形の広口壺である。横位で出土し、取上げの際には、掘り込み等は確認できず、廃棄後の自然埋没と考えられる。20 もほぼ完形の直口壺である。21 は赤褐色を呈する甕の口縁部である。体部と口縁部の接合痕が明瞭で、内面の屈曲が強い。22・23 は浅黄橙色を呈し、口縁部が緩やかに屈曲する。24・25・26 は褐色を呈する甕の口縁部で、強いナデによる跳ね上げ状口縁を持つ。24・26 の端部外面は沈線状にくぼむ。この特徴は信里編年（信里 2005）Ａ４型式に相当し、中期Ⅱ -2 様式に所属する。27 は橙色を呈する小型の甕である。28・29・30 は直行する口縁部を持つ鉢である。30 は半球形の体部で外面に焼成時剥離が見られる。また底部は被熱により赤変している。31 は口縁部が「く」字状に短く屈曲する。32 ～ 38 は橙色を呈する丸底の底部である。39 は甑の底部である。尖底で焼成前穿孔が見られる。40 ～ 42 は褐色を呈し、底部は平坦面をもち、ミガキ調整が施される。43 は浅黄橙色を呈す底部である。

Ａ・Ｂ層からは弥生時代中期の土器が散見するもののいずれも完形品ではなく、主体を占める

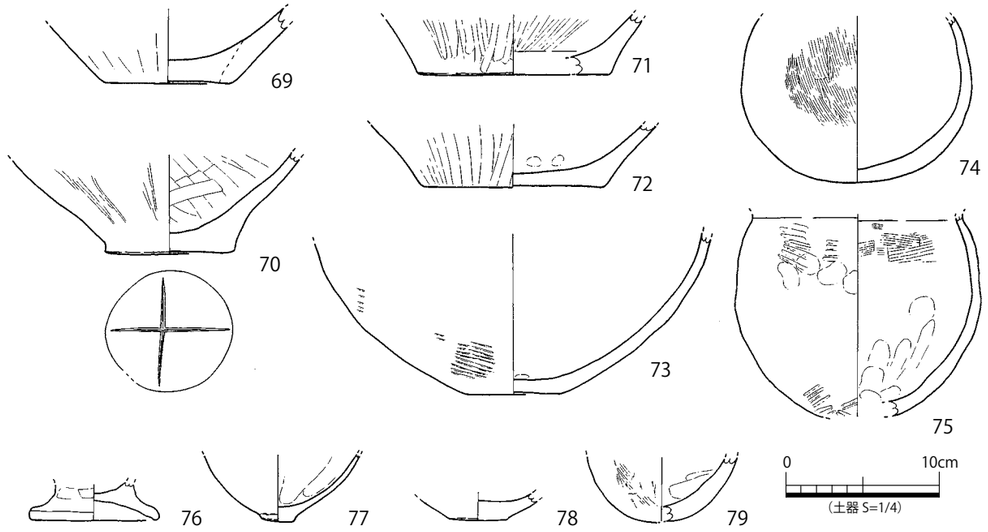
弥生時代終末から古墳時代前期に所属する土器は完形品が多かった。これらのことから、最終埋没時期は古墳時代前期と考えられる。



第 16 図　Ａ・Ｂ層　出土遺物実測図



第 17 図　Ｖ層　出土遺物実測図①



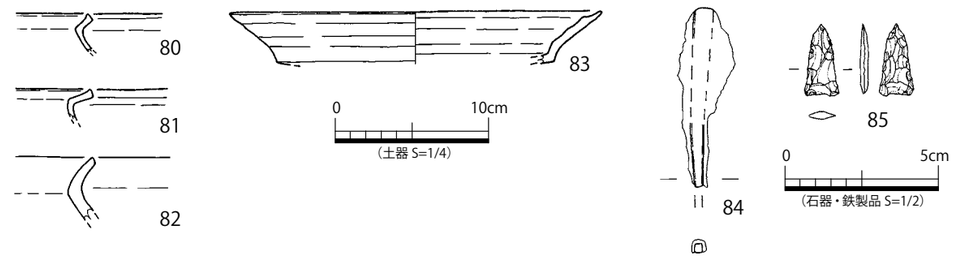
第 18 図　Ⅴ層　出土遺物実測図②

Ⅴ層（第 17・18 図）　44 は体部と頸部の境に押圧突帯が巡る壺である。45・46 は壺の体部で櫛状原体による直線文・斜格子文・波状文などが施される。47 は甕の体部片で櫛状原体による連続刺突文が施される。48 は広口壺の口縁部である。49 は長頸壺で櫛描直線文が施されている。50 は浅黄橙色を呈する壺で、球形の体部、直立する太い頸部をもつ。51 は壺の頸部から体部片で、下川津Ｂ類胎土である。52・53 は明褐色を呈する甕で、口縁端部が上下にやや拡張し１～２状の浅い凹線文が巡る。54 はにぶい橙色を呈し、口縁端部を上方に摘み上げる。55 は球形の体部を持ち、胎土は精良である。56・47 は褐色の甕で、口縁部が短く緩く屈曲する。58 は灰白色を呈し、クサリ礫を多く含む。59・60 は手捏ね土器である。61 ～ 63 は橙色を呈す下川津Ｂ類胎土の高杯である。胎土中に３～５ｍｍのクサリ礫を含む。64 ～ 66 は椀形の鉢である。64 は外面に放射状の線刻が施される。67・68 は大型の鉢の口縁部である。68 は口縁部に凹線文が３条巡り、口縁端部外面に刻み目が施される。69・70 は白色を呈する平底の底部である。70 は底部に十字のヘラ記号が残る。71 ～ 79 は橙色を呈する底部である。

　Ⅴ層出土のうち 44 ～ 55・66・69・70・76 は３区西側で出土しており、弥生時代中期から後期前葉の土器が多い。その他はほとんどが１区出土で、低地部にあたる２区では細片がわずかに出土しただけであった。

5　第２遺構面精査中（第 19 図）

　80・81 は褐色を呈する甕の口縁部である。82 はにぶい黄橙色の口縁部である。83 は下川津Ｂ類胎土の高杯の口縁である。84 は鉄釘、85 はサヌカイト製の平基式石鏃である。



第 19 図　第２遺構面精査中出土遺物実測図

第５節　中世の遺構と遺物

中世で検出した主な遺構には柵列、建物、溝、土坑、ピットなどがある。ほとんどの遺構は座標北に対し、東へ約 11°振っており高松平野の条里地割に合致する。遺構面精査中や遺構の埋土から中世に属する遺物がまとまって出土しており、遺構の形成時期が中世以降であることが明らかである。

１　柵列（ＳＡ）

柵列はその上部構造が不明であるが、柱を一列もしくは二列に立て並べる形態である。いずれも 1 本の柱を単独の柱掘形に埋める「壺堀り掘形」の形態をとる。

ＳＡ 101（第 21 図）ＳＢ 102 とＳＢ 103 の北側に位置し、Ⅲ層直下で検出した。ピットは点在しばらつきがあったが、ＳＡ 102 の東側延長線上に当たることを考慮して一列形態で復元した。規模は 9 間、柱間距離 0.7 ～ 1.4m とばらつきがあり、深さは 0.2 ～ 0.4 ｍである。主軸方位はＮ－ 76°－ Ｗである。柱穴は円形である。

遺物は、SP3051 から完形の皿を含む皿２点、杯 1 点、鍋 1 点がまとまって出土している。

ＳＡ 102（第 21 図）3 区西側、Ⅲ層直下で検出した。規模は 7 × 1 間（幅 0.72 ～ 1.0 ｍ、柱間距離 1.7 ～ 3.5m）の二列並列の配置形態をとる。主軸方位Ｎ－ 79°－ Ｗである。柱穴は円形で、深さは一様に約 0.4 ｍとやや深い。

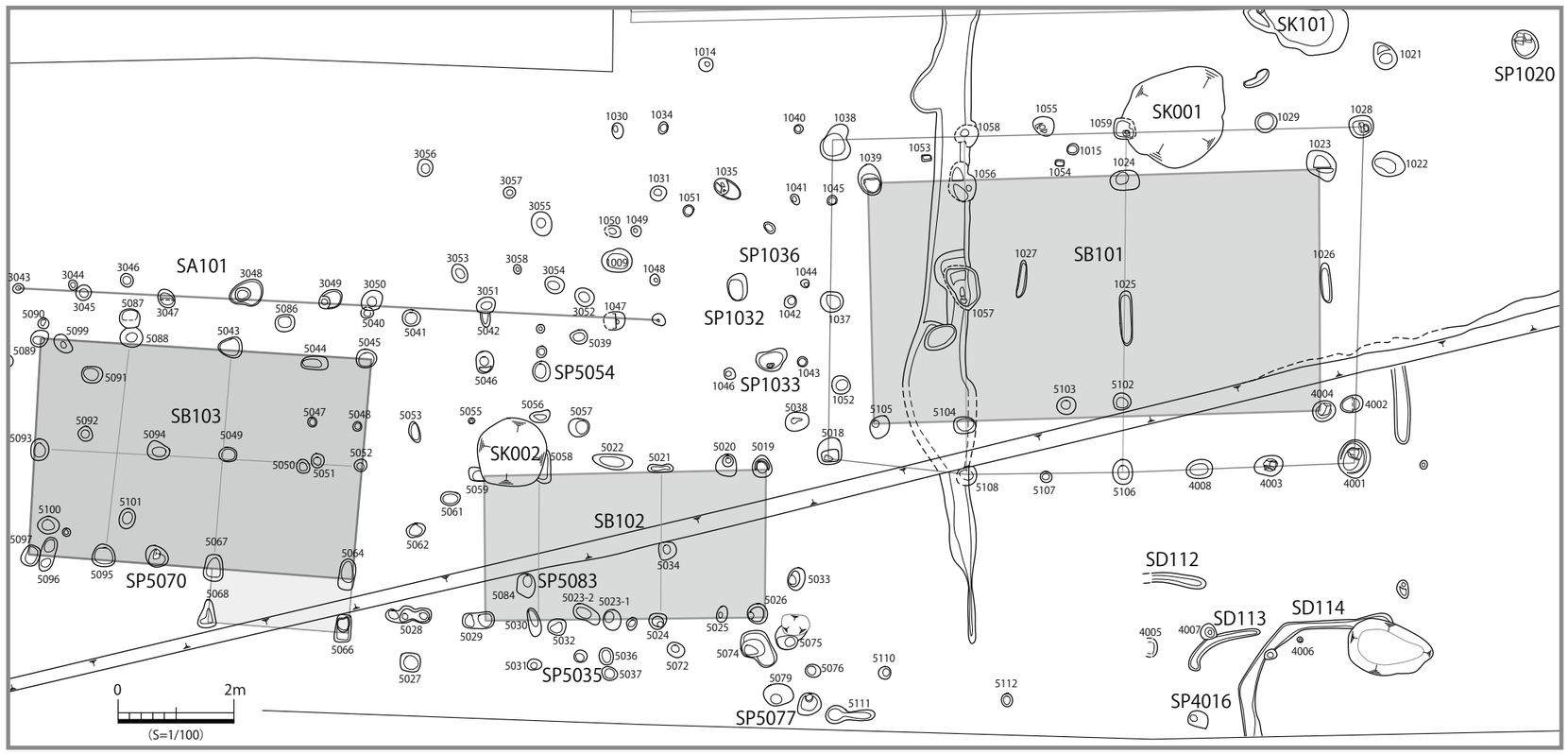
ＳＡ 103（第 22 図）3 区西端、ＳＤ 101 掘削後に検出した。さらに調査区西側に広がり、掘立柱建物になる可能性もあるが、今回は柵列として報告する。規模は 3 × 1 間（幅 0.45 ｍ、柱間距離 3.0 ～ 4.5m）二列並列の配置形態をとる。主軸方位はＮ－ 11°－ Ｅである。柱穴は比較的幅狭の円形で、深さは約 0.2 ～ 0.4 ｍを測る。

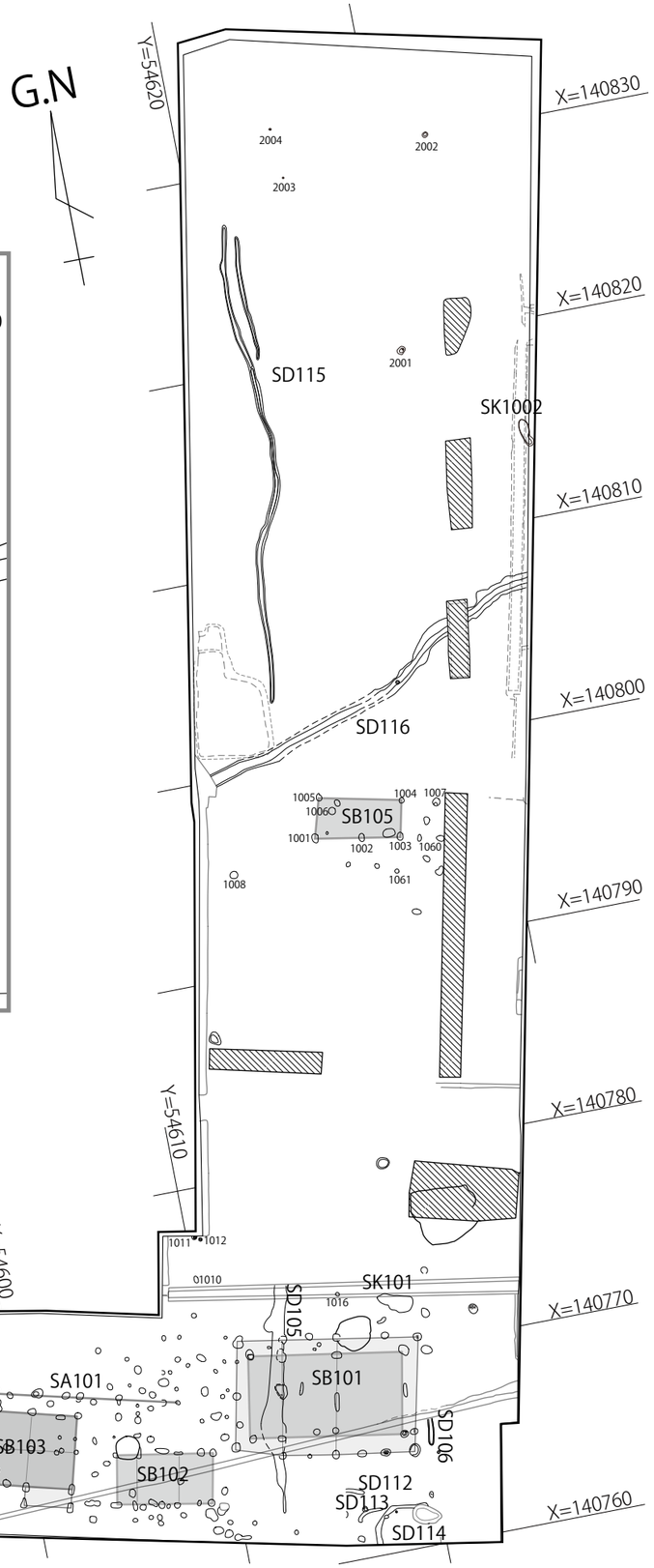
柵列出土の遺物（第 22 図）　86・88・89 は土師質土器の小皿で口径 6.4㎝を測り、底部は回転ヘラ切りである。87 は口径 6.2㎝を測り、底部は回転糸切りである。90 ～ 94 は灰白色を呈する土師質土器の杯である。95 は土師質土器の底部で、底部は回転糸切りによる。96 は土師質土器の鍋である。口縁の屈曲は緩く端部は強いナデによりくぼむ。97 は土師質土器の甕である。98 は凝灰岩製砥石である。断面正方形で角棒状の形態である。石質は比較的肌目が細かく長辺 4 面を砥面として使用している。

出土遺物からＳＡ 101 は、13 世紀第３四半期から 14 世紀前半にあたり、ＳＡ 102 は土器の出土が少ないが、94 の杯の形態から 13 世紀第２～３四半期にあたる。

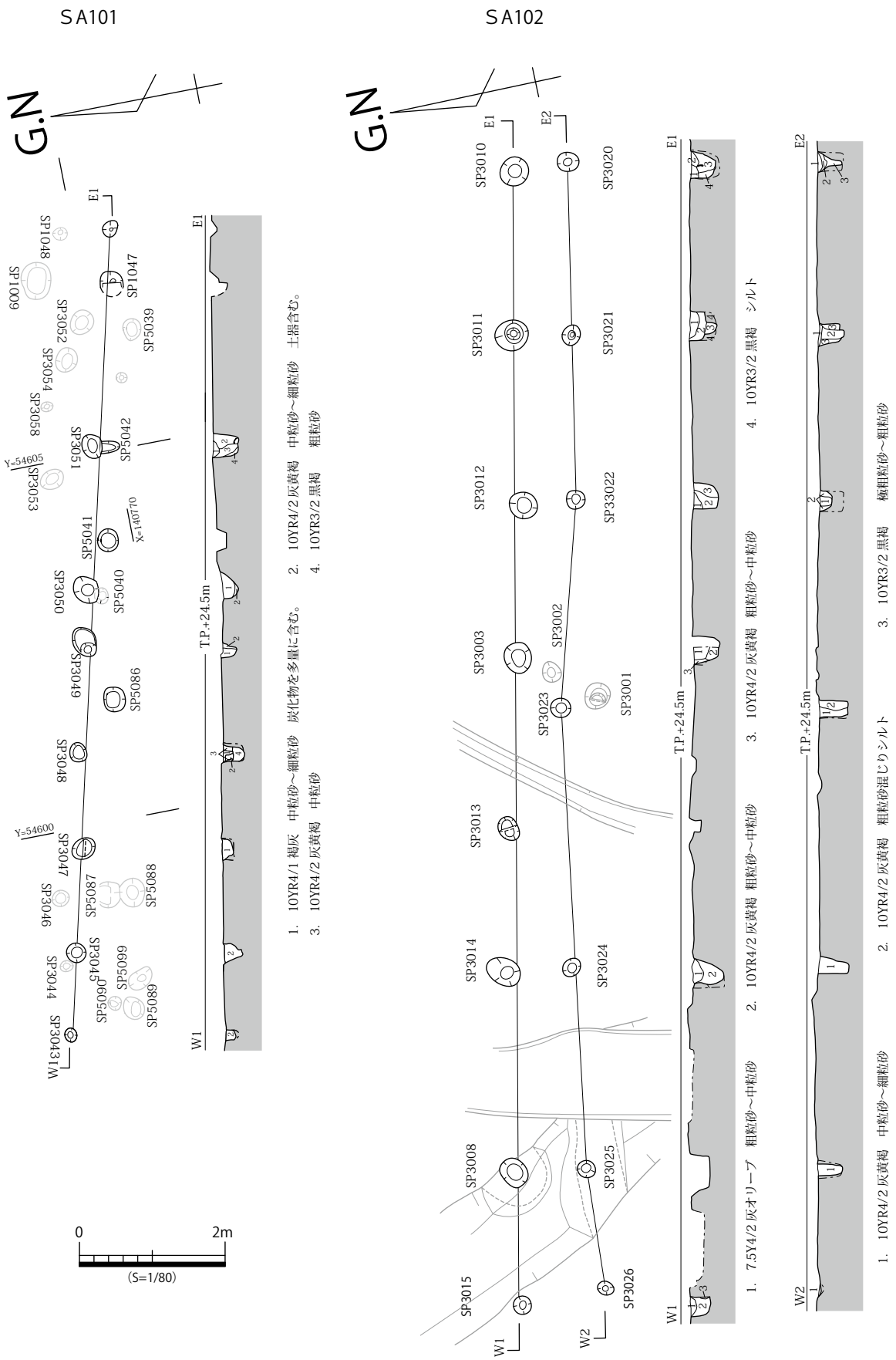
２　掘立柱建物（ＳＢ）

検出した建物はすべて掘立柱建物である。調査区南東部におけるピット集中箇所での掘立柱建物の復元作業にあたっては、後述するＳＢ 101 の確実性を前提として、この建物とほぼ同一方向を指向するピットの並びが調査中に想定できたので、ＳＢ 102・ＳＢ 103 を推定復元するに

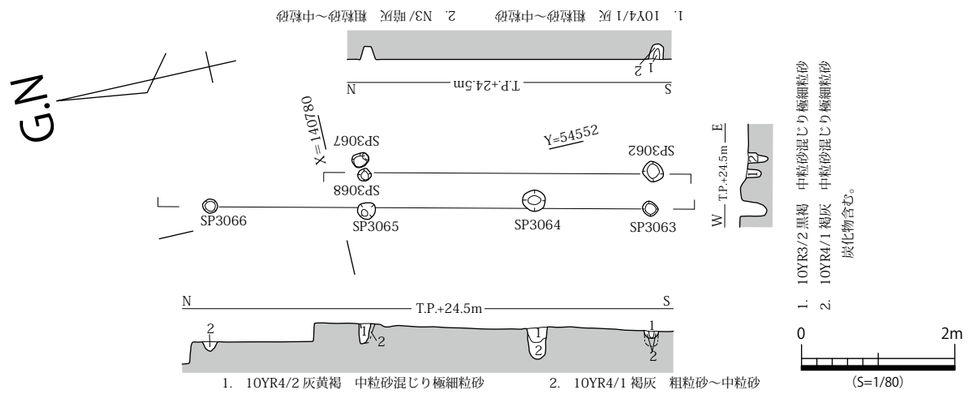


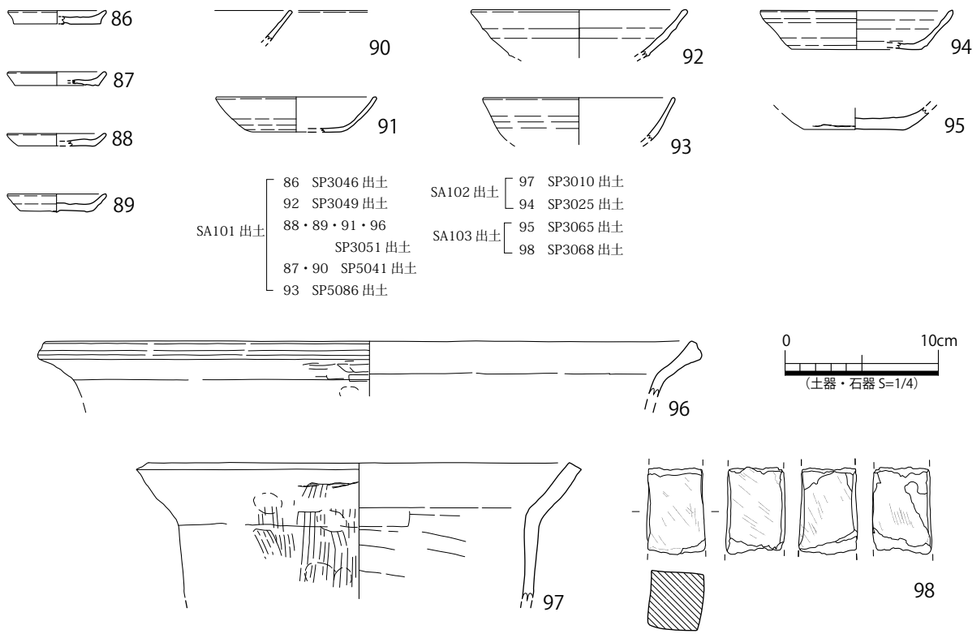


第 20 図　第 1 遺構面遺構配置図



第 21 図　ＳＡ101・ＳＡ102 平面図・断面図

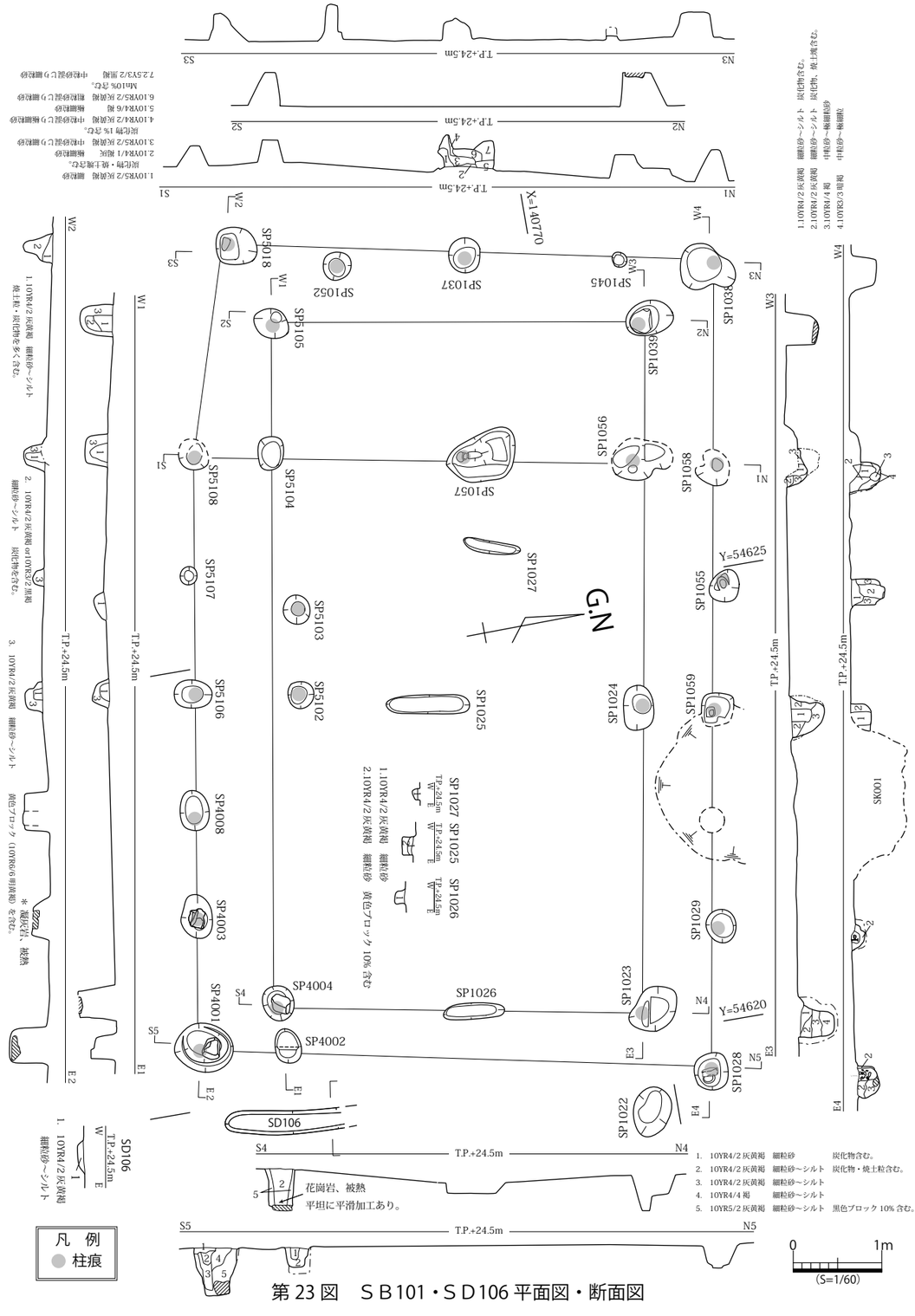




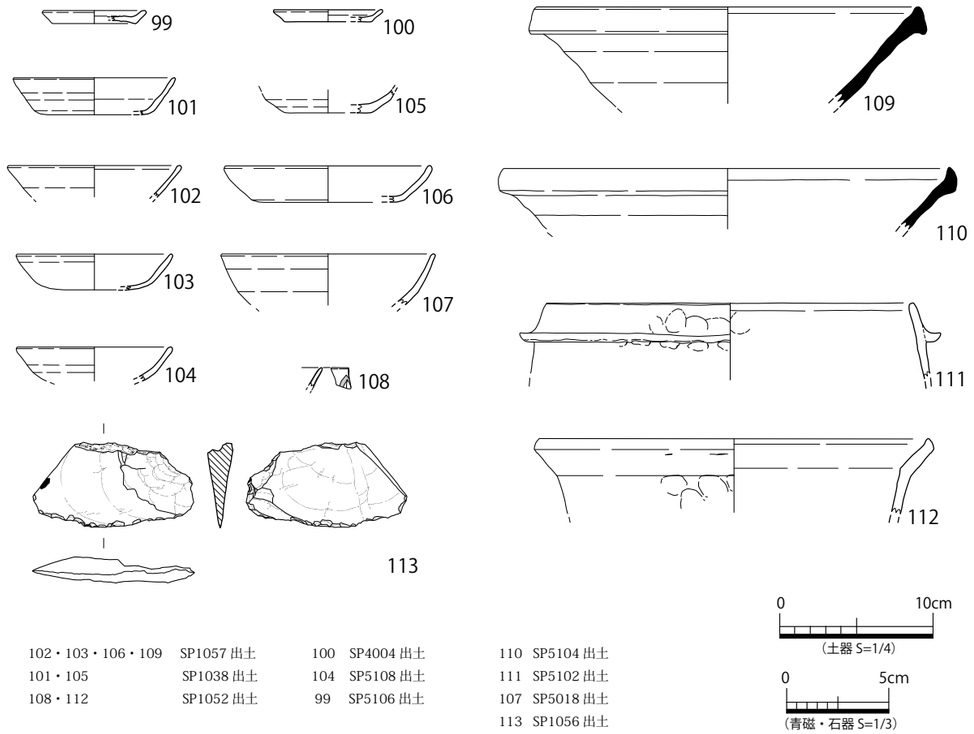
第 22 図　ＳＡ103 平面図・断面図及びＳＡ101・ＳＡ102・ＳＡ103 出土遺物実測図

いたった。

ＳＢ 101（第 23・24 図）１・４・５区で検出した掘立柱建物で、Ⅲ層直下、東側ではⅣ層上面で検出した。やや変則的な柱穴配置をとるが、規模は２×３間（梁間 4.2 m、桁行 7.7 m、床面積 32.34㎡）で、四面庇の総柱建物とすることができる。主軸方位はＮ－ 79°－Ｗの東西棟である。桁行方向西側の１間は幅が広く２×１間の付属屋的な張り出しが見られる。



第 23 図　ＳＢ101・ＳＤ106 平面図・断面図

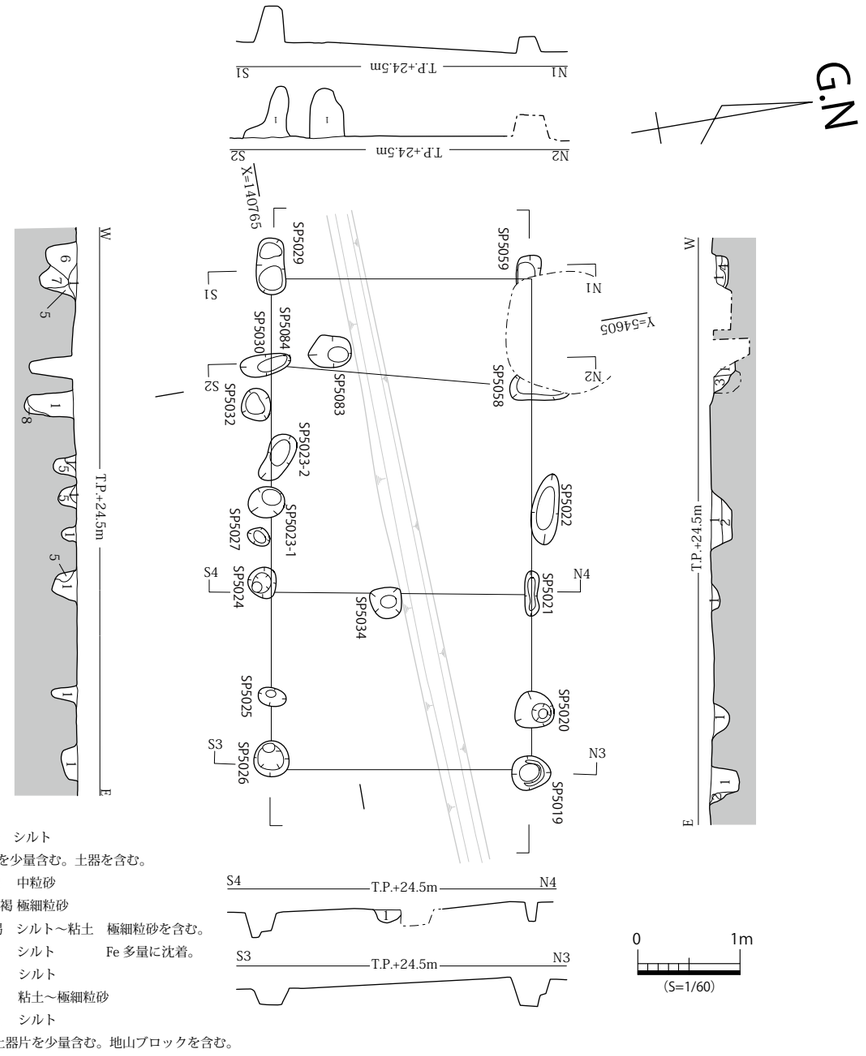


102・103・106・109　SP1057 出土
101・105　SP1038 出土
108・112　SP1052 出土
100　SP4004 出土
104　SP5108 出土
99　SP5106 出土
110　SP5104 出土
111　SP5102 出土
107　SP5018 出土
113　SP1056 出土

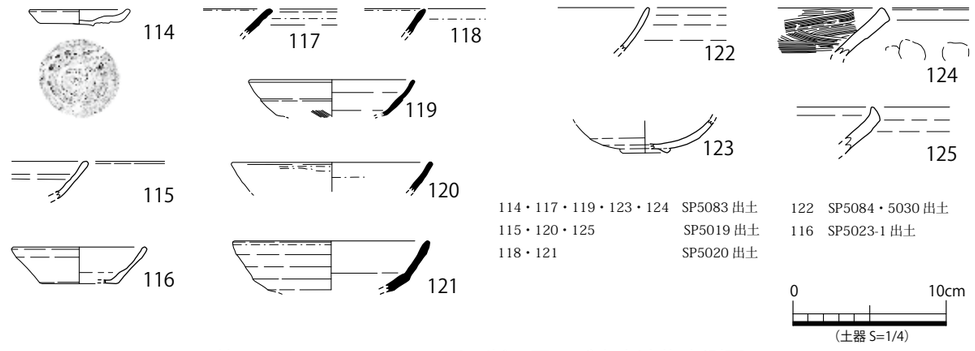
第 24 図　ＳＢ101　出土遺物実測図

入側柱と側柱の四隅の柱穴（ＳＰ 1038・1039、ＳＰ 1028・1023、ＳＰ 4001・4004、ＳＰ 5018・5105）は比較的大きく深く掘り込まれ、大型の花崗岩や凝灰岩を利用した地下式礎石や根石が据え置かれていて、丁寧な地業がなされている。梁間方向の中軸にあたる柱穴（ＳＰ 1025 ～ 1027）は布堀状の浅いもので束柱を支える程度であったと考えられる。いずれの柱穴も柱痕から焼土塊や焼けた柱材の炭化物が残っており、この建物が焼失したと考えられる。

99・100 は土師質土器の小皿で、99 の底部は回転糸切りである。101 ～ 106 は土師質土器の杯である。灰白から浅黄橙色を呈する。107 は土師質土器の椀で、外面は被熱を受けている。108 は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、横田・森田分類 (横田・森田 1978) Ⅰ－５ｂ類に相当する。片彫りによる鎬蓮弁文を巡らせる。109・110 は東播系捏鉢である。109 は口縁端部が下方に拡張し、体部が直線的である。110 は口縁端部が上下に拡張する。被熱により黒色化し外面に煤が付着している。109・110 はいずれも 14 世紀前半から中葉の所産である。111 は足釜で口縁がやや内傾し、突出した顎を貼り付ける。図化はできなかったが、格子タキキが見られる体部片も出土している。この足釜は被熱により赤変著しい。112 は楠井産の鍋である。口縁部が直線的に伸び、端部は面を持つ楠井産Ａ類（佐藤 1995b）の形態であるが、口縁端部のつまみあげは後出的な特徴である。口縁と体部の内面の屈曲は強い。113 はサヌカイト製の剥片である。

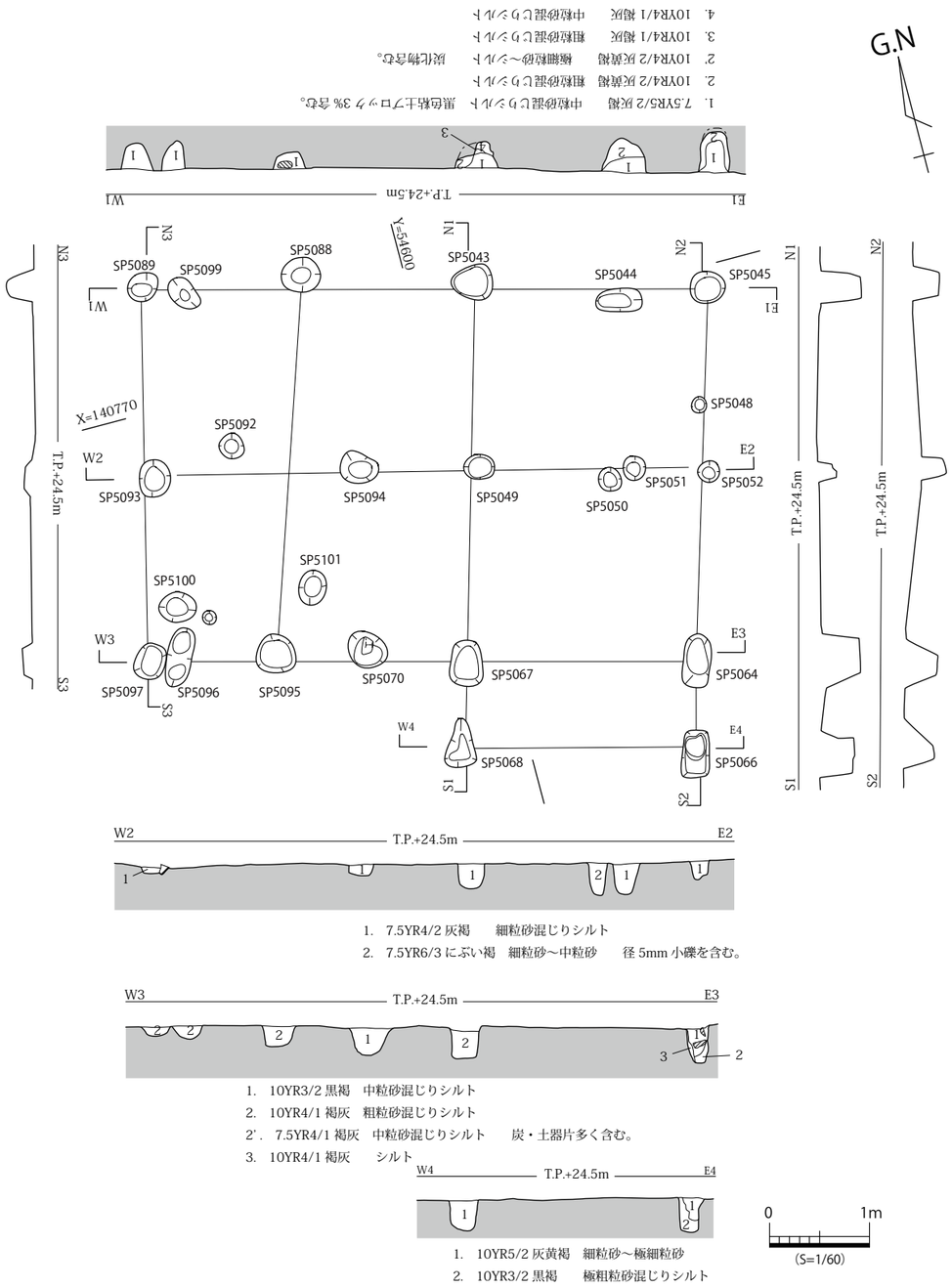


1. 10YR6/1 褐灰　シルト
　炭・焼土片を少量含む。土器を含む。
2. 10YR3/1 黒褐　中粒砂
3. 10YR5/2 灰黄褐 極細粒砂
4. 7.5YR4/2 灰褐　シルト～粘土　極細粒砂を含む。
5. 10YR6/1 褐灰　シルト　Fe 多量に沈着。
6. 10YR6/1 褐灰　シルト
7. 10YR6/1 褐灰　粘土～極細粒砂
8. 10YR6/1 褐灰　シルト
　炭・焼土片・土器片を少量含む。地山ブロックを含む。

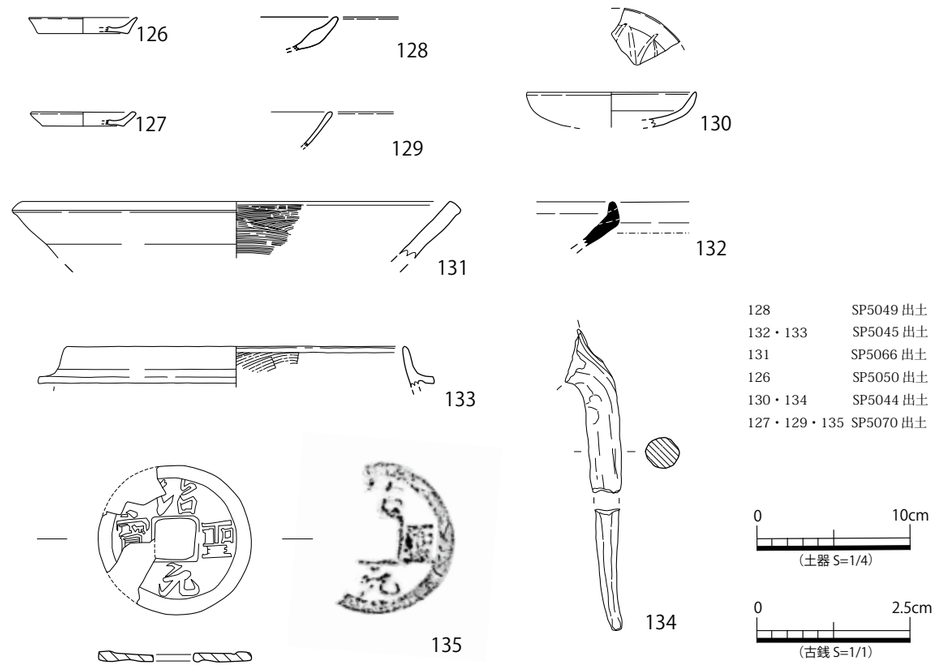


114・117・119・123・124　SP5083 出土
115・120・125　SP5019 出土
118・121　SP5020 出土
122　SP5084・5030 出土
116　SP5023-1 出土

第 25 図　ＳＢ102 平面図・断面図及び出土遺物実測図



第 26 図　ＳＢ103 平面図・断面図



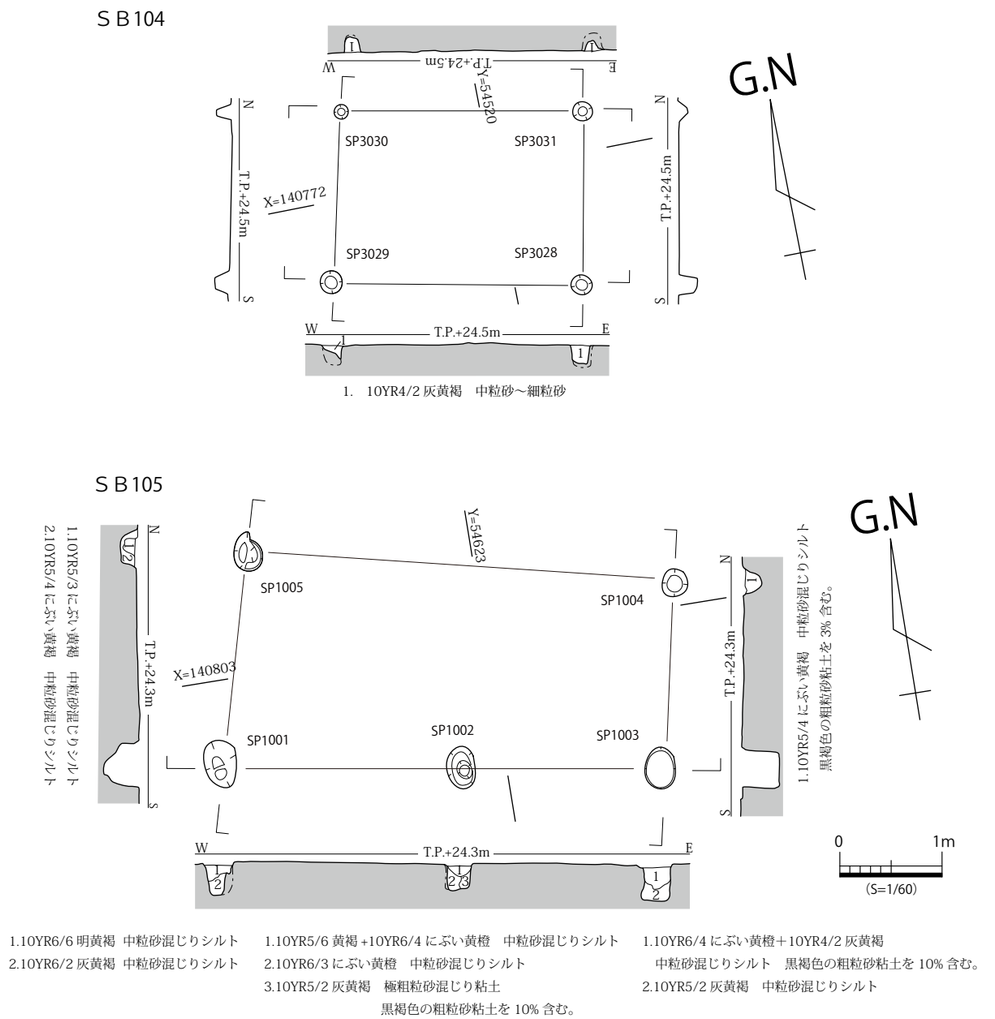
第 27 図　ＳＢ103 出土遺物実測図

遺物は柱穴内より出土したが、意図的な埋納形態は認められなかった。西側の付属的な張り出し部分から多く出土している傾向がある。出土遺物の様相から、本建物は 13 世紀後半から 14 世紀前半に廃絶したものと推定される。

ＳＢ 102（第 25 図）５区、ＳＢ 101 の南西側で検出した。規模は１×３間（梁間 2.5 m、桁行 4.8 m、床面積 12.0㎡）の側柱建物である。主軸方位はＮ－80°－Ｗの東西棟である。平面プランや柱穴底面のレベルは不揃いである。柱穴が重複する箇所があり、部分的な修復が行われた可能性がある。

SP5083 から 114 の完形小皿、117・118 の十瓶山産須恵器、123 の吉備系土師器椀の底部がまとまって出土した。115・116 は土師質土器の杯、119・120 は十瓶山産須恵器椀（杯？）、119 は体部中位で段をもちハケ工具痕が観察できる。121 は体部中位で屈曲し、口縁が外傾する。123 の吉備系土師器椀は、高台が矮小化しており、山本編年（山本悦世 1993）Ⅲ－３期に位置づけられる。124 は楠井産の鍋で、口縁部内面に明瞭なハケを残し、楠井ＡⅡ類にあたる。125 は捏鉢で、口縁端部をつまみあげている。産地は不明である。本建物の時間的な位置づけは、十瓶山産須恵器の小型化や調整の簡素化、また吉備系土師器の形態的特徴から、13 世紀後半から 14 世紀初前半に廃絶したものと推定される。

ＳＢ 103（第 26・27 図）５区、ＳＢ 102 の西側で検出した。規模は２×３間（梁間 3.7 m、



第 28 図　ＳＢ104・ＳＢ105 平面図・断面図

桁行 5.55 m、床面積 20.4㎡）の総柱建物とすることができる。主軸方位はＮ－ 75°－ Ｗの東西棟である。南辺には１× １間の張り出しが見られる。東側１間分の柱穴底面は比較的深く、レベルも揃っているが、それ以外は浅い。

126 ～ 128 は土師質土器の小皿で、128 は焼きぶくれしている。130 は小型の白磁皿である。体部は内湾し口縁部に向って先細りしている。釉は薄く、下半は斑で一部釉がかかっていない。体部中位の屈曲部の内面に沈線状の段を有し、内面見込みに花文状の篦描きを施す。山本編年（山本信夫 2000）の皿Ⅷ１ｂ類にあたる。131 は楠井産か西村産の捏鉢で内面に明瞭なハケを施す。132 は東播系の捏鉢である。口縁端部をつまみ上げ、口縁外面は重ね焼きにより黒色化している。

133 は足釜の口縁で、134 は脚部である。SP5070 より 127 の小皿、129 の杯口縁部片、135 の古銭が出土している。135 は一部欠損しているが行書体で紹聖元寶とある。土器との出土状況の関連は不明だが、135 は埋土下位で出土している。

出土した 126・127 の小皿の形態や、132 の東播系須恵器より、本建物の廃絶時期は、13 世紀から 14 世紀前半に属すると考えられる。これは隣接するＳＢ 101・ＳＢ 102 と同時期と考えられる。

ＳＢ 104（第 28 図）５区西側、Ⅲ層直下で検出した。規模は１× １間（梁間 1.7 m、桁行 2.4 m、床面積 4.08㎡）の側柱建物とすることができる。主軸方位はＮ－ 79°－ Ｗの東西棟である。柱穴は円形で、深さは浅い。

SP5031・SP5029 より遺物が出土しているが細片のみで図示できなかった。検出面・方向・埋土等が第１遺構面の建物と共通点が多いことから、同時期と考えられる。

ＳＢ 105（第 28 図）１区北端、Ⅲ層直下で検出した。北側の２区に続くかと思われたが、広がらなかった。規模は１× ２間（梁間 2.1 m、桁行 4.3 m、床面積 9.0㎡）の側柱建物とすることができる。主軸方位はＮ－ 80°－Ｗの東西棟である。柱穴は不整円形である。

SP1002・SP1003 より遺物が出土しているが細片のみで図示できなかった。検出面・方向・埋土等が第１遺構面の建物と共通点が多いことから、同時期と考えられる。

３　溝（ＳＤ）

いずれも上面の削平のため、残存する深度は極めて浅い。遺構面まで重機掘削を行っているが、土層観察より上面が水田耕作土（Ⅱ層）であるため、その時の削平によるものと考えられる。SD101 ～ 105 は方向をそろえて平行しており、埋土もほぼ同一であることからほぼ同時期に機能したものと考えられる。溝の方向はＮ－ 11°－ Ｅであり、条里地割と一致する。

ＳＤ 101（第 29・30 図）　３区西側で検出した。上面幅 1.7 m、残存深度 0.1 mを測る。堀方は皿状で、南北に直線的に伸びる。埋土はⅢ層に起因する灰黄褐色の細粒砂である。

136 の須恵器の蓋と 137 の黒色土器Ｂ類の底部が出土した。断面四角の低い高台を貼付ける。

ＳＤ 102（第 29･30 図）　SD101 のすぐ東側を並行する溝である。上面幅 1.9 m、残存深度 0.15 mを測り断面が逆台形を呈する。

遺物は出土していない。

ＳＤ 103（第 29･30 図）　SD102 の約５m東側を並行する溝で、ＳＤ 118 を切る。上面幅 1.1 m、残存深度 0.08 mと浅く、掘方は皿状を呈する。ＳＡ 102 と平面的位置は重なっているが、垂直方向の切り合い関係は不明である。

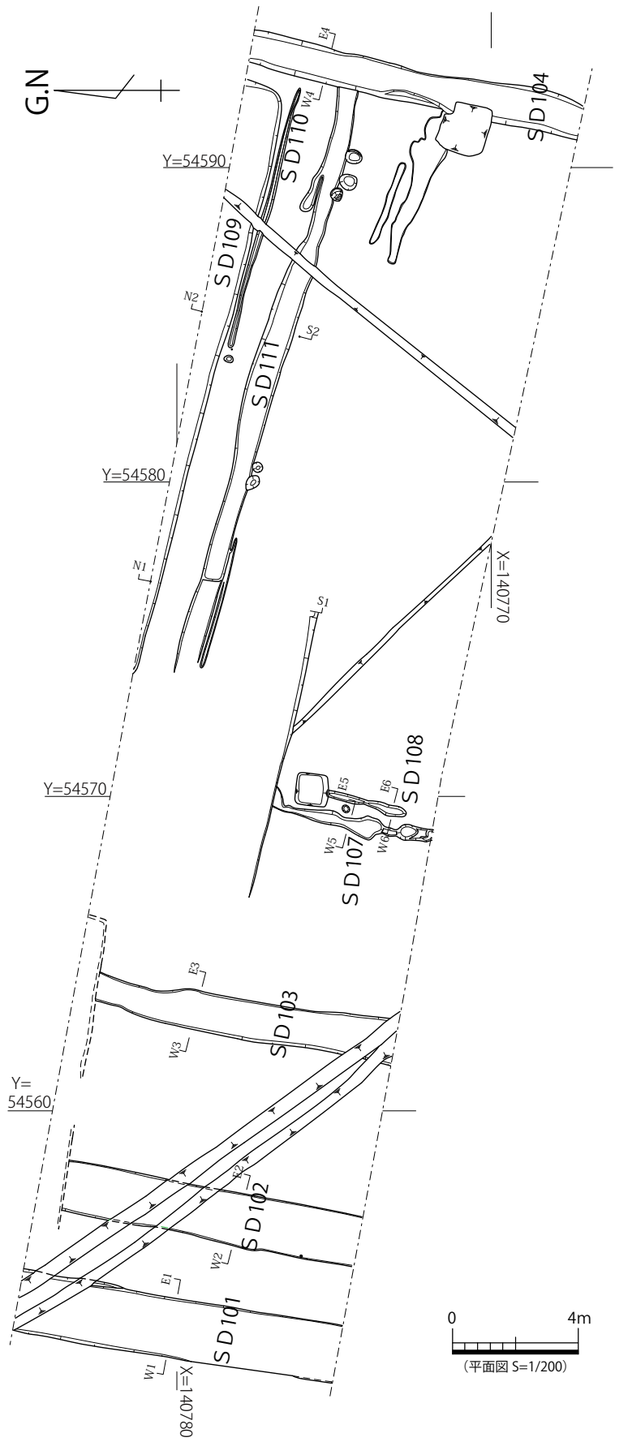
遺物は出土していない。

ＳＤ 104（第 29･30 図）　３区中央に位置する。上面幅 0.8 ～ 1.3 m、残存深度 0.08 ～ 0.2 mを測る。この溝を境にして東側では、建物跡やピットが集中しており、屋敷地の区画溝と考えられる。

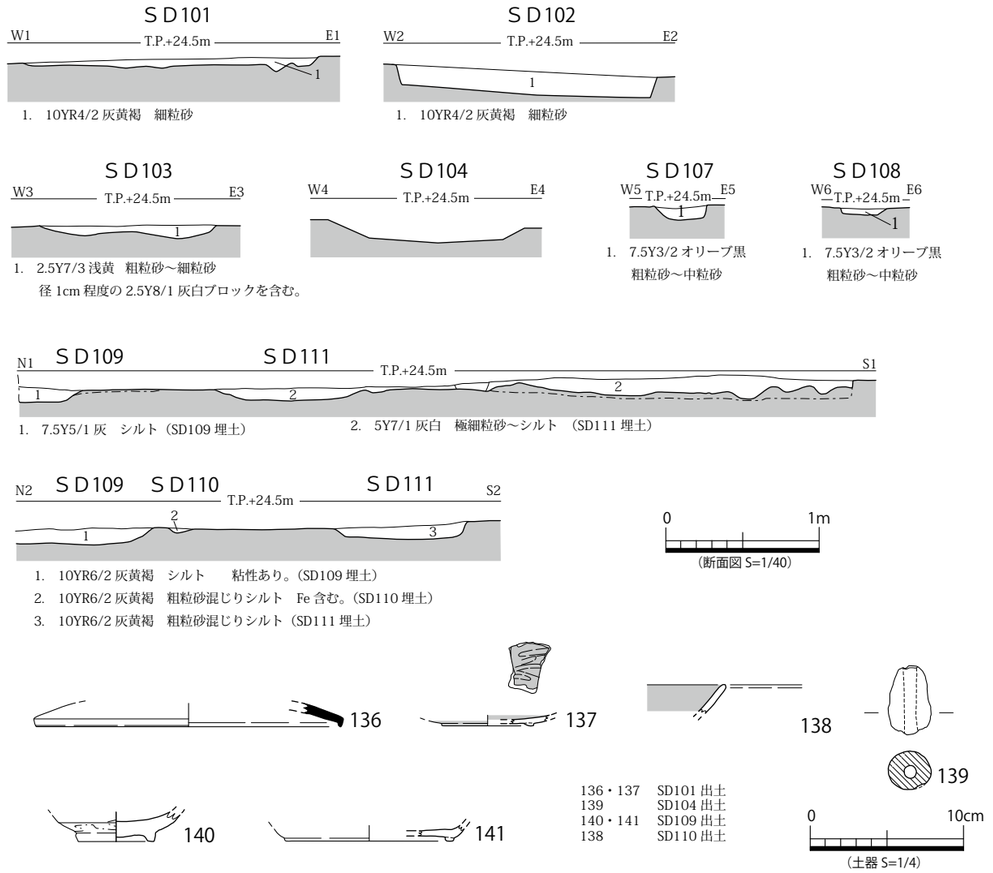
139 は中心部に孔のある円筒形の管状土錘である。両端がややすぼまる形態で、孔径は約 0.8cm である。

ＳＤ 105（第 31 図）　1 区のＳＢ 101 付近に位置する。北端部は近世以降の水田に切られ消失しており、南端は幅狭になり収束する。削平前はこれ以上の深さを有していたものと推測され、南端部で途切れる形状は本来的なものか明確ではない。規模は、検出面で上面幅 0.7 ～ 1.1 m、残存深度 0.15 m、検出残存長 11.5 mを測る。堀方は浅いＵ字形で、南北に直線的に伸びる。ＳＢ 101 の柱穴を切ることからＳＢ 101 の焼失・埋没後に掘削された。埋土は細粒砂からシルトを主体としている。

遺物は、土師質土器皿・杯（142 ～ 146）・白磁碗（147）・須恵器（148 ～ 151・155）・足釜（152・153）・鍋（154）・鉄釘　（156）などが出土した。これらの遺物は散発的に出土しており細片が多い。142 は土師質土器の小皿、143 ～ 146 は杯口縁部である。147 は内面見込みに 1 条の沈線がめぐる。高台は低く断面方形で、高台まで施釉が及び、釉は空色を帯びた白色を呈する。横田・森田分類碗Ⅸ類に相当する。148・149 は十瓶山産須恵器である。150 は非十瓶山産須恵器で、



第 29 図　ＳＤ101 ～ 104・107 ～ 111 平面図



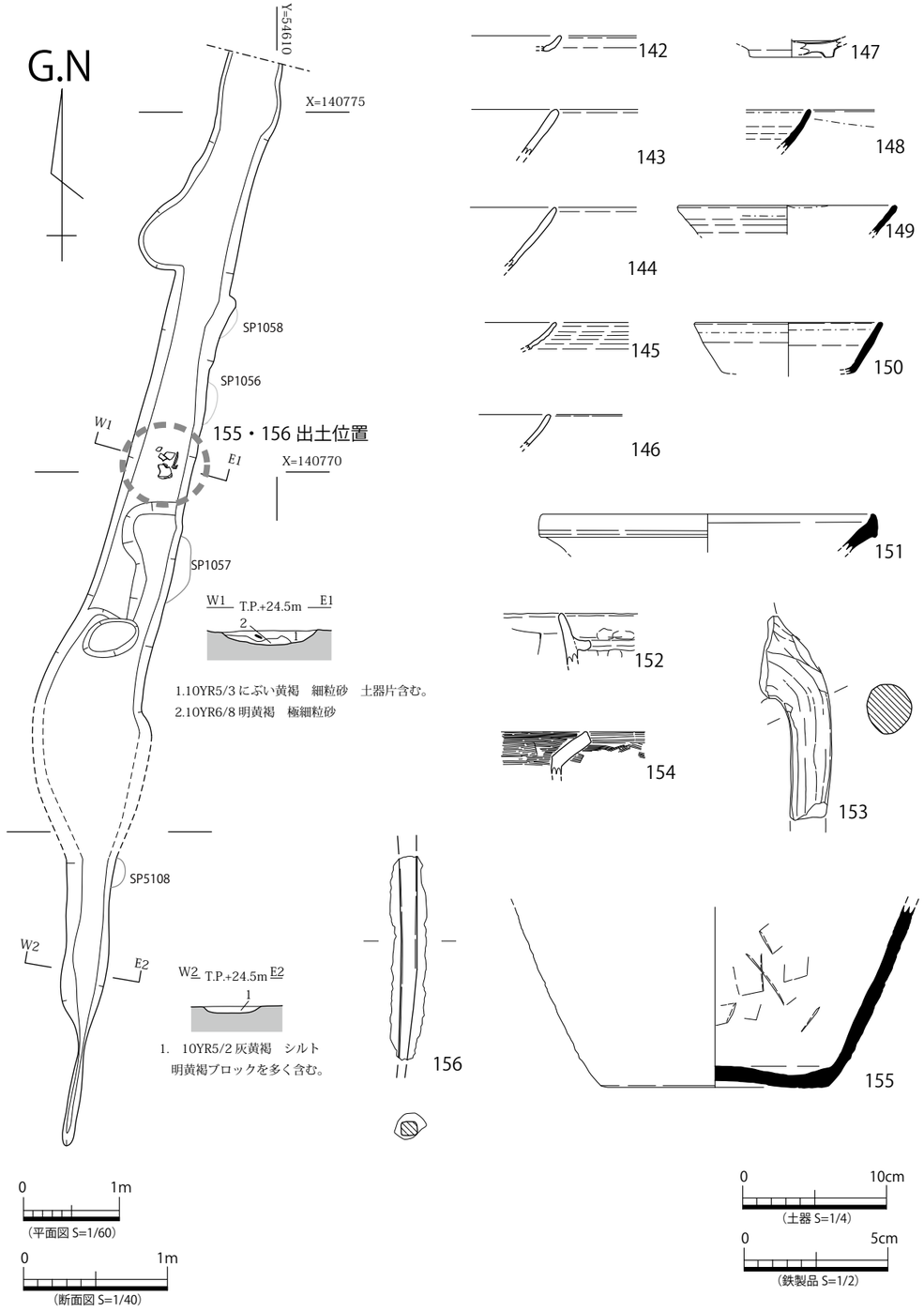
第 30 図　ＳＤ101 ～ 104・109・110・111 断面図及び出土遺物実測図

灰色を呈し口縁が直線的に外傾する。151 は東播系捏鉢で外面に灰色の釉薬をつけて焼成している。152・153 は足釜の口縁部と脚部である。154 は鍋で、内外面や口縁端部にまでハケメが施される、楠井Ａ 1 類にあたる。155 は焼成不良の須恵器壺で、溝底より出土しており摩滅が著しい。156 は鉄製品の釘である。断面方形で両端部は欠損している。

ＳＤ 106（第 23 図）　ＳＢ 101 の東側にあり、梁行方向に並行することからＳＢ 101 の雨垂れ痕跡と考えられる。上面幅 0.24 m残存深度 0.03 mを測り、浅いＵ字状を呈する。深度が浅く 1 区の北側では、続きが検出できなかった。

ＳＤ 107・ＳＤ 108（第 29 図）　ＳＤ 103 の約６m東側を南北に走る小溝である。上面幅 0.2 ～ 0.5 m残存深度 0.08 mと、底面は凹凸著しく、鋤溝と考えられる。

ＳＤ 109（第 29・30 図）　ＳＤ 103 とＳＤ 104 の間に位置し直行する溝で、北側は調査区外に広がる。140 は唐津焼の碗底部である。141 は土師質土器の底部である。出土遺物から近世以降に所属するが、隣接する遺構との位置関係や埋土からここで報告する。



第 31 図　ＳＤ105 平面図・断面図及び出土遺物実測図

ＳＤ 110（第 29・30 図）ＳＤ 109 の南側で並行する幅狭の溝である。

138 は黒色土器 A 類椀の口縁である。

ＳＤ 111（第 29・30 図）　ＳＤ 109・ＳＤ 110 に並行する溝で、東側はＳＤ 104 に合流し、西端は 19 m程で収束する。検出面で上面幅 0.94 ～ 0.48 m、残存深度 0.08 mを測る。数基のピットに切られる。

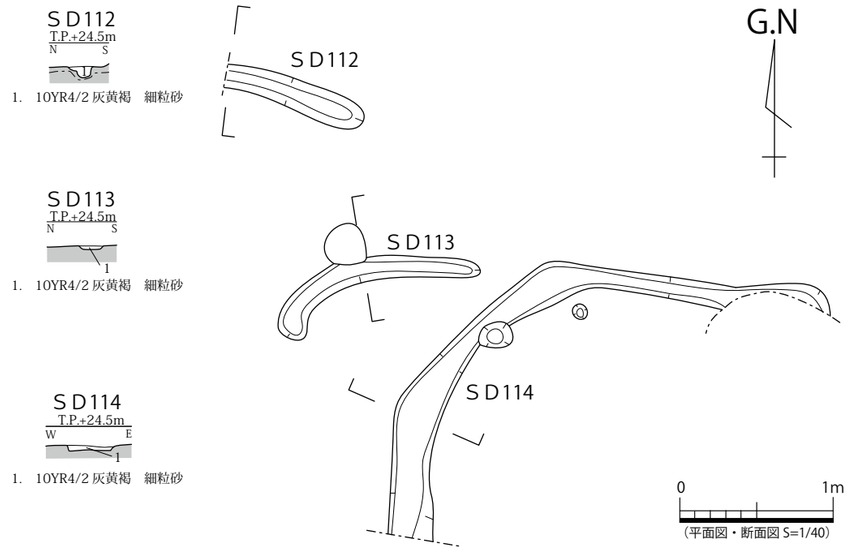
ＳＤ 112・ＳＤ 113・ＳＤ 114（第 32 図）調査区南東部、Ⅲ層直下で検出した。いずれも幅狭で浅く埋土はⅢ層と同じである。畑畝溝の可能性がある。

ＳＤ 115（第 33 図）２区西側、Ⅳ層中で検出した。南北に走り緩やかに蛇行する。北側では並列して２本走っている。本溝は、灰黄褐の極粗粒砂を埋土とし、他の小溝とは異なる。

ＳＤ 116（第 33 図）２区南側、Ⅳ層とⅤ層の間で検出した。上面幅 0.57 m残存深度 0.2 mを測りＵ字状を呈する。南西から北東に向かって緩やかに蛇行し調査区外に続く。

ＳＤ 117（第 34 図）３区西側、Ⅴ層上面で検出した。上面幅 0.2 m、深度 0.04 mを測りＵ字状を呈する。底部の標高はほとんど高低差がなく、北側が若干低くなっており北東方向に流れると考えられる。

ＳＤ 118（第 34 図）３区西側、Ⅴ層上面で検出した。上面幅 1.4 ～ 1.7 m、深度 0.4 mを測りＵ字状を呈する。底部の標高はほとんど高低差がなく、流れる方向は判断し難い。ＳＡ 102・ＳＤ 103・ＳＤ 117 などに切られ、第１遺構面では最も古い遺構である。南から北西に向かって緩やかに湾曲し調査区外に続く。埋土は上層が橙色の極砂粒砂、下層が灰褐色の粗粒砂～中粒砂で、堆積物の粒径などから流水があったことを示している。溝底部の東側に一部杭列が打ち込ま



第 32 図　ＳＤ112・ＳＤ113・ＳＤ114 平面図・断面図

れていた。湧水著しい。

遺物は土師質土器細片や弥生土器が出土している。157 は外面にタタキ調整を施した弥生土器の鉢である。

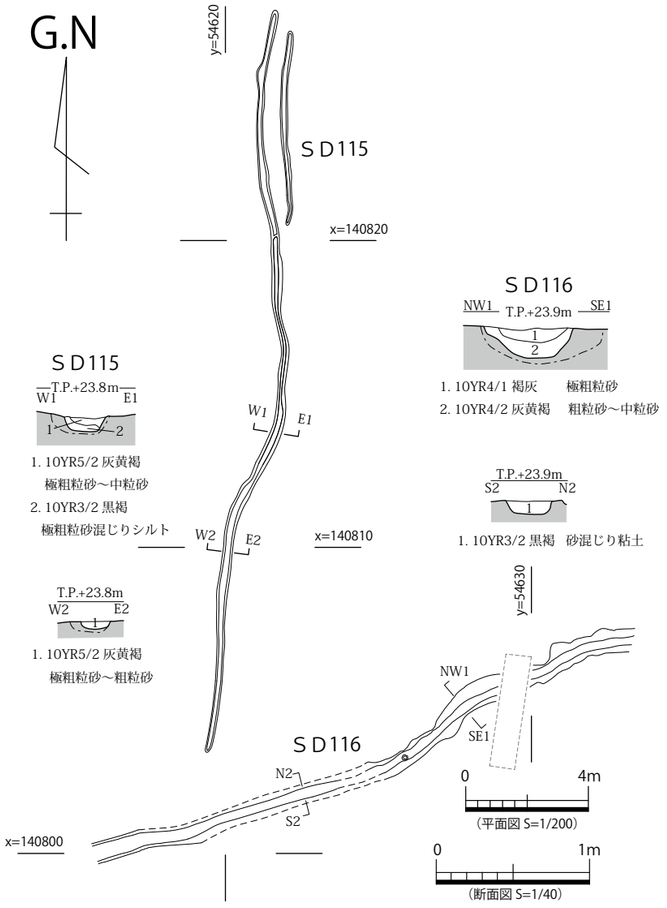
４　土坑（ＳＫ）

ＳＫ 101（第 35 図）1 区のＳＢ 101 の北側、Ⅳ層上面で検出した。長軸幅 1.8 m、短軸幅 0.85 m、深度 0.2 mを測り、平面は不整形である。埋土は第 1 遺構面で検出したピットなどと近似しているので、同時期と考えられる。

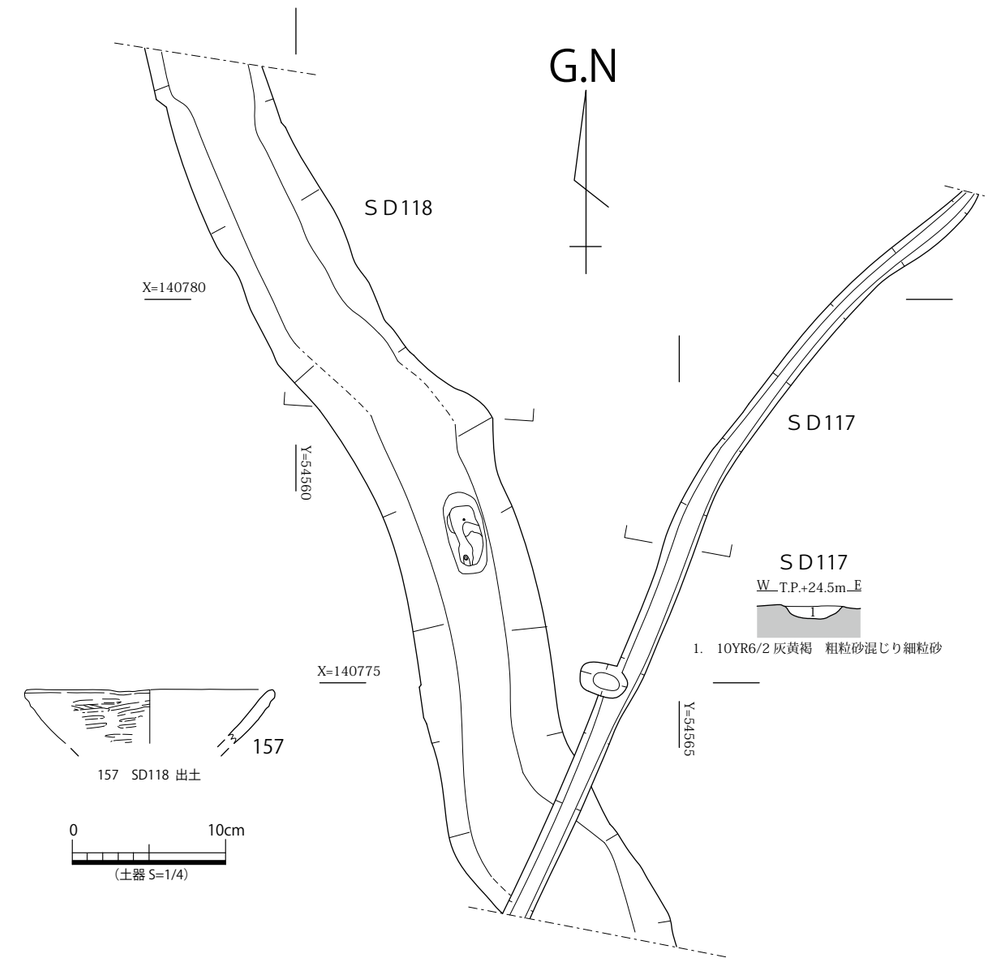
遺物は 158 の須恵器底部や、土師質土器の杯が出土している。

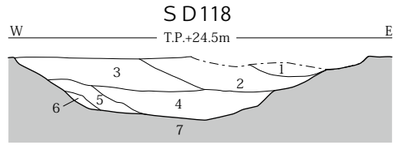
ＳＫ 102（第 35 図）2 区の東壁近く、Ⅳ層の上面で検出した。長軸幅 1.9 m、短軸幅 0.4 m、深度 0.05 mを測り、平面は楕円形である。埋土は黒褐の粗粒砂である。

遺物は出土していない。

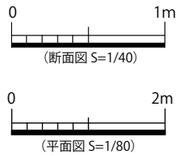


第 33 図　ＳＤ115・ＳＤ116 平面図・断面図

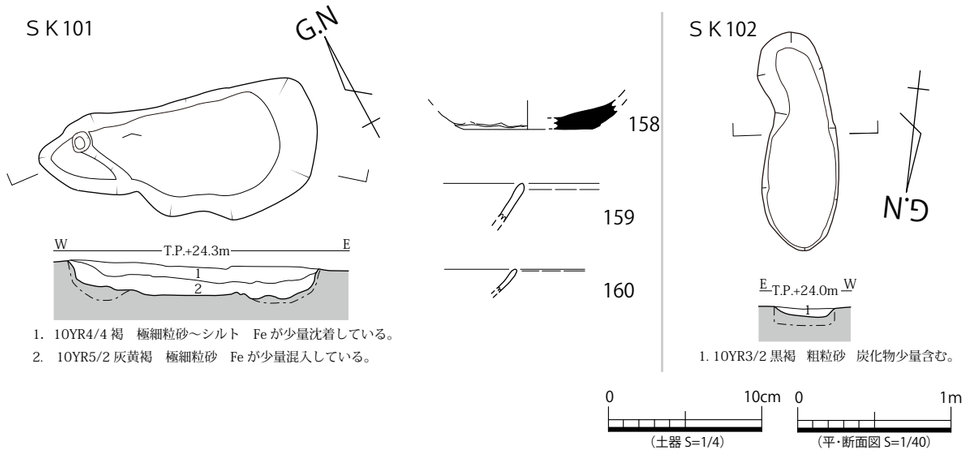




1.　7.5YR6/3 にぶい褐　極粗粒砂　土師質土器細片少量含む。
2.　7.5YR6/6 橙　極粗粒砂～粗粒砂　土師質土器細片少量含む。
3.　7.5YR6/6 橙　粗粒砂～中粒砂　土師質土器細片少量含む。
4.　7.5YR6/2 灰褐　粗粒砂～中粒砂　土師質土器細片少量含む。
5.　7.5YR6/1 褐灰　中粒砂～細粒砂　土師質土器細片少量含む。
6.　7.5YR7/1 明褐灰　細粒砂　土師質土器細片少量含む。
7.　7.5YR5/1 褐灰　中粒砂～細粒砂　Fe 斑状に 10% 含む。



第 34 図　ＳＤ117・ＳＤ118 平面図・断面図及び出土遺物実測図



第 35 図　ＳＫ101・ＳＫ102 平面図・断面図及び出土遺物実測図

5　柱穴（ＳＰ）

ここで報告する遺物は、掘立柱建物や柵列等に復元することが困難であったピットより出土し図化可能なものである。弥生土器や石器も図示しているが、埋土の特徴や共伴遺物からから中世のピットと判断でき、これらは混入品と判断した。

SP3037・SP3038（第 36 図）ＳＤ 111 の南側に位置する。ＳＰ 3037 から土器がまとまって出土している。161 は土師質土器の小皿である。162 は土師質土器の椀で、断面三角形の低い高台を貼付けている。163 ～ 165 は黒色土器 A 類椀である。摩滅しているが、内面にミガキを施す。166 は土師質土器の鍋である。ＳＰ 3037 から出土した 165 は柱穴の掘方から伏せられた状態で出土した。黒色土器の形態より 12 世紀前半まで遡る可能性がある。

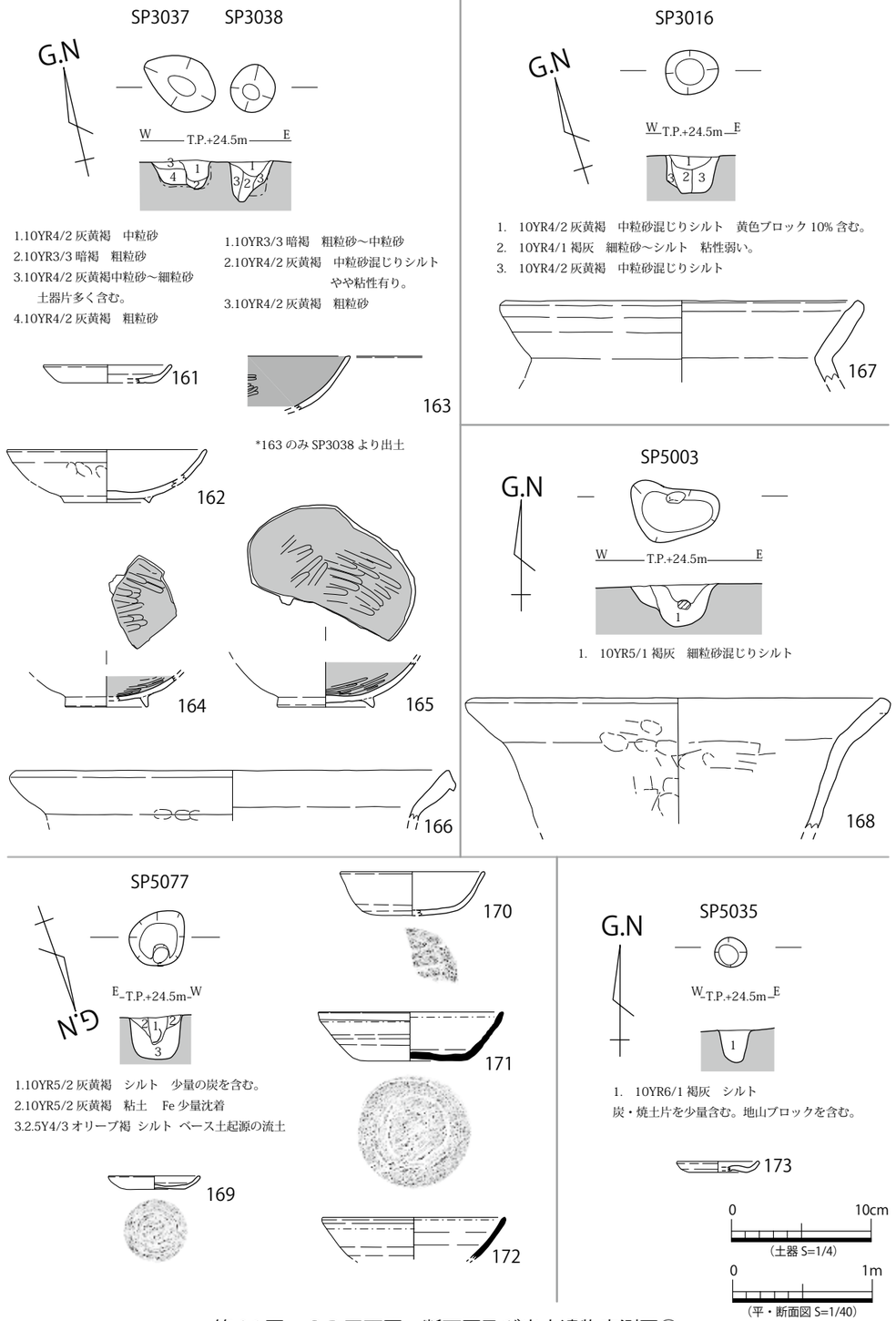
SP3016（第 36 図）167 は土師器甕の口縁部である。

SP5003（第 36 図）168 は楠井産の鍋である。

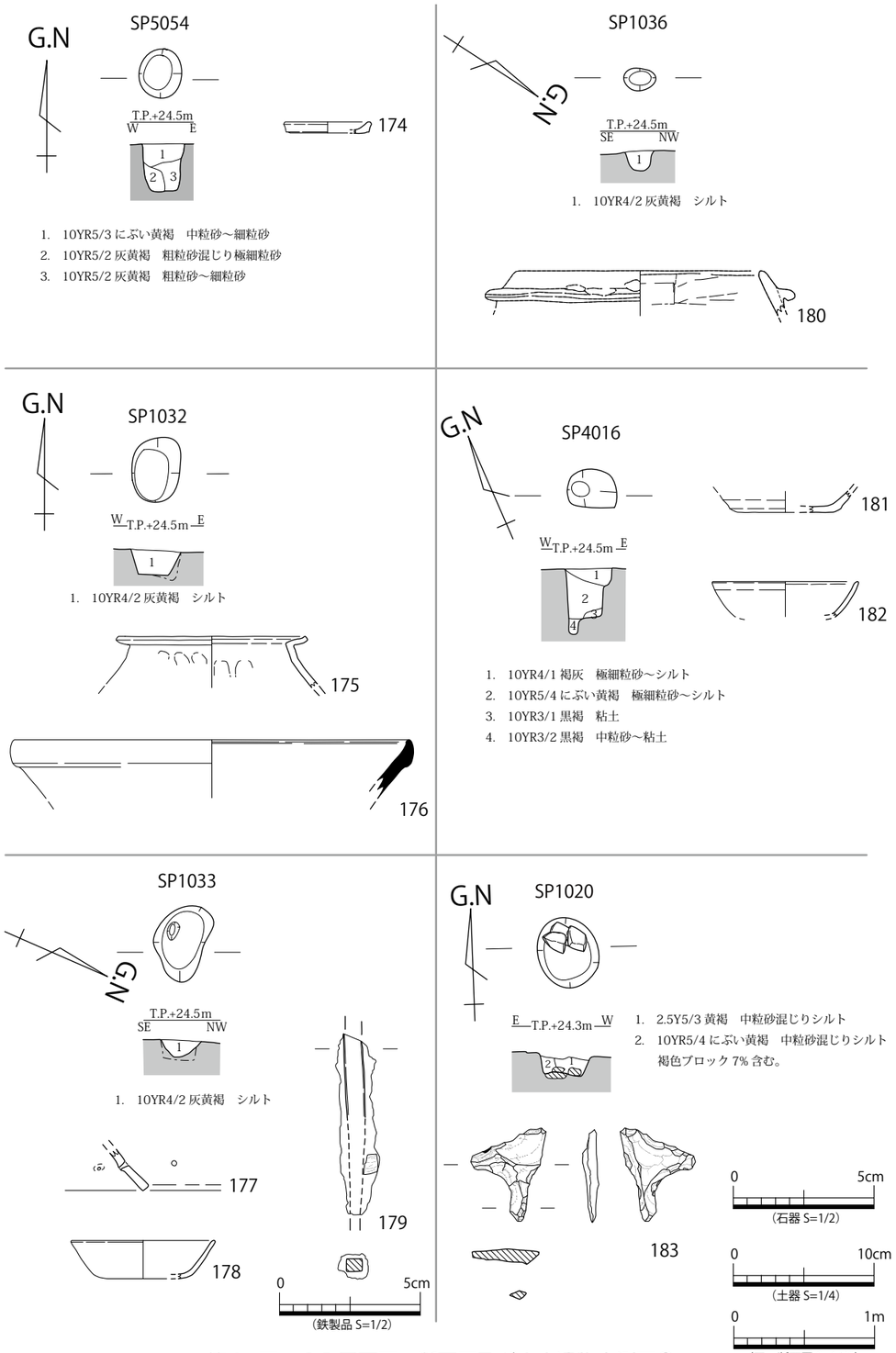
SP5077（第 36 図）　ＳＢ 102 の南側、大半が調査区外のため掘立柱建物として復元できなかったが、一列に並ぶピット群の一つである。この柱穴からは完形の土器がまとまって出土している。169 は完形の小皿、170 は杯、171・172 は十瓶山産須恵器杯で、いずれも底部は回転ヘラ切り痕を残す。171 は柱抜取痕の底部で垂直的に出土し、それ以外は 171 より上位で折り重なるように出土した。これは地鎮めの様相を呈し、遺物の帰属時期から、13 世紀末から 14 世紀前半に埋没したものと推定される。

SP5035（第 36 図）　173 は土師質土器の小皿である。

SP5054（第 37 図）　174 は土師質土器の小皿である。太く短いコースター状を呈する。空港跡地遺跡（佐藤 2000a）のⅢＢⅢ -5 に分類される。



第 36 図　ＳＰ平面図・断面図及び出土遺物実測図①



第 37 図　ＳＰ平面図・断面図及び出土遺物実測図②

SP1032（第 37 図）175 は褐色を呈する弥生土器の甕だが、検出面や埋土の特徴からこの柱穴の時期は中世と考えられるので、混入品と考えられる。176 は東播系須恵器の捏鉢である。

SP1033（第 37 図）177 は混入品の弥生土器の高杯脚部、178 は土師質土器の杯、179 は鉄製の釘で両端部欠損し、木質が一部付着している。

SP1036（第 37 図）180 は足釜の口縁部である。

これらＳＢ 101 の西側に位置するピット群は、ＳＢ 101 と同じ 13 世紀後半から 14 世紀の年代観を示している。

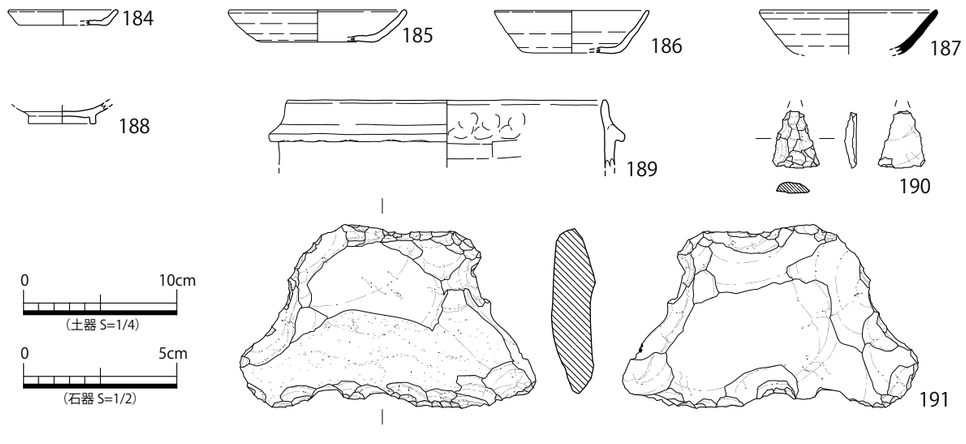
SP4016（第 37 図）181・182 は土師質土器の杯である。181 は底部回転ヘラ切りで、被熱を受けている。

SP1020（第 37 図）SP1020 はＳＢ 101 の北東側のピットで、SP1021 などと共に建物に復元できそうなピットであるが、北側が後世の削平により復元できなかった。根石や裏込め石が充填されている。183 は混入品と考えられるがサヌカイト製の石錐である。

６　第１遺構面精査中（第 38 図）

１区南側から３・４・５区にかけて遺構面精査中に比較的多量の遺物が出土した。この付近は掘立柱建物や柱穴が集中しており、これらに関連する遺物と考えられる。

184 は土師質土器の小皿、185・186 は土師質土器の杯、187 は須恵器の杯である。188 は瀬戸美濃の底部である。189 は足釜の口縁部である。190 はチャート製の平基式石鏃である。191 はサヌカイト製の楔型石器である。



第 38 図　第 1 遺構面精査中 出土遺物実測図

第６節　近世以降の遺構と遺物

第２節で述べたとおり、近世以降の遺構の調査は、調査の都合上１区でしか行っていないため、その調査成果を報告する。

１　溝（ＳＤ）

ＳＤ 001（第 39 図）　１区中央、水田で削平されて一段低くなっている所に位置する。Ⅲ層直下で検出し東西方向（N － 79° － W）に直線的に延びる溝である。規模は幅 0.7 ～ 1.1 m、深度 0.23 mを測る。堀方は浅いＵ字形で、水田①と水田②の間の畔までで終息しており、東壁では確認できなかった。１・２層はグライ化した粗粒砂や中粒砂であることから、一定の流水状況下で埋没が進行したものと考えられる。

192 は御厩焼の焙烙で、内耳の幅はかなり狭く円孔は痕跡器官だけで貫通していない。頸部直下の体部上半は内湾気味に直立し、指頭圧痕や接合痕、底部の粗い刷毛目調整を明瞭に残し外面全体に煤が付着している。193 は軒平瓦で残存状況が悪いが、瓦当文様はおそらく３転する唐草文で、中心飾りは残っていない。瓦当面は顎貼り付け技法で、割れた接合面の観察では線状の深い傷をつけて接合している。瓦当上面の面取りはない。194 は丸瓦で、その他２袋分の瓦片が出土している。195 は砂岩製砥石で、石質は粗粒で灰褐色を呈し硬質である。不規則に割れており一部被熱を受けている。

２　井戸（ＳＥ）

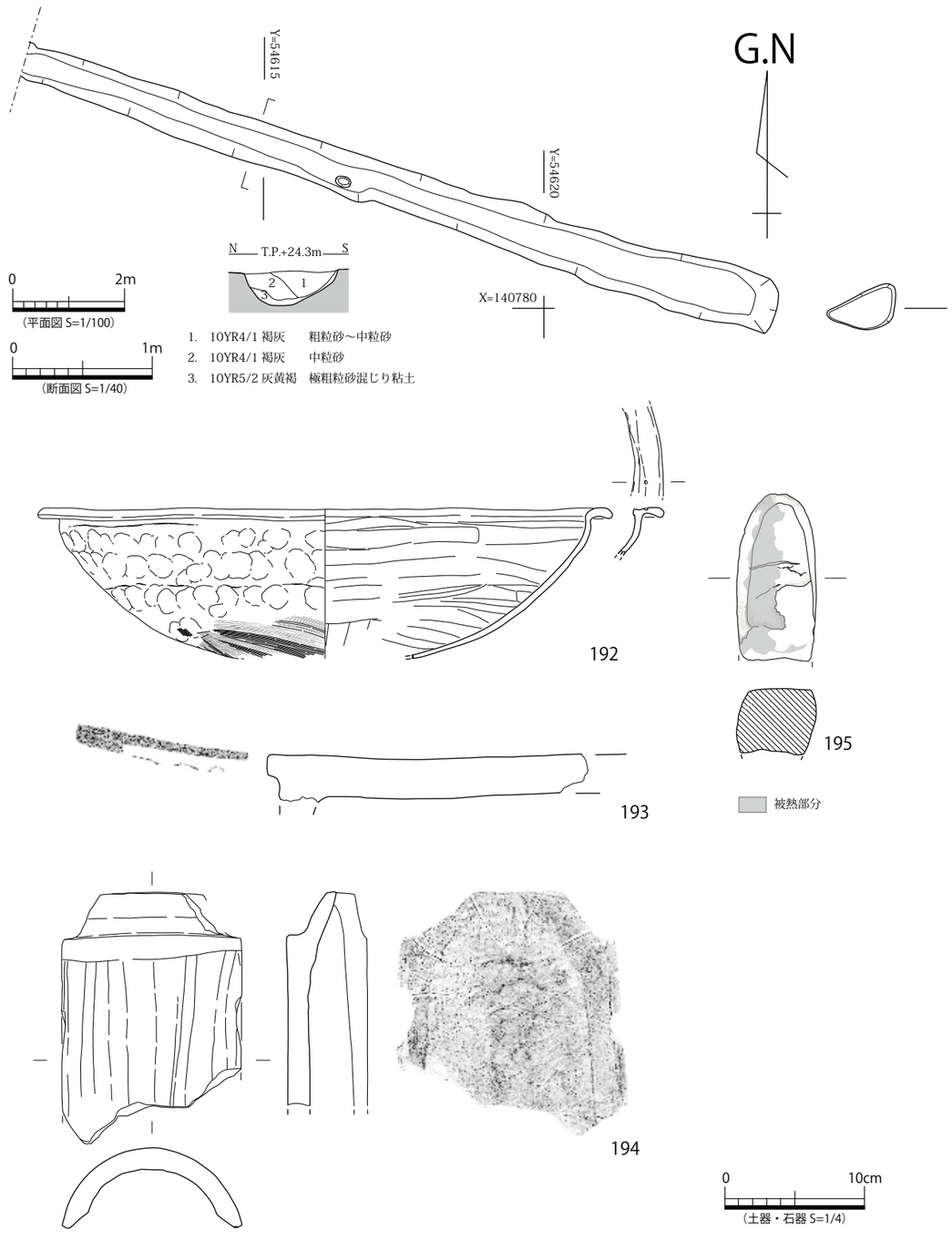
ＳＥ 001（第 40 図）　１区中央で検出した井戸跡である。北側半分は試掘調査時に掘削されていた。周囲の地盤がもろく、調査中に崩れかけたため安全を考慮して断念した。記録図面などは試掘調査時の記録を流用する。堀形は不整円で残存幅 2.9 m、掘削深度 1.0 mを測る。井戸枠は不整円で直径 0.5m 程である。井戸枠は木枠・編物併用組型で、木枠の周りに竹条などで編まれた円筒形の編み物を挿入して構築していたようである。大型の素焼き土器片が中・上層で出土している。

ＳＥ 001 はＳＤ 208 と連続することから、単なる井戸ではなく、湧水点の掘り込みと導水路がセットになった灌漑施設「出水」の可能性がある。

ＳＥ 002（第 40 図）　１区中央東壁④で検出した井戸跡である。Ⅱ層直下で検出し、東半分は調査区外に続くため大半が不明であるが、かろうじて残存した範囲からは、方形ないしは隅丸方形の平面形である可能性が高い。埋土は黒色の粘質ブロックを多量に含んでおり、人為的な埋め戻しが行われたことを示唆している。

３　土坑（ＳＫ）

ＳＫ 001（第 41 図）　１区に位置する。Ⅲ層中で検出し、平面形は東西 2.0 m、南北 1.8 mの不整円形を呈し、深度は 0.6 mを測る。埋土はブロック土や石を多く含み、人為的な埋戻しが行わ



第 39 図　ＳＤ001 平面図・断面図及び出土遺物実測図

れている。堀方は逆台形状で、底面は湧水著しい。

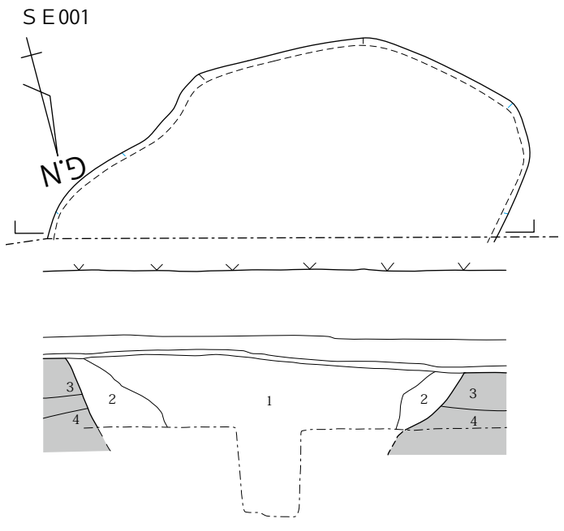
出土遺物は欠けた砥石や石臼、瓦片・土師質土器など日常品の廃棄土坑の様相を示す。196 は須恵器の蓋、197 は土師質の焙烙で円孔が貫通している。198 は磁器の碗である。199 は泥岩製砥石で、石質は肌目が細かく、長辺４面を砥面とし使用しており、よく使われ鞍状になっている。200・201 は豊島石の石臼である。198・200・201 は下層より出土している。

４　水田

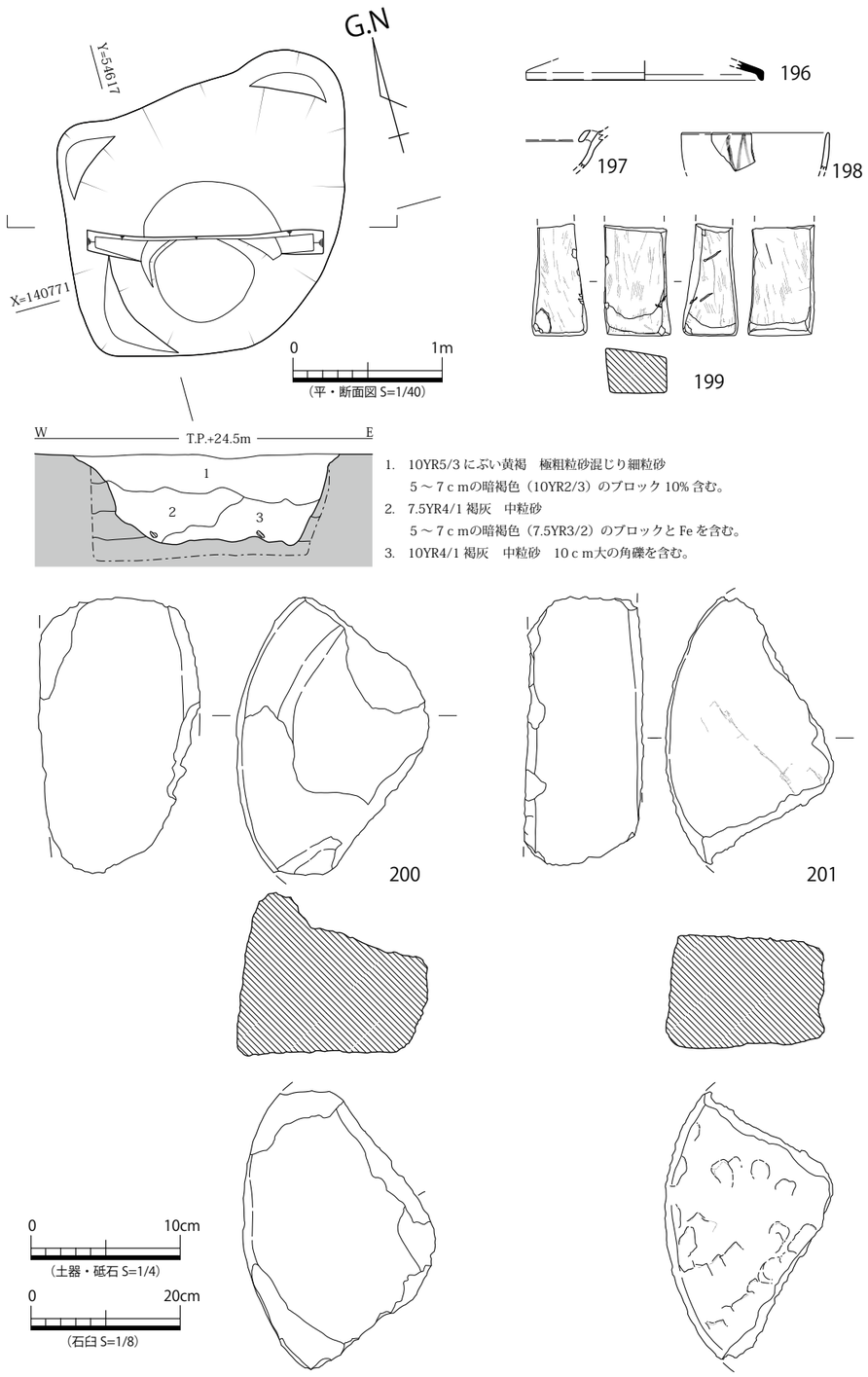
水田①・水田②・水田③（第 42 図）

水田は調査区全体に広がっていたようであるが、今回は１区の北半と南東の第１遺構面より低い位置にある水田を検出し調査を行った。Ⅱ層を埋土とし、標高は 24.25 ～ 24.1m を測る。東壁から 2.6m 付近で幅 76㎝、高さ 10㎝程の畦畔を検出した。畦畔は南北に伸び水田①と②を区画し、比較的残りのよい水田①・水田③は、畦畔との境に 20 ～ 30㎝間隔で杭の先端を尖らせ、打ち込む木杭列を伴っている。

遺物は、１区のⅡ層（水田耕作土中）やⅢ層から中世～近世の陶器などが出土した。須恵器（202）・土師質土器底部(203)･足釜(204･205)･備前焼(206･207)・瀬戸美濃陶器碗（208）・刷毛目唐津碗（209）・陶器（210）などが出土した。その他陶器・碁石・ガラス片など明らかに現代のものは図示してい



第 40 図　ＳＥ001・ＳＥ002 平面図・断面図

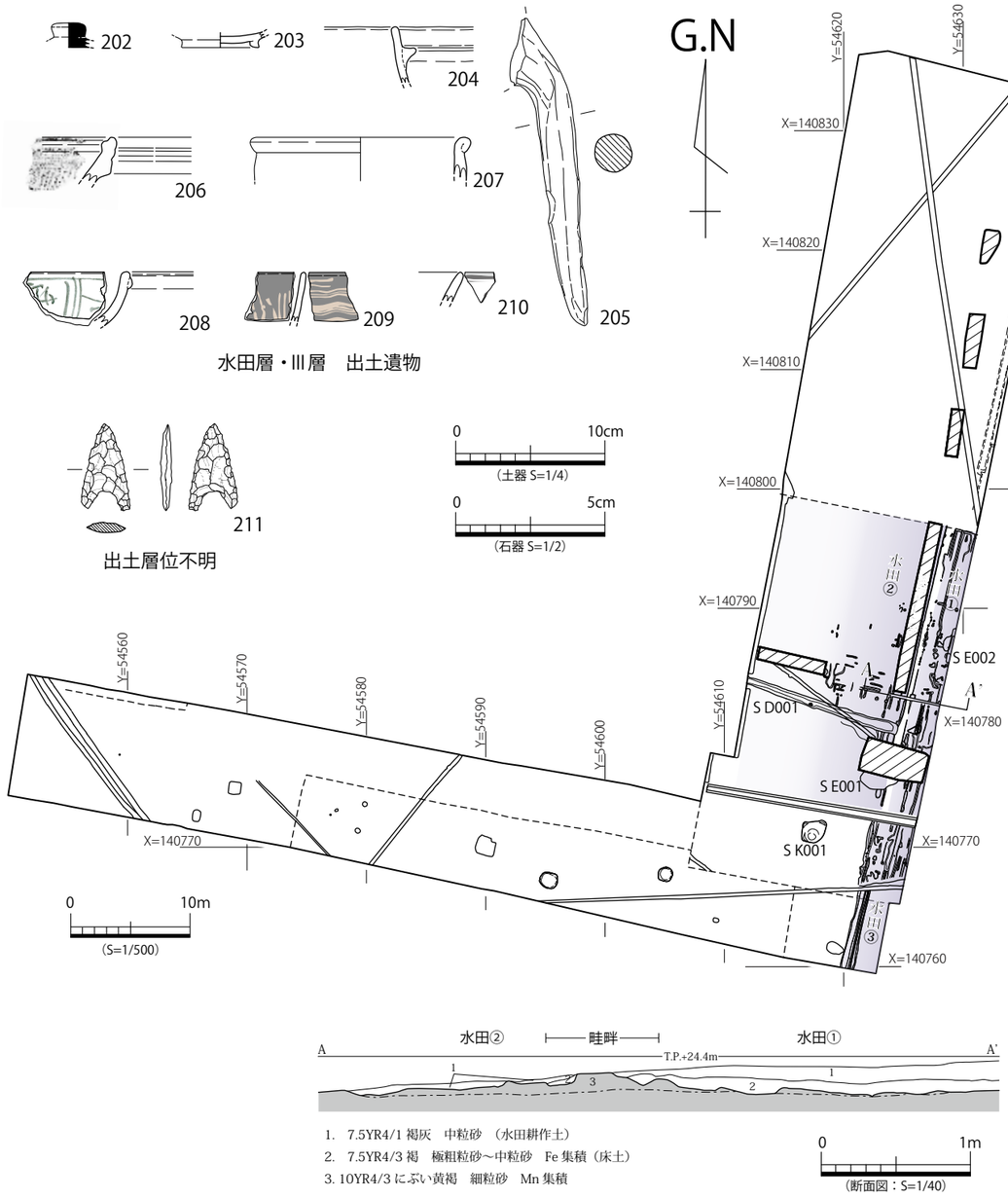


第 41 図　ＳＫ001 平面図・断面図及び出土遺物実測図

ない。備前の擂鉢などから年代の上限は 18 世紀以降と考えられる。

5　出土層位不明（第 43 図）

211 はサヌカイト製の凹基式石鏃で、廃土から出土した。



第 42 図　近世以降平面図・水田断面図及び出土遺物実測図

＜註・参考文献＞

1)　佐藤竜馬 2000a「空港跡地総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　空港跡地遺跡Ⅳ」 香川県教育委員会 （財）香川県埋蔵文化財調査センター
2)　佐藤竜馬 2000b「西村型土器椀の系譜」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅷ』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
3)　佐藤竜馬 1995a「近世讃岐における土器生産」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅲ』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
4)　佐藤竜馬 1995b『国分寺楠井遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
5)　片桐孝浩 1992「古代から中世にかけての土器様相」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財報告第冊 川津元結木遺跡』 香川県教育委員会 （財）香川県埋蔵文化財調査センター
6)　片桐孝浩 1995「Ⅱ各地の土器様相 （2）讃岐」『概説　中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会
7)　森田　稔 1995「Ⅲ土器・陶磁器　8. 中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会
8)　森田　稔 1986「東播系中世須恵器生産の成立と展開－神出古窯址群を中心に－」『研究紀要第３号』 神戸市博物館
9)　中世土器研究会 2014 「東播系須恵器捏鉢の新分類案および変遷概略図の提示」『第 33 回中世土器研究会　東播系須恵器（2）－編年と分布から考える－』 中世土器研究会
10)　横田賢次郎・森田勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集４』
11)　山本信夫 1995「Ⅲ土器・陶磁器　11. 貿易陶磁器（中世前期の貿易陶磁器）」『概説　中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会
12)　山本信夫 2000『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』 太宰府市教育委員会
13)　山本悦世 1993「吉備系土師器椀の成立と展開」『鹿田遺跡３　第５次調査』 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
14)　大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『下川津遺跡』 香川県教育委員会 （財）香川県埋蔵文化財調査センター
15)　大久保徹也 1993「讃岐地方における古墳時代初頭の土器について－下川津Ⅵ式以降の様相－」『財団法人香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅰ』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
16)　大久保徹也 2003「香東川下流域産土器の生産と流通」『初期古墳と大和の考古学』
17)　真鍋昌宏 2000「讃岐地域」『弥生土器の様式と編年』（株）木耳社
18)　海邉博史・渡邉淳子 2008「中世讃岐における地鎮めの様相」『出土銭貨研究第２号』出土銭貨研究会大
19)　大久保徹也 2003「香東川下流域産土器の生産と流通」『初期古墳と大和の考古学』
20)　信里芳紀 2005「讃岐地方における弥生時代中期から後期初頭の土器編年－凹線文期を中心として－」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅰ』 香川県埋蔵文化財センター
21)　信里芳紀 2011「第５章総括　第１節弥生中期後半から古墳初頭の土器編年」『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２冊　旧練兵場遺跡Ⅱ』 香川県教育委員会他
22)　信里芳紀 2014「讃岐地域における古墳時代前期の土器編年」『古式土師器の編年的研究－四国島の古墳時代前期の土器様相－』 四国考古学研究会
23)　乗松真也 2006a「高松平野の白い土器」『十瓶山Ⅱ』 田村久雄傘寿記念会
24)　乗松真也 2006b「高松平野における弥生時代後期の土器編年」『調査研究報告第２号』香川県歴史博物館

第４章　北山下遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
田中義文・辻　康男・馬場健司・堀内誠示

はじめに

本報告では、調査区の古環境変遷を明らかにする目的で実施した、花粉分析、珪藻分析、植物珪酸体分析結果について述べる。

第１節　試料

分析試料は、３区より採取された試料①～⑧で、その試料採取位置や発掘調査で記載された堆積層の粒径記載を、柱状断面図の第 43 図に示す。試料①は、現在の盛土である１層直下の２層で、近現代の水田耕作土と考えられるシルト～細砂からなる２層（Ⅱ層）である。試料②は、中世の遺構埋土であるとともに中世土器を含む包含層で、シルト～細砂からなる３層（Ⅲ層）である。３層は、第１遺構面を覆う堆積層である。本層の試料②は、条里地割の整合的な方位を示す溝の SD101 の埋土である。試料③は、調査区全体に累重する弥生時代の遺物包含層をなす、極細砂～細粒砂からなる 4-1 層（Ⅴ層）である。試料④は､シルトからなる 13-1 層（Ⅶ層）である。試料⑤は、SD201 埋土底部の細流砂混じり粘土（埋土５層）である。試料⑥、⑦は SD207 埋土の底部で､試料⑧はその基盤層である。SD207 埋土では､試料⑥が細粒砂～中粒砂からなる 15 層、試料⑦が粘土からなる 16 層である。SD207 基盤層の試料⑧は、極細粒砂からなる 18 層（Ⅷ層）である。

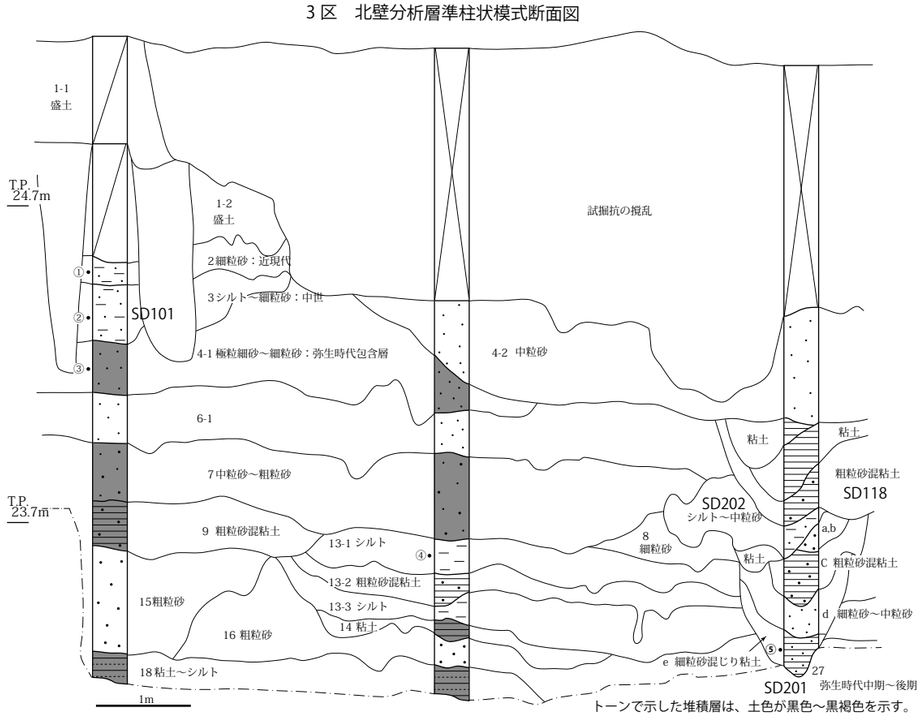
上記の分析試料においては、珪藻分析と花粉分析で試料②～⑧、植物珪酸体分析で試料①～④と⑦を実施する。

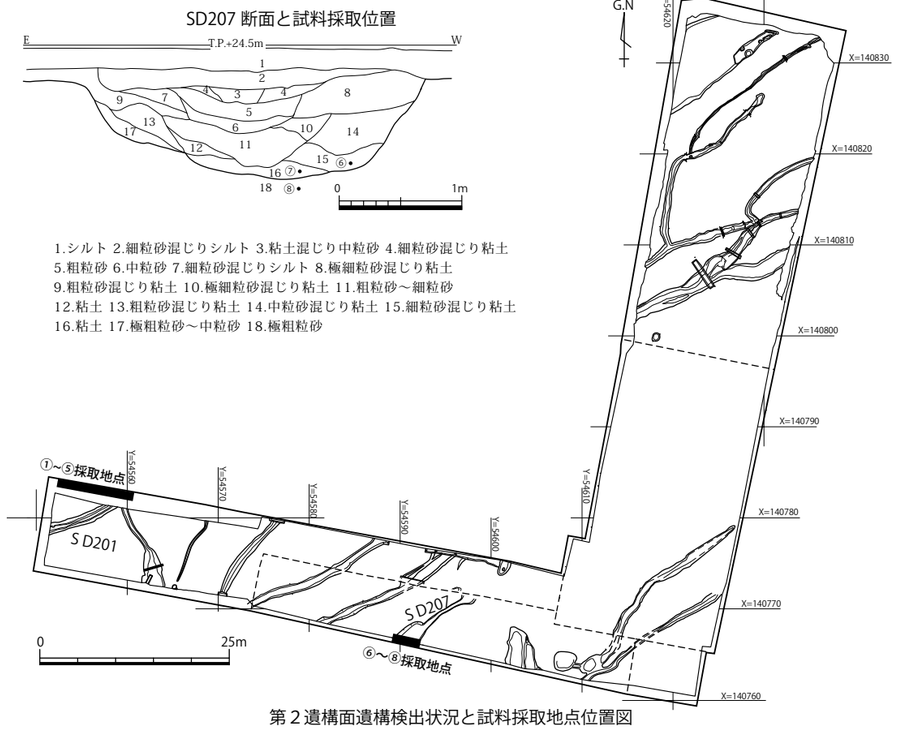
第２節　分析方法

（1）珪藻分析

湿重約 3g をビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を４～５回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸 600 倍または 1000 倍で行い、メカニカルステージを用い出現する珪藻化石を同定・計数する。珪藻の同定と種の生態性については、Hustedt（1930-1966）、Krammer & Lange-Bertalot（1985 ～ 1991）、Desikachiary（1987）などを参考にした。





第２遺構面遺構検出状況と試料採取地点位置図

第 43 図　分析試料採取位置

（2）花粉分析

花粉分析は、試料 10cc を秤量し、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mm の篩による篩別、重液（臭化亜鉛，比重 2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman（1952,1957）、Faegri and Iversen（1989）などの花粉形態に関する文献や、島倉（1973）、中村（1980）、藤木・小澤（2007）、三好ほか（2011）等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。花粉化石の保存が悪かったため、総数から不明花粉を除いた数を基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

（3）植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1g あたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100 個体以下は「<100」で表示する。各分類群の含量は 10 の位で丸める（100 単位にする）。また、各分類群の植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、堆積物 1g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1g あたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100 個体以下は「<100」で表示する。各分類群の含量は 10 の位で丸める（100 単位にする）。また、各分類群の植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

第３節　結果

（1）珪藻分析

結果を第３表に示す。分析試料では、珪藻化石が極少量認められのみである。化石の保存状態は、ほとんどが半壊して破片状であるだけでなく、溶解の痕跡が認められることから状態としては極不良である。認められた分類群は、全て淡水生種であり、汽水あるいは海水生種は認められない。

第3表　珪藻分析結果

種類	生態性 塩分	pH	流水	環境指標種	試料番号 ②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
Amphora ovalis (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	T	－	－	－	1	－	－	－
Amphora spp.	Ogh-unk	unk	unk		－	－	－	1	－	－	－
Craticula cuspidata (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	－	－	－	－	1	－	－
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		－	－	1	3	1	－	－
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		－	－	3	－	－	－	－
Fragilaria ulna (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	－	－	4	－	－	－	－
Fragilaria spp.	Ogh-unk	unk	unk		－	－	13	3	2	－	－
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	－	－	1	2	1	－	－
Luticola mutica (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	－	－	－	1	1	－	－
Meridion circulare var. *constrictum* (Ralfs) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	－	－	－	1	－	－	－
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	－	－	1	5	－	－
Stauroneis phoenicenteron var. *signata* Meister	Ogh-ind	ind	l-ph	O	－	－	－	1	－	－	－
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	－	－	－	－	－	－
海水生種					0	0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	0
淡水生種					4	0	22	14	11	0	0
珪藻化石総数					4	0	22	14	11	0	0

凡例

塩分・ｐＨ・流水に対する適応性

H.R.：塩分濃度に対する適応性　pH:水素ｲｵﾝ濃度に対する適応性　C.R.：流水に対する適応性

Euh　：海水生種　al-bi:真ｱﾙｶﾘ性種　l-bi:真止水性種

Euh-Meh:海水生種-汽水生種　al-il:好ｱﾙｶﾘ性種　l-ph:好止水性種

Meh　：汽水生種　ind　:pH不定性種　ind :流水不定性種

Ogh-hil:貧塩好塩性種　ac-il:好酸性種　r-ph:好流水性種

Ogh-ind:貧塩不定性種　ac-bi:真酸性種　r-bi:真流水性種

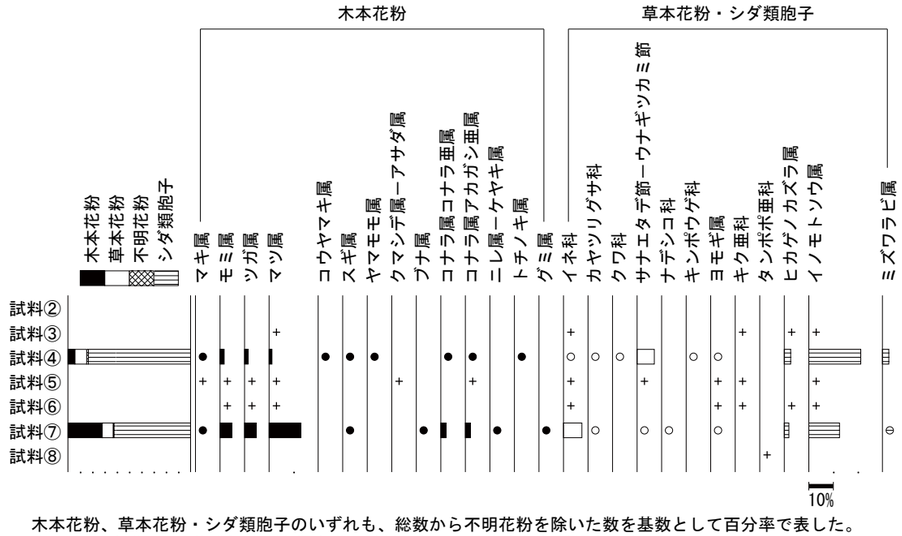
Ogh-hob:貧塩嫌塩性種　unk　:pH不明種　unk :流水不明種

Ogh-unk:貧塩不明種

環境指標種

O:沼沢湿地付着生種（以上は安藤，1990）

S:好汚濁性種　U:広適応性種　T:好清水性種（以上はAsai,K. & Watanabe,T.1995）



木本花粉、草本花粉・シダ類胞子のいずれも、総数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で表した。
○●は 1% 未満、+ は花粉総数 100 個未満の試料において検出された種類を示す。

第 44 図　花粉化石群集

SD207 埋土の試料⑥、⑦でも、珪藻化石の保存が極めて悪く、極少量認められた程度である。認められた分類群は、全て淡水生種であり、汽水あるいは海水生種は認められない。

（2）花粉化石

結果を第 4 表、第 44 図に示す。花粉化石の産状は試料により異なるが、全体的に産状が悪く、保存状態も悪い。試料④、⑦以外は、花粉化石の産出量が少なく、試料③、⑤、⑥、⑧などから、

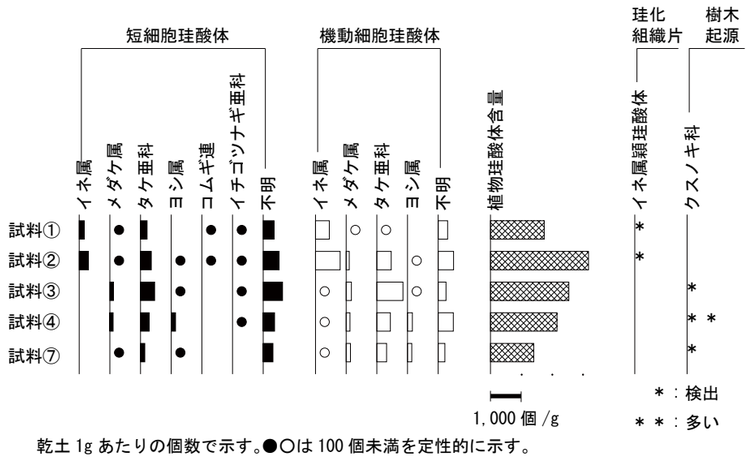
わずかにマキ属、モミ属、ツガ属、マツ属、コナラ属アカガシ亜属などの木本花粉、イネ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、キク亜科などの草本花粉が検出されるにとどまる。なお、試料②は無化石であった。

試料④では、他の試料と比較すると花粉化石が産出するものの多いとはいえず、シダ類胞子が多産する傾向がある。シダ類胞子には、水生のミズワラビ属なども含まれる。花粉化石では、草本花粉が多く、サナエタデ節－ウナギツカミ節が多産する。その他ではイネ科、カヤツリグサ科、クワ科、キンポウゲ科、ヨモギ属等を伴う。木本花粉は、モミ属、ツガ属、マツ属などが多く認められ、マキ属、スギ属、アカガシ亜属、トチノキ属なども認められる。

試料⑦からも花粉化石が検出されるが、他の試料と同様にシダ類胞子が多産する傾向にある。試料⑦では木本花粉の割合が高く、モミ属、ツガ属、マツ属が多く産出し、マキ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属、アカガシ亜属等を伴う。草本花

第４表　花粉分析結果

種　類	試料番号 ②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
木本花粉							
マキ属	－	－	3	3	－	2	－
モミ属	－	－	13	2	5	23	－
ツガ属	－	－	11	2	4	23	－
マツ属複維管束亜属	－	－	－	3	－	19	－
マツ属（不明）	－	1	9	4	4	43	－
コウヤマキ属	－	－	1	－	－	－	－
スギ属	－	－	1	－	－	2	－
ヤマモモ属	－	－	1	－	－	－	－
クマシデ属－アサダ属	－	－	－	1	－	－	－
ブナ属	－	－	－	－	－	1	－
コナラ属コナラ亜属	－	－	1	－	－	10	－
コナラ属アカガシ亜属	－	－	3	5	－	10	－
ニレ属－ケヤキ属	－	－	－	－	－	1	－
トチノキ属	－	－	1	－	－	－	－
グミ属	－	－	－	－	－	1	－
草本花粉							
イネ科	－	1	7	2	1	36	－
カヤツリグサ科	－	－	6	－	－	1	－
クワ科	－	－	1	－	－	－	－
サナエタデ節－ウナギツカミ節	－	－	54	1	－	3	－
ナデシコ科	－	－	－	－	－	1	－
キンポウゲ科	－	－	1	－	－	－	－
ヨモギ属	－	－	6	1	1	2	－
キク亜科	－	1	－	1	1	－	－
タンポポ亜科	－	－	－	－	－	－	1
不明花粉							
不明花粉	－	1	11	－	1	3	－
シダ類胞子							
ヒカゲノカズラ属	－	4	20	－	3	9	－
イノモトソウ属	－	14	163	5	11	60	－
ミズワラビ属	－	－	20	－	－	1	－
他のシダ類胞子	－	29	448	21	87	232	－
合　計							
木本花粉	0	1	44	20	13	135	0
草本花粉	0	2	75	5	3	43	1
不明花粉	0	1	11	0	1	3	0
シダ類胞子	0	47	651	26	101	302	0



乾土 1g あたりの個数で示す。●○は 100 個未満を定性的に示す。

第 45 図　植物珪酸体群集

粉ではイネ科が多く産出し、カヤツリグサ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ナデシコ科、ヨモギ属を伴う。

（3）植物珪酸体

結果を第５表、第 45 図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

試料①は、植物珪酸体含量が約 1,800 個 /g である。栽培植物であるイネ属の産出が目立ち、短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が認められる。その含量は、短細胞珪酸体が 200 個 /g 程度、機動細胞珪酸体が 400 個 /g 程度である。籾殻（穎）に形成される穎珪酸体も検出される。また栽培種を含む分類群としてコムギ連も産出する。これらの他に、メダケ属を含むタケ亜科、イチゴツナギ亜科などもみられる。

第５表　植物珪酸体含量

（個/g）

分　類　群	試料番号 ①	②	③	④	⑦
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ属	200	300	－	－	－
メダケ属	<100	<100	100	100	<100
タケ亜科	200	400	500	300	100
ヨシ属	－	<100	<100	100	<100
コムギ連	<100	<100	－	－	－
イチゴツナギ亜科	<100	<100	<100	<100	－
不明	400	500	600	400	300
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
イネ属	400	800	<100	<100	<100
メダケ属	<100	100	200	100	100
タケ亜科	<100	500	900	400	300
ヨシ属	－	<100	<100	200	100
不明	300	500	300	500	200
合　計					
イネ科葉部短細胞珪酸体	900	1,300	1,200	900	600
イネ科葉身機動細胞珪酸体	900	1,900	1,300	1,300	800
植物珪酸体含量	1,800	3,200	2,500	2,200	1,400
珪化組織片					
イネ属頴珪酸体	＊	＊	－	－	－
樹木起源珪酸体					
クスノキ科	－	－	＊	＊＊	＊

含量は、10の位で丸めている（100単位にする）
<100：100個/g未満
－：未検出，＊：検出，＊＊：多い

試料②の植物珪酸体含量は試料番号①よりも多く、約 3,200 個 /g である。本試料でもイネ属の産出が目立ち、短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が認められる。その含量は、短細胞珪酸体が 300 個 /g 程度、機動細胞珪酸体が 800 個 /g 程度である。穎珪酸体も検出される。また栽培種を含む分類群としてコムギ連も産出する。これらの他に、メダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、イチゴツナギ亜科などもみられる。

試料③と試料番号④は、上位の試料よりも植物珪酸体含量が少なくなり、2,200 ～ 2,500 個 /g である。イネ属が産出するものの、機動細胞珪酸体のみであり、その含量は 100 個 /g 未満と少ない。この他にはメダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属が見られる。またイネ科起源の植物珪酸体の他に樹木起源のクスノキ科が検出される。

試料⑦は、植物珪酸体含量が約 1,400 個 /g である。イネ属の機動細胞珪酸体が産出し、その含量は 100 個 /g 未満である。この他に、メダケ属を含むタケ亜科やヨシ属、樹木起源のクスノキ科が見られる。

第４節　考察

（1）花粉化石、植物珪酸体

ここでは、花粉化石と植物珪酸体の産状にもとづき、遺跡とその周辺の古植生について検討を試みる。

花粉化石は、いずれの試料も化石の産状が悪く、古植生を推定することが困難であった。一般的に花粉やシダ類胞子は、腐蝕に対する抵抗性が種類により異なっており、落葉広葉樹の花粉よ

りも針葉樹の花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている（中村 ,1967; 徳永・山内 ,1971; 三宅・中越 ,1998 など）。相対的に多くの花粉化石の産出が認められた試料④、⑦をみると、モミ属、ツガ属、マツ属などの針葉樹が多く認められ、その他も比較的分解に強い花粉や、分解が進んでも同定可能な種類の花粉が確認される傾向にある。このことから、今回の分析結果では、分解に強い花粉が選択的に残された可能性が高く、得られた花粉化石群集は、当時の植生を定量的に反映していないと考えられる。

上記のように花粉化石の保存状態を考慮する必要があるが、相対的に花粉化石の保存状態が良かった試料④、⑦では、草本花粉においてサナエタデ節－ウナギツカミ節やイネ科をはじめ、カヤツリグサ科、クワ科、キンポウゲ科、ヨモギ属といった、明るく開けた場所に草本群落を形成する種群で構成される。このような産状からは、詳細な時期が現段階で未定であるものの、試料の時期である弥生時代中期～後期に、遺跡とその周辺で草地が多く広がるような植生景観であったことが推測される。

試料④、⑦の木本花粉については、マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属、スギ属などの針葉樹、ヤマモモ属、コナラ属アカガシ亜属などの常緑広葉樹、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属、トチノキ属などの落葉広葉樹が認められる。保存状態が悪いことから、今回の分析結果においてはっきりとしたことは言及できないものの、産出した種群については、安定した森林を構成する種類よりも、成長が早かったり、萌芽による更新が容易であるなど、土地条件が悪くても生育可能な種類で構成される傾向にある。なお、弥生時代～古墳時代に瀬戸内沿岸では、カシ類やシイ類など常緑広葉樹を主体とする植生であったとされており（三好 ,1998）、土壌が安定した山地および丘陵や台地などを中心に、常緑広葉樹が分布していたと考えられる。三好（1998）の研究成果をふまえると、弥生時代～古墳時代に遺跡とその周辺では、河川活動などの自然撹乱、もしくは人間の森林伐採や耕作地開発といった人為撹乱のいずれかないし双方の営力によって、植生の破壊が起こりやすい領域が広がっており、二次林が多く生育していたことが想定される。この点については、本遺跡ないし隣接遺跡において保存状態の良い分析結果を得ていき、今後検証していくことが必要である。

植物珪酸体では、すべての試料で栽培種であるイネ属の珪酸体が産出することが着目される。ただし、その含量密度は全体的に低く、耕作土の可能性のある近現代の試料①と中世の試料②で相対的に高い他は、100 個 /g 以下である。試料①と②では、葉部の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体以外に、籾に形成される穎珪酸体も随伴する。また、ここでは、下位で産出しない栽培種のコムギを含むコムギ連が認められることにも着目される。

なお、含量密度が低いのは、イネ属だけでなく、他の種類も同様である。同一試料では、花粉化石だけなく、後述するように植物珪酸体とよく似た化学成分を有する珪藻化石も保存状態が劣悪である。よって、今回の分析で産出した植物珪酸体は、他の化石同様に、分解や風化の影響を強く受けているものと判断される。このことから、今回の植物珪酸体結果は、当時の植生を定量的に反映していないと考えられる。

上記のように植物珪酸体の保存状態を考慮する必要があるものの、すべての試料で僅かながらイネ属が産出することから、弥生時代中期～後期に分析地点ないしその周辺では、水田ないし居住域が存在しており、そこで栽培ないし持ち込まれたイネが供給されるような堆積環境下にあったことが推定される。ただし、今回の分析段階では、本遺跡や隣接遺跡の動態を検討できておらず、その由来について、これ以上の言及はできない。この点については今後の課題であり、周辺遺跡を含めた遺跡形成過程をふまえ植物珪酸体の産状を再検討していくことが必要である。

イネ属以外では、湿った場所を好むヨシ属や、乾いた場所を好むメダケ属を含むタケ亜科の産出が認められる。今回の分析結果では、ヨシ属とタケ亜科を比べた場合、タケ亜科の方が相対的に含量密度が高い。タケ亜科の仲間は、自然堤防や明るい二次林の林床などの乾いて開けた場所に生育する種類が多い。常緑広葉樹林の林床は暗く、タケ亜科の生育には不適であるとみられることからも、この傾向は木本花粉化石群集と調和的な結果である。さらに、後述する遺跡の立地環境や今回分析した微化石の保存状態をふまえると、植物珪酸体の分析層準では、湿地よりも地表付近が常に大気下に曝され好気的な土壌環境が維持されるような高燥な土地条件であった可能性が示唆される。ただし、タケ亜科については、他のイネ科と比較して風化に強く、また生産量の多い点がこれまでの研究から指摘されており（近藤 ,1982; 杉山・藤原 ,1986）、他の種類よりも残留しやすい。よって、タケ亜科は、選択的に残存したため、相対的に含量密度が高くなったとも解釈される。この点については、遺跡とその周辺での古地形復元を行っていないため、現段階でどちらが植物珪酸体組成に強く影響を及ぼしているかを判断することができない。

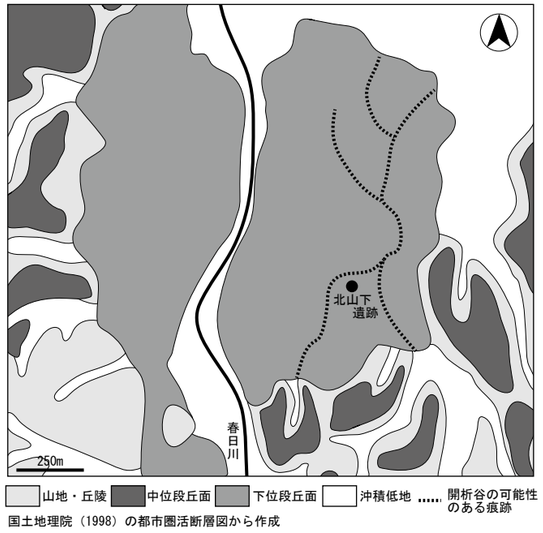
なお、樹木起源の植物珪酸体も検出されるが、これらはクスノキ科などの常緑広葉樹に由来するとみられる。このような樹木珪酸体の検出は、常緑広葉樹林が発達する西日本地域において、よくみられる傾向である（杉山、1999 など）。

（2）珪藻化石

今回の分析層準では、いずれの試料も保存状態が非常に悪く、得られた珪藻化石も極少量である。珪藻化石や花粉、植物珪酸体といった微化石は、堆積速度が大きいと堆積物中に取り込まれる化石の含量密度が減少する。さらに、これらの微化石は、泥と挙動をともにするので、砂礫質の分析試料においても化石の含量密度が低下する。また、微化石の保存については、堆積段階および埋没後の土壌環境が水浸かりの嫌気的（還元的）状態で良く、好気的（酸化的）状態で相対的に不良となる傾向がある（松井 ,2003;Retallacl,2001）。当社のこれまでの分析結果にもとづく経験的な知見からも、堆積後に好気的環境下で大気に曝されると、分解消失が進行する傾向があることが認識される。

本遺跡は、国土地理院（1998）の都市圏活断層図によると、数万年前～数千年前に離水した下位段丘面上に立地していることが確認される（第 46 図）。遺跡周辺の地形をふまえると、遺跡が載る下位段丘面は、春日川および後背の山地・丘陵から流出するその支流が形成した、扇状地堆積物で構成されると考えられる。通常、このような段丘面上では、縄文時代中期以降の完新世の新しい時期に堆積層の被覆が生じることが少ない。これに対し、今回分析を実施した調査区で

は、第 43 図に示した粒度組成と堆積状況から、発掘調査で確認される深度において、洪水堆積物を中心とした氾濫原面の上方付加が、弥生時代に生じた可能性が高いことが指摘される。離水後の段丘面上でこのような堆積が生じる要因としては、その地点が段丘面上を侵食した開析谷内に位置していることや、付近の流路の河床上昇といった地形的要因があげられる。空中写真の実体視による予察的な地形判読を試みたところ、北山下遺跡では、遺跡内に段丘面上に形成された開析谷が存在する可能性がうかがえる。ただし、その地形的痕跡は、非常に不明瞭で埋没がかなり進行していることが予想される。このため、空中写真判読のみからでは、開析谷の存在を確認することができない。よって、開析谷の存在の有無については、遺跡とその周辺でのより詳細な地形・地質学的検討を行うことが必要である。しかし、今回の分析報告では、本遺跡やその周辺遺跡の発掘調査結果をふまえた、細かな時空間スケールでの地形・地質学的検討を行うまでに至っていない。従って、現段階では、分析を実施した調査区が開析谷内に位置しているかどうかについて言及できない。



第 46 図　遺跡周辺の地形分類図

なお、一般的に、段丘面上の開析谷では、地下水が集中するため、谷内で湿潤な堆積環境が形成され、泥炭質の堆積物の累重することが多い。今回の調査区では、発掘調査で確認される深度において、植物遺体の挟在がほとんど認められない砕屑物主体の堆積層で構成される（第 43 図）。これらの堆積層では、土色から腐植の蓄積が予想される層準が挟在する。このような堆積状況と上記の堆積層の記載をふまえると、試料③より下位の弥生時代を中心とする堆積層は、間欠に発生した洪水によって土砂が供給されるものの、氾濫時以外の期間は地表環境が安定し、土壌生成が進行するような氾濫原であったことが推察される。

このような氾濫原では、基本的に地下水位が低いため、地表付近で定常的に湿潤状態とはならずに、むしろ氾濫時以外は乾燥傾向になり、好気的環境に置かれることが多い。この場合、堆積時には水が存在するものの、時間の経過とともに乾いてくるため、大気に曝される。その際に堆積層の中の珪藻殻は、基質となる堆積物の粒子の大きさに関係無く、比較的、短期間に分解が促進されるため、珪藻化石が検出されないケースが多く、今回もこれに相当するとみられる。わずかにみられる珪藻化石から推測するに、湿地に生育する種類が散見されることから、一時的には湿地のような環境下にあった可能性があるが、定常的ではなく、基本的には好気的な環境下にあったことを示す産状であると解釈される。

なお、発掘調査で確認される基本層序をなす堆積層最下部では、腐植質に富むと推測される黒色～黒褐色をなす泥層（東壁②の 15 層、Ｄ－Ｄ '14・19 層）の存在が認められる。本層での植物遺体の挟在状況は不明である。この層については、上位の弥生時代の堆積層と層相や粒度組成が異なる可能性がある。層相からは、本層が上記した開析谷内を埋積する堆積層に相当することも想定されるが、本層以下の深掘断面調査の情報が得られておらず、不明な点が多い。もし、18 層より下位が開析谷の埋積層であった場合には、今回分析を実施した弥生時代の層準は、埋没が進行し凹地状となった開析谷を覆う氾濫堆積物に相当する可能性が高い。３区東側を中心に分布する砂質堆積物の試料⑧については、調査区に流入した洪水砂層であることも想定される。そうした場合には、３区の第２遺構面で検出された溝は、開析谷とその周辺を埋積した氾濫原上の高まりからその縁辺部に形成されたものとみなされるかも知れない。

以上に述べてきた点については、本遺跡とその周辺遺跡での詳細な地形・地質学的検討をふまえ、弥生時代と考えられる分析層準やその遺構の形成環境についてさらに検証していく必要がある。

＜引用文献＞

Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,35 － 47.

安藤一男 , 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42（1990）, 73 ～ 88, aNN. Tohoku Geogr. Assoc.

Desikachiary, T. V., 1987, Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at TT. Maps & Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. 1-13, Plates : 401-621.

Erdtman G.,1952,Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms（An introduction to palynology. I）.Almqvist&Wiksells,539p.

Erdtman G.,1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteriodophyta, Bryophyta（Illustrations）（An Introduction to Palynology. II）,147p.

Feagri K. and Iversen Johs.,1989,Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press,328p.

藤木利之・小澤智生 ,2007, 琉球列島産植物花粉図鑑 . アクアコーラル企画 ,155p.

Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.

Hustedt, F., 1937-1938, Systematische unt okologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Ⅰ～Ⅲ . Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809p, 1-155p, 274-349p.

Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.

Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.

伊藤良永・堀内誠示 , 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用 . 日本珪藻学誌 ,6, 23-44.

国土地理院 ,1998,1:25000 都市圏活断層図 高松南部 .

近藤錬三 ,1982,Plant opal 分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究 . 昭和 56 年度科学研究費（一般研究Ｃ）研究成果報告書 ,32p.

近藤錬三 ,2010, プラント・オパール図譜 . 北海道大学出版会 ,387p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, Naviculaceae. Bibliothyca Diatomologica, vol. 9, p. 250. Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2（1）: 876p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2（2）: 596p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2（3）: 576p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2（4）: 437p.

Lowe, R. L., 1974, Environmental requirements and pollution tolerance of fresh-water daitoms. In Environmental Monitaing Ser. EPA-670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center office of Res. Develop. U. S. Environ. Protect. Agency. cincinati. 1-344.

松井　章 ,2003, 環境考古学の歴史と実践 . 環境考古学マニュアル , 同成社 ,6-16.

三好教夫 ,1998, 中国・四国地方の植生史 . 図説　日本列島植生史 , 安田　喜憲・三好　教夫編 , 朝倉書店 ,138-150.

三好教夫・藤木利之・木村裕子 ,2011, 日本産花粉図鑑 . 北海道大学出版会 ,824p.

三宅　尚・中越信和 ,1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態 . 植生史研究 ,6,15-30.

中村　純 ,1967, 花粉分析 . 古今書院 ,232p.

中村　純 ,1980, 日本産花粉の標徴　Ⅰ　Ⅱ（図版）. 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第 12,13 集 ,91p.

Retallack,G.J.,2001,Soil and Past second edition.Blackwell Science,404p.

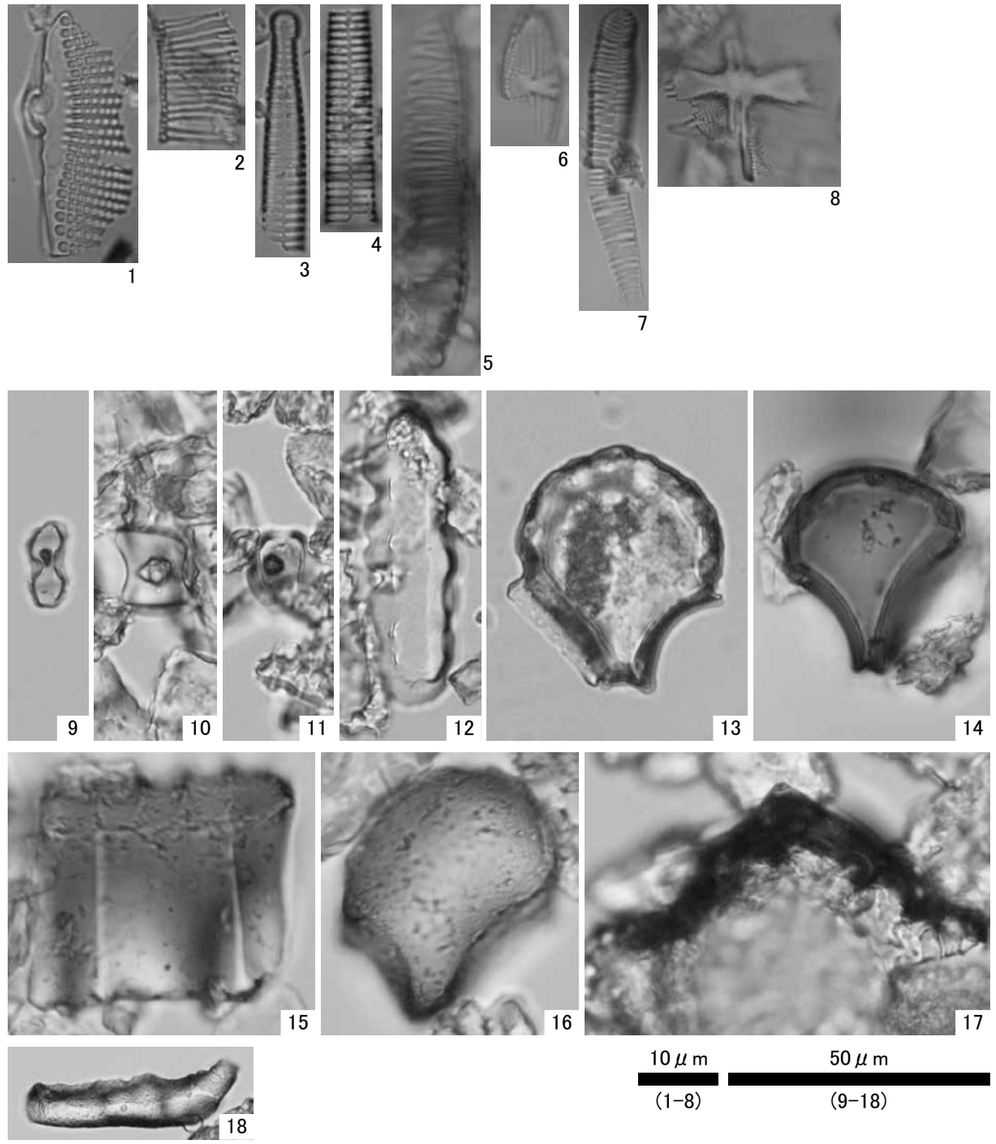
島倉巳三郎 ,1973, 日本植物の花粉形態 . 大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第 5 集 ,60p.

杉山真二 ,1999, 植物珪酸体分析からみた最終氷期の九州南部における照葉樹林発達史 . 第四紀研究 ,38,109-124.

杉山真二・藤原宏志 ,1986, 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－ . 考古学と自然科学 ,19,69-84.

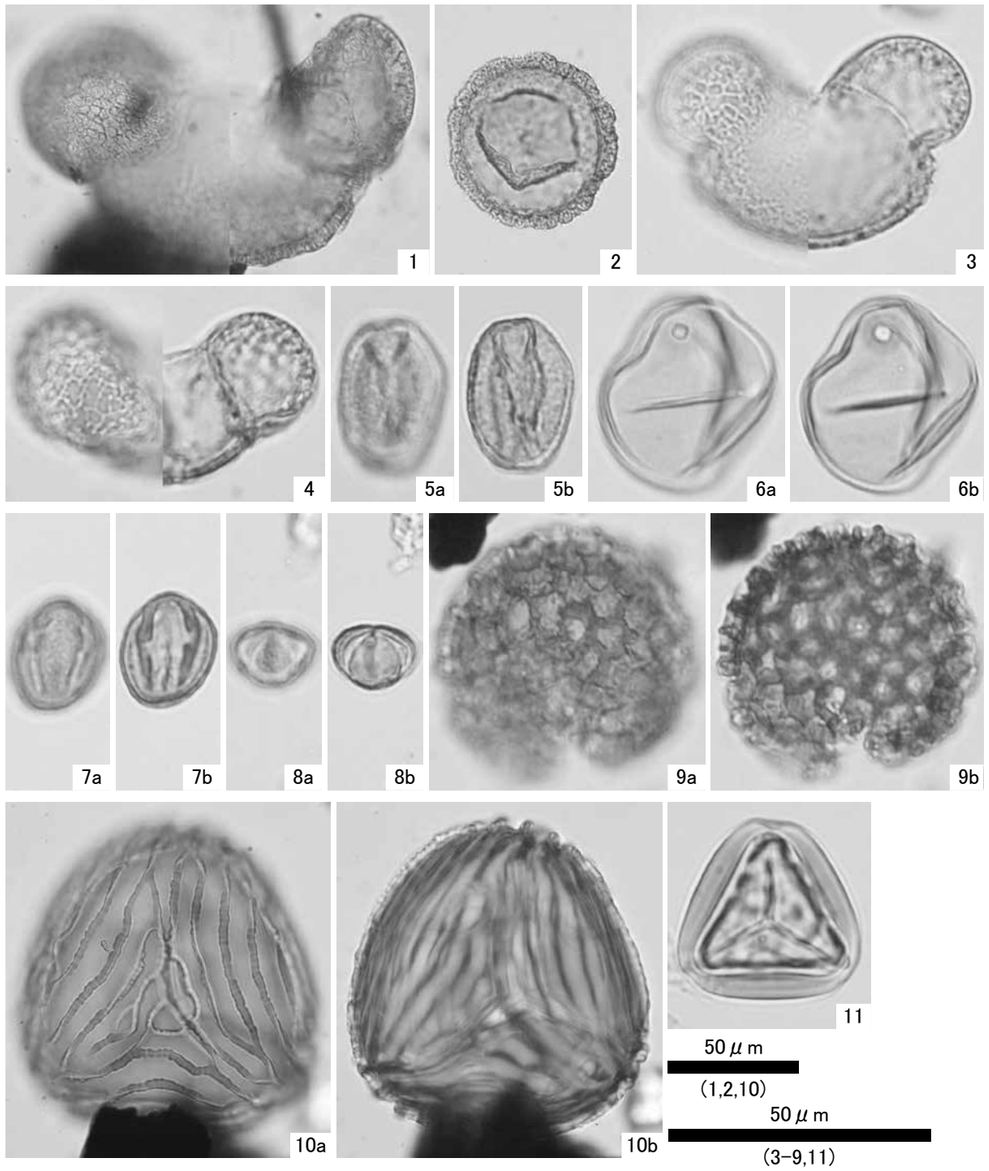
徳永重元・山内輝子 ,1971, 花粉・胞子 . 化石の研究法 , 共立出版株式会社 ,50-73.

図版１　珪藻化石・植物珪酸体



1．*Cymbella* spp.（3区北壁;④）
2．*Eunotia* spp.（3区北壁;④）
3．*Fragilaria ulna* (Nitzsch) Lange-Bertalot（3区北壁;④）
4．*Fragilaria* spp.（3区北壁;④）
5．*Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow（3区SD201;⑤）
6．*Luticola mutica* (Kuetz.)D.G.Mann（3区SD201;⑤）
7．*Meridion circulare* var. *constrictum* (Ralfs) Van Heurck（3区SD201;⑤）
8．*Stauroneis phoenicenteron* var. *signata* Meister（3区SD201　;⑤）
9．イネ属短細胞珪酸体(試料①)
10．メダケ属短細胞珪酸体(試料③)
11．ヨシ属短細胞珪酸体(試料④)
12．コムギ連短細胞珪酸体(試料①)
13．イネ属機動細胞珪酸体(試料①)
14．イネ属機動細胞珪酸体試料②)
15．メダケ属機動細胞珪酸体(試料③)
16．ヨシ属機動細胞珪酸体(試料④)
17．イネ属穎珪酸体(試料②)
18．樹木起源(クスノキ科)(試料④)

図版2　花粉化石



1．モミ属(試料④)
2．ツガ属(試料⑤)
3．マツ属(3区北壁;⑤)
4．マキ属(試料⑤)
5．コナラ属コナラ亜属(試料⑦)
6．イネ科(試料⑦)
7．コナラ属アカガシ亜属(試料⑤)
8．ヨモギ属(試料④)
9．サナエタデ節－ウナギツカミ節(試料④)
10．ミズワラビ属(試料④)
11．イノモトソウ属(試料⑤)

第５章　まとめ

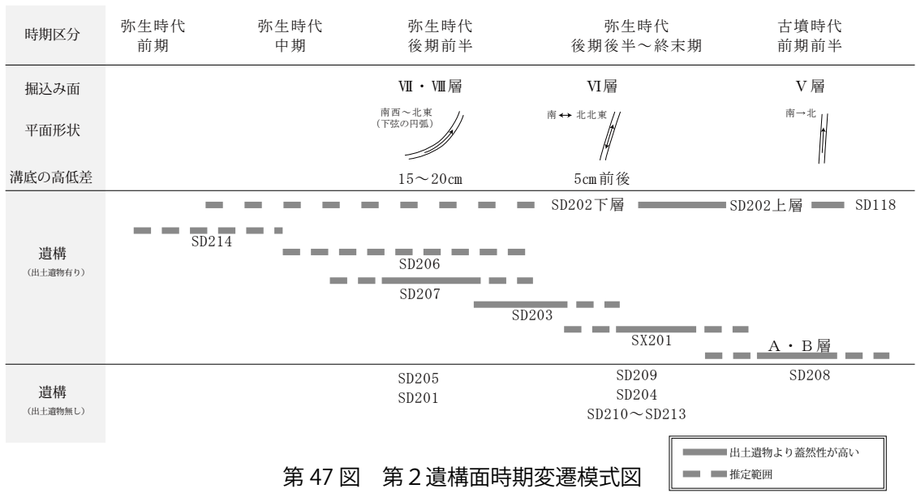
はじめに

北山下遺跡は、主に弥生時代後期前半～古墳時代前期と中世の複合遺跡である。今回の発掘調査では、第１遺構面では中世の建物跡を検出し、一部ではあるが集落の様相が明らかになった。第２遺構面では多条の溝や土器が出土した。そして、これらは周辺地形や自然科学分析の結果から、開析谷が埋積し（Ⅷ層）縄文時代以前に形成されたと考えられる旧河道（Ⅶ層）の埋没後に形成された、弥生時代から古墳時代前期の溝跡群（ＳＤ 201 ～ 214）として認識できた。

第１節　弥生時代～古墳時代前期の遺構変遷

第２遺構面では、弥生時代から古墳時代前期までの溝・土坑・性格不明遺構を検出した。第３章第２節で既述のとおり調査の工程上、同一遺構面での検出となったが、層位観察などから前後関係があることを想定できる。そこで層位関係と出土遺物による遺構の時期変遷を第 47 図にまとめる。

層位等から、溝の平面軌跡に少なくとも３段階の変遷があることが推定できる。溝の流れは北東方向からやや北に流れを変え、古墳時代前期にはほぼ北に指向することがわかった。例外としてＳＤ 202 は、唯一地形の傾斜に沿わず、南東から北西に伸びている。弥生時代終末期を中心とする時期に機能した後、古墳時代前期前半に一度埋没し、その後ほぼ同一平面形で再掘（ＳＤ 118）されている。ＳＤ 205・206・207 は円弧状の軌跡を描き一定間隔で並走する溝で、掘削が深いＳＤ 207 を本流とした溝群と捉えられる。ＳＤ 207 は複次の改修が見られた。ＳＤ 214 は幅広で分岐する溝である。時期決定に関しては、弥生時代前期の遺物が１点のみ出土しているだけなので判断しがたいが、層位的にも古相を示している。このように弥生時代後期前半以前に所属する溝は、比較的規模も大きく、複数回の埋没と再掘をされながら長期間機能していたと考えられる。



第 47 図　第２遺構面時期変遷模式図

弥生時代終末から古墳時代前期前半の土器が一括出土したＡ・Ｂ層に関しては、明確な遺構と断定できないが、土器の集中出土から考えて、近くに当該期の人間活動の痕跡を示すものとして評価できる。

本遺跡では、明確な居住域を認めることはできなかったが、高松平野では旧河道や灌漑水路などの周辺に、比較的小規模な住居群が分布することが知られている[1)]。地形の検討から、調査区の西側から春日川に至るまでの微高地上か、南側の段丘面などに居住域を求めたいが、いずれも想定の域を出ない。高松平野の南部においては、弥生時代後期の集落数の増加や立地の変化が指摘されており[3)]今後、春日川中流域東岸における調査例の増加を待ちたい。

第２節　条里地割と中世集落

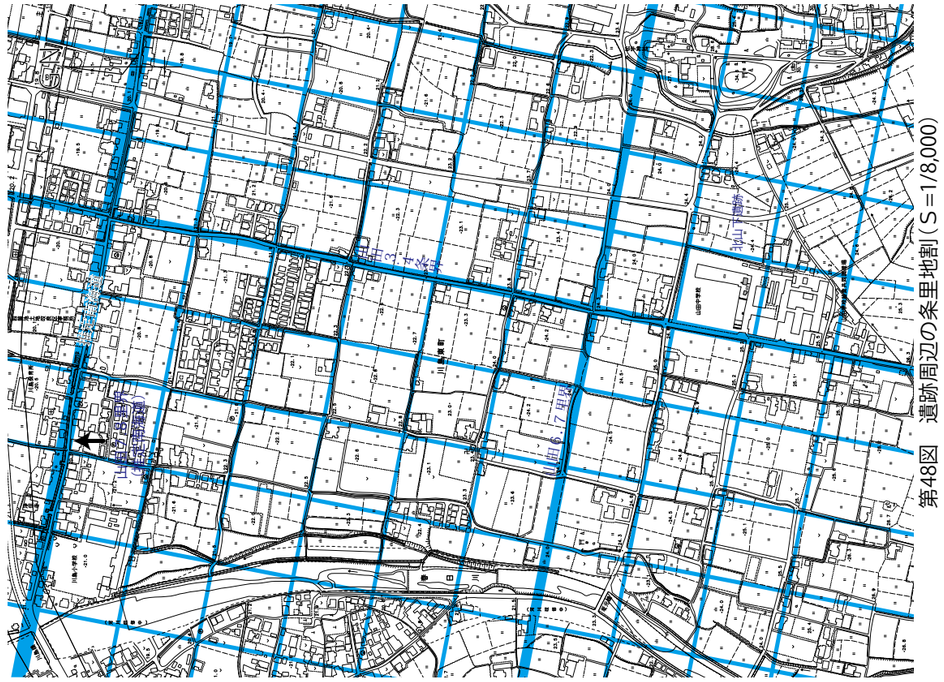
第１遺構面では、中世集落に伴う遺構を検出し、高松平野で確認されている他の中世集落（空港跡地遺跡・西打遺跡など）と同様、条里地割に規制された土地利用の痕跡が明らかになった。北山下遺跡は山田郡三条六里に含まれ、位置的には三条と四条の条界線に接する。検出できた溝は後世の削平を受け、遺物も僅少である。しかし、南北溝（ＳＤ 101 ～ 105）は、条里地割の方向（Ｎ -11° - Ｅ）と合致し、ＳＤ 104 は中線、ＳＤ 105 は長地、ＳＤ 101・103 は半長地にそれぞれ位置していることがわかった。ＳＤ 101・102 のように極めて直線的な幅１ｍ程の２本の溝が一体となった形は、井出東Ⅰ遺跡や川島本町遺跡などでも見られ、当地近辺の条里型地割の縦軸の施工状況を明らかにするための基礎資料となる。

南北溝ＳＤ 104 を境として、東側の微高地上に、13 世紀後半から 14 世紀前半頃の大型建物を含む３棟の掘立柱建物が復元でき、柱穴の集中から考えて、調査区南側にも続く可能性がある。この南北溝ＳＤ 104 は、中世段階において屋敷地の西辺を示す区画溝であったと考えられる。調査区の制限もありこの屋敷地の全容が明らかになったわけではないが、床面積や柱構造からSB101 は中心的な建物と見られる。遺物については、貿易陶磁器である青磁が１点、白磁が２点、渡来銭が１点出土しているが、他の集落と比較して多い量とは言えない。すべての遺構から時期判別可能な遺物が出土したわけではないので、集落形態や時期変遷を述べることはできないが、既に森格也氏により研究されている中世集落の建物群構成の類型化[5)]によると、北山下遺跡の中世集落は、大型建物であるＳＢ 101 を主屋として、副屋や納屋を併せ持つ、Ⅱ－ｂ型にあてはまり、名主層の存在が窺がえる。

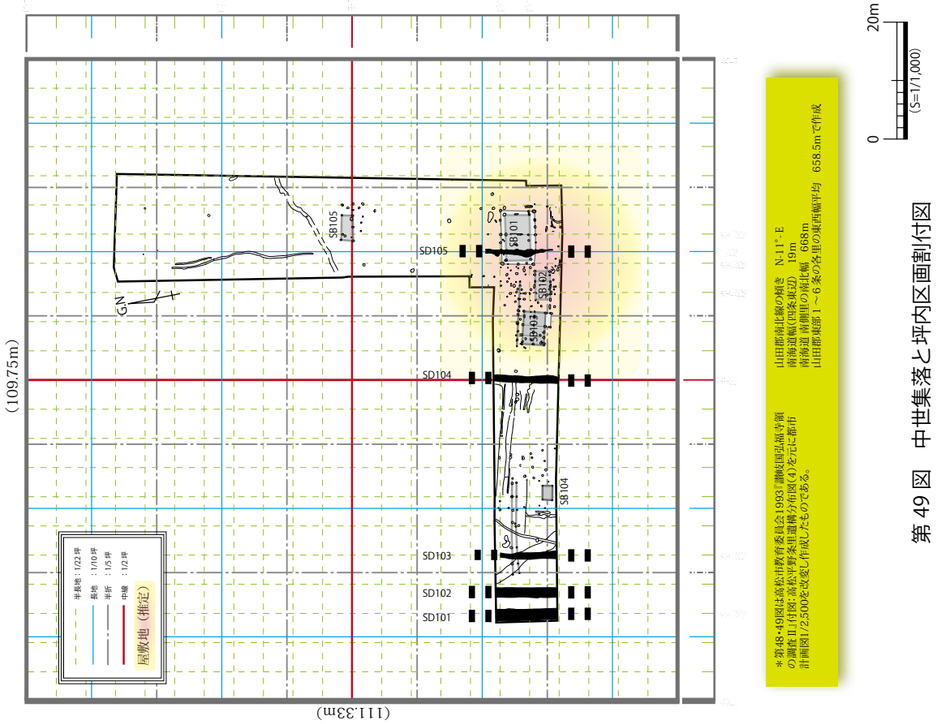
ＳＤ 104 より西側では、条里方向の溝や柵列・小型の建物１棟のみで空隙地が多い。ＳＤ 101・ＳＤ 110・ＳＰ 3037・ＳＰ 3038 から東側の屋敷地よりも古相を示す須恵器や黒色土器が出土していることから、これらの掘削は東側の屋敷地などよりも先行すると推測される。

＜註・参考文献＞

1) 香川県教育委員会 大久保 徹也編 1995 『上天神遺跡』
2) 香川県教育委員会 2007「田村遺跡Ⅱ　川島本町遺跡　川島本町南遺跡」『県道高松善通寺線道路改修事業及び県道西植田高松線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 香川県教育委員会
3) 渡邊 誠 2014「弥生時代中期から後期における高松平野の集落動態」『東アジア古文化論攷２』中国書店
4) 金田 章裕 1999「高松平野における条里地割の形成」『讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ～第２次弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書～』高松市教育委員会
5) 森 格也 1993「瀬戸内地方の中世集落の展開ー讃岐を中心としてー」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅰ』（財）香川県埋蔵文化財調査センター



第48図　遺跡周辺の条里地割（Ｓ＝1/8,000）



第 49 図　中世集落と坪内区画割付図

遺構・遺物観察表

第６表　遺構観察表①

遺構番号	検出面	主軸方向	形状・機能・構造	重複関係	規模（m）			出土遺物
					長さ・長軸	幅・短軸	深さ	
SD201	2	南西～北東	円弧・逆凸状	SD202に切られる	[7.1]	1.1	0.5	弥生土器
SD202	2	南東～北西	曲線・逆台形	SD201を切る	[9.3]	0.6～2.0	0.4	弥生土器
SD203	2	南西～北北東	曲線・U字状	-	[8.5]	0.3	0.3	弥生土器
SD204	2	南西～北北東	曲線・U字状	-	[9.7]	0.9	0.2	弥生土器片
SD205	2	南西～北東	円弧・U字状	-	[15.8]	1.1	0.5	-
SD206	2	南西～北東	円弧・U字状	-	[15.8]	0.7～1.5	0.4	弥生土器
SD207	2	南西～北東	曲線・逆台形	-	[14.0]	2.0	0.4	弥生土器
SD208	2	南西～北東	曲線・逆台形	SD209と分岐	[22.3]	1.0	0.3	-
SD209	2	南西～北東	曲線・U字状	SD208と分岐	[17.1]	0.8	0.2～0.3	-
SD210	2	南西～北東	曲線・U字状	SD211と連結	18.8	0.4	0.2	-
SD211	2	南北・南西～北東	曲線・U字状	SD213と連結	20.5	0.9	0.3	-
SD212	2	南西～北東	曲線・U字状	SD214に切られる	[10.5]	0.7	0.4	-
SD213	2	南西～北東	曲線・逆台形	SD211と連結	[13.5]	1.0	0.4	-
SD214	2	南西～北東	曲線・U字状	SD212を切る	[17.5]	1.1～2.2	0.4	弥生土器,木片
SK201	2	-	楕円・U字状	-	0.9	0.8	0.2	-
SX201	2	南北	不整形	-	[4.2]	4.0	0.4	弥生土器片
SX202	2	-	不整円形	SD208・SD209に連結	2.4	2.1	0.3	弥生土器,杭
SX203	2	南西～北東	溝状落込み	-	[15.0]	6.6	0.1	-

第７表　遺構観察表②

遺構番号	検出面	主軸方向	形状・機能・構造	重複関係	規模（m）			出土遺物
					長さ・長軸	幅・短軸	深さ	
SA101	1	N-76°-W	一列	-	15.0	1.2	0.2～0.4	弥生土器,土師質土器,壁体
SA102	1	N-79°-W	二列	SD118を切る		0.7～1.0	[0.4]	弥生土器,須恵器,土師質土器
SA103	1	N-11°-E	二列	-	5.9	0.5	[0.2～0.4]	土師質土器
SD101	1	N-11°-E	直線	SA103を切る	[20.0]	1.7	0.1	須恵器,黒色土器
SD102	1	N-11°-E	直線	-	[19.0]	1.9	0.2	土器片
SD103	1	N-11°-E	直線	SD118を切る	[19.0]	1.1	0.1	-
SD104	1	N-11°-E	直線・区画溝	-	[10.8]	0.8～1.3	0.08～0.2	土師質土器,中世須恵器,土錘
SD105	1	N-11°-E	直線	SB101を切る	[11.5]	0.7～1.1	0.2	土師質土器,貿易陶磁器,須恵器,鉄製品
SD106	1	N-11°-E	雨垂れ痕跡	-	[1.3]	0.2	0.0	-
SD107	1	南北	直線・鋤溝	-	[5.2]		0.1	-
SD108	1	南北	直線・鋤溝	-	[2.5]		0.0	-
SD109	1	N-79°-W	直線		[19.0]	[8.8]	0.1	陶器・土師質土器
SD110	1	N-79°-W	直線	-	[19.0]	0.8	0.1	須恵器,土師質土器,黒色土器
SD111	1	N-79°-W	直線	-	[19.1]	0.5～1.0	0.1	-
SD112	1	東西	直線・鋤溝？	-	[0.95]	0.2	0.0	-
SD113	1	-	曲線・鋤溝？	-	[1.5]	0.2	0.0	-
SD114	1	-	曲線・鋤溝？	-	[3.9]	0.3	0.0	-
SD115	1	南北	曲線	-	24.2	0.3	0.5	-
SD116	1	南西～北東	曲線	-	[19.0]	0.6	0.2	弥生土器
SD117	1	南西～北東	曲線	ＳＤ118を切る	[11.1]	0.2	0.0	-
SD118	1	南東～北西	曲線	SA102・SD103・SD117に切られる	[10.9]	1.4～1.7	0.4	弥生土器,土師質土器
SK101	1	N-75°-W	不整形	-	1.8	0.9	0.2	須恵器,土師質土器
SK102	1	N-10.5°-W	楕円	-	1.9	0.4	0.1	-
SD001	0	N-79°-W	直線	-	[16.1]	0.7～1.1	0.2	土師質土器,磁器,瓦,石製品,
SE001	0	-	挿入式（編物・円形縦板組型）	SD208と連結	2.9	[1.5]	[1.0]	竹,大甕片
SE002	0	-	不明	-	1.9	[0.8]	[0.8]	-
SK001	0	-	不整円形・廃棄土坑	SB101を切る	2.0	1.8	0.6	土師質土器,青磁,石製品,瓦片,須恵器,磁器

第８表　掘立柱建物 観察表

調査区	遺構名	梁間 × 桁行	梁間（m）		桁行（m）		面積	方位	柱形式 棟方向	出土遺物	時期
			全長	柱間	全長	柱間	（㎡）				
1 4 5	SB101	2 間 × 3 間	4.2	2.1 2.1	7.7	3.45 3.25 1.0	32.3	N-79° -W	総柱 東西棟	土師質土器 中世須恵器 青磁・石器 壁体・炭化材	13C後半～ 14C前半
5	SB102	1 間 × 3 間	2.5	2.5	4.8	1.08 2.1 1.68	12.0	N-80° -W	側柱 東西棟	土師質土器 中世須恵器	13C後半～ 14C前半
5	SB103	2 間 × 3 間	3.7	1.8 1.98	5.5	1.8 1.92 0.8	20.4	N-75° -E	総柱 東西棟	土師質土器 中世須恵器 白磁・古銭	13C後半～ 14C前半
3	SB104	1 間 × 1 間	1.7	1.7	2.4	2.4	4.1	N-79° -W	側柱 東西棟	土器片	中世
1	SB105	1 間 × 2 間	2.1	2.1	4.3	2.3 1.98	9.0	N-80° -W	側柱 東西棟	土器片	中世

第９表　石器・鉄製品・銅製品観察表

＊（推定値）［残存値］を示す

掲載番号	挿図番号	遺構名 層位名	種類	器種	色調 石材	法量(cm)				備考
						幅	長さ	厚み	重量（g）	
85	19	第2遺構面 清掃中	石器	石鏃	7.5Y6/1灰 サヌカイト	1.2	2.4	0.25	0.6	
98	22	SA103 SP1068	石製品	砥石	2.5Y8/1灰白 凝灰岩	4.9	[5.7]	3.9	132.9	
113	24	SB101 SP1056	石器	剝片	N6/灰 サヌカイト	4.2	7.9	1.2	33.9	
183	37	SP1013	石器	石鏃	N5/灰 サヌカイト	2.65	3.3	0.5	2.7	
190	38	第1遺構面 精査中	石器	石鏃	5GY5/1ｵﾘｰﾌﾞ灰 チャート	1.4	1.9	0.4	1.2	先端：折損
191	38	第1遺構面 精査中	石器	楔型石器	N6/灰 サヌカイト	6.0	9.6	1.4	91.1	
195	39	SD001	石製品	砥石	10Y7/1灰白 砂岩	5.7	[12.0]	[4.7]	580.0	被熱
199	41	SK001	石製品	砥石	5B6/1青灰 泥岩	4.4	[7.5]	3.7	186.7	
200	41	SK001	石製品	石臼	N6/灰 豊島石 （火山礫凝灰岩）	-	[12.9]	10.8	2100	
201	41	SK001	石製品	石臼	N5/灰 豊島石 （火山礫凝灰岩）	-	[18.0]	7.8	1510	
211	42	出土層位 不明	石器	石鏃	7.5Y6/1灰 サヌカイト	1.7	2.9	0.4	1.6	
84	19	第2遺構面 清掃中	鉄製品	釘	-	0.6	(5.9)	0.6	-	
156	31	SD105	鉄製品	釘	-	0.6	(7.1)	0.5	-	
179	37	SP1033	鉄製品	釘	-	0.6	(6.4)	0.5	-	木質付着
135	27	SB103 SP5070	銅銭	-	-	2.45	2.45	0.14	[2.0]	紹聖元寶 （北宋・AD1094）

第 10 表　土器・土製品観察表①

＊（推定値）［残存値］を示す

掲載番号	挿図番号	遺構名 層位名	種類	器種 部位	法量			調整・文様		色調 上：外面（釉薬） 下：内面・胎土	胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面				
1	11	SD202 上層	弥生土器	広口壺 口縁	(25.6)	-	[2.9]	ﾊｹのちﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	2.5Y6/2灰黄 2.5Y6/2灰黄	普 1mm以内の石英,長石,角閃石,赤色粒を含む。	良好	下川津B類胎土
2	11	SD202 上層	弥生土器	壺or器台 口縁	(16.0)	-	[3.0]	ﾅﾃﾞ,線鋸歯文	ﾅﾃﾞ	10YR8/2灰白 10YR8/2灰白	粗 1.5mm以内の石英,長石,赤色粒を含む。	良好	
3	11	SD202 上層	弥生土器	甕	(18.8)	-	[7.2]	ﾅﾃﾞ,ﾀﾃﾊｹ	ﾊｹのちﾅﾃﾞ,板ﾅﾃﾞ	5YR6/6橙 10YR7/2にぶい黄橙	普 1mm以内の石英,長石,赤色粒を含む。	良好	
4	11	SD202 上層	弥生土器	甕	(11.7)	-	16.1	ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾊｹ,ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾊｹ,板ﾅﾃﾞ	7.5YR7/2明褐灰 7.5YR7/2明褐灰	普 2mm以内の石英,長石を含む。	良	外面体部下半に煤付着,外底面に黒斑
5	11	SD202 上層	弥生土器	体部	-	-	[9.5]	ﾀﾀｷ,ﾀﾀｷのち指ｵｻｴ	ﾊｹ	10YR7/2にぶい黄橙 10YR3/1黒褐	粗 2mm以内の石英,長石を含む。	良好	
6	11	SD202 上層	弥生土器	高杯 杯部	-	-	[3.7]	ﾏﾒﾜ	ﾅﾃﾞ,ﾏﾒﾜ	2.5Y6/2灰黄 2.5Y6/2灰黄	粗 3mm以内の石英,長石,赤色粒を含む。	良好	円盤充填
7	11	SD202 上層	弥生土器	高杯 杯部	-	-	[3.7]	分割ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ,板ﾅﾃﾞ	7.5YR6/4にぶい橙 7.5YR6/3にぶい褐	普 1mm以内の石英,長石,角閃石、赤色粒を含む。	良好	円盤充填
8	11	SD202 下層	弥生土器	甕 底部	-	(18.0)	[12.5]	ﾀﾃﾊｹ,ﾅﾃﾞ	指ｵｻｴ,ﾍﾗｹｽﾞﾘ	10YR6/3にぶい黄橙 2.5Y6/3にぶい黄	普 1mm以内の石英,長石,雲母,赤色粒を含む。	良	外面多量に煤付着
9	11	SD202 下層	弥生土器	体部	-	-	[9.7]	ﾏﾒﾜ,指ｵｻｴ,刺突文	ﾏﾒﾜ,指ｵｻｴ	10YR5/2灰黄褐 10YR7/2にぶい黄橙	普 2mm以内の石英,長石,赤色粒を含む。	良	
10	11	SD202 下層	弥生土器	鉢	(13.0)	(3.6)	[4.7]	ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ,工具痕,貼付突帯1条	2.5Y5/1黄灰 2.5Y6/1黄灰	普 2.5mm以内の石英,長石,金雲母を含む。	良好	外面下部に黒斑
11	11	SD202	弥生土器	鉢	(30.4)	-	[6.4]	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	10YR7/2にぶい黄橙 2.5Y6/2灰黄	普 2mm以内の石英,長石,赤色粒を含む。	良好	
12	11	SD203	弥生土器	高杯 杯部	(26.8)	-	[8.7]	ﾖｺﾅﾃﾞ,4分割ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ,4分割ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾍﾗｹｽﾞﾘ	10YR5/3にぶい黄褐 10YR6/4にぶい黄橙	普 1mm以内の石英,長石,角閃石を含む。	良	下川津B類胎土
13	11	SD206	弥生土器	広口壺 口頸部	(13.8)	-	[6.3]	ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾀﾃﾊｹ、口縁端部 板状工具による刻目	ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾀﾃﾊｹ	10YR5/2灰黄褐 10YR6/2灰黄褐	普 1.5mm以内の石英,長石,赤色粒を含む。	良好	
14	11	SD206	弥生土器	甕 口縁	(27.6)	-	[3.4]	ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾏﾒﾜ	ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾏﾒﾜ	10YR7/3にぶい黄橙 10YR8/3浅黄橙	粗 2mm以内の石英,長石,赤色粒を含む。	良好	
15	11	SD207 上層	弥生土器	甕 口縁	(12.4)	-	[7.1]	ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾊｹ	5Y8/1灰白 5Y8/1灰白	普 微小粒,赤色粒を含む。	良	
16	11	SD207 上層	弥生土器	高杯 杯部	-	-	[3.8]	ﾏﾒﾜ,ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ	2.5Y8/1灰白 2.5Y8/1灰白	普 1mm以内の石英,長石を含む。	良	
17	12	SX202	弥生土器	甕	(16.0)	-	[13.7]	ﾖｺﾅﾃﾞ,板ﾅﾃﾞ,ﾀﾀｷ,一部ﾍﾗｹｽﾞﾘ,,ﾊｹ	ﾅﾃﾞ,板ﾅﾃﾞ,ﾊｹ	5Y8/1灰白 2.5Y8/2灰白	普 1mm以内の石英,長石,赤色粒を含む。	良	外面口縁部以下に煤付着
18	14	SD214 下層	弥生土器	甕 口縁	-	-	[4.5]	ﾖｺﾅﾃﾞ,口縁端部刻み目,ﾍﾗ描き沈線4+α条	ﾖｺﾅﾃﾞ	10YR8/2灰白 10YR8/2灰白	粗 2mm～3mmの石英,長石,赤色粒を含む。	良	如意状口縁
19	16	B層	弥生土器	広口壺	(16.5)	-	28.0	ﾏﾒﾜ,ﾊｹ	ﾊｹ,ﾍﾗﾅｽﾞﾘ(下→上)	7.5YR7/4にぶい橙 10YR8/4浅黄橙	普 1mm以内の石英,長石,赤色粒を含む。	良	体部下半に黒斑
20	16	A層	土師器	直口壺	(12.0)	-	[18.2]	ﾏﾒﾜ	ﾏﾒﾜ	10YR8/3浅黄橙 10YR8/3浅黄橙	普 1mm以内の石英,長石を含む。	良	体部下半に黒斑
21	16	B層	弥生土器	甕 口縁	(17.1)	-	[3.6]	ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾀﾀｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾊｹ	2.5YR4/6赤褐 2.5YR5/6明赤褐	普 0.5mm以内～1mmの石英,長石を含む。	良	
22	16	B層	弥生土器	甕 口縁	-	-	[3.6]	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	10YR7/4にぶい黄橙 7.5YR6/6橙	粗 1mm～4mmの石英,長石を含む。	良	
23	16	B層	弥生土器	甕 口縁	(13.8)	-	[3.6]	ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ	10YR7/4にぶい黄橙 10YR7/3にぶい黄橙	粗 1mm～3mmの石英,長石を含む。	良	
24	16	A・B層	弥生土器	甕 口縁	-	-	[2.8]	ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ,指ｵｻｴ	7.5YR5/6明褐 7.5YR5/4にぶい褐	粗 1mm以内の石英,長石,雲母を含む。	良	
25	16	B層	弥生土器	甕 口縁	(14.4)	-	[2.8]	ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ	7.5YR5/4にぶい褐 7.5YR5/4にぶい褐	粗 1mm以内～2mmの石英,長石,雲母を含む。	良	
26	16	B層	弥生土器	甕	(13.7)	-	[7.0]	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ,成形時の指ｵｻｴ,板状工具によるﾅﾃﾞ	7.5YR4/6褐 7.5YR5/4にぶい褐	粗 1mm以内～2mmの石英,長石,雲母を含む。	良	
27	16	A・B層	弥生土器	甕	8.4	3.5	8.8	ﾖｺﾅﾃﾞ,頸部ﾊｹのちﾖｺﾅﾃﾞ,ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ,指ﾅﾃﾞ,指ｵｻｴのち横方向のﾅﾃﾞ	7.5YR7/6橙 7.5YR6/6橙	普 0.5mm以内～3mmの石英,長石を含む。	良	黒斑
28	16	B層	弥生土器	鉢 口縁	-	-	[2.4]	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	10YR5/4にぶい黄褐 10YR6/4にぶい黄橙	普 1mm以内の石英,長石,黒色粒を含む。	良	
29	16	A・B層	弥生土器	鉢 口縁	-	-	[4.2]	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	7.5YR6/6橙 7.5YR7/4にぶい橙	普 0.5mm以内の石英,長石を含む。	良	
30	16	A・B層	弥生土器	鉢	20.8	-	[9.35]	ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾀﾀｷ	ﾅﾃﾞ	7.5YR7/4にぶい橙 7.5YR7/4にぶい橙	普 0.5mm以内～3mmの石英,長石、雲母を含む。	良	外面に焼成時剥離,黒斑,被熱痕
31	16	B層	弥生土器	鉢	-	-	[12.2]	ﾖｺﾅﾃﾞ,指ｵｻｴ,ﾅﾃﾞ,ﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	10YR5/4にぶい黄褐 10YR5/3にぶい黄褐	普 0.5mm以内～2mmの石英,長石,赤色粒,黒色粒を含む。	良	
32	16	A・B層	弥生土器	底部	-	(6.4)	[5.6]	ﾊｹ	板ﾅﾃﾞ,指ﾅﾃﾞ	7.5YR6/6橙 7.5YR7/6橙	普 0.5mm以内～3mmの石英,長石を含む。	良	黒斑
33	16	A・B層	弥生土器	底部	-	(6.4)	[6.15]	ﾊｹのちﾅﾃﾞ	ﾊｹのちﾅﾃﾞ,指ｵｻｴのちﾅﾃﾞ	5YR6/6橙 7.5YR6/4にぶい橙	普 1mm以内～4mmの石英,長石を含む。	良	

第 11 表　土器・土製品観察表②

＊（推定値）[残存値]を示す

掲載番号	挿図番号	遺構名 層位名	種類	器種 部位	法量 口径	法量 底径	法量 器高	調整・文様 外面	調整・文様 内面	色調 上：外面（釉薬） 下：内面・胎土	胎土	焼成	備考
34	16	B層	弥生土器	底部	－	2.6	[3.75]	ﾏﾒﾜ	指ﾅﾃﾞ	7.5YR6/6橙 7.5YR5/6明褐	普 1mm～5mmの石英，長石を含む。	良	
35	16	A・B層	弥生土器	底部	－	1.9	[5.1]	ﾅﾃﾞ，指ﾅﾃﾞ	指ﾅﾃﾞ，指ｵｻｴ	7.5YR6/6橙 10YR7/4にぶい黄橙	普 0.5mm以内～2mmの石英，長石を含む。	良	
36	16	A・B層	弥生土器	底部	－	(2.4)	[3.0]	ﾀﾃ方向のﾅﾃﾞ，指ｵｻｴ	指ﾅﾃﾞ，指ｵｻｴ	7.5YR5/8明褐 10YR7/4にぶい黄橙	普 0.5mm以内～3mmの石英，長石を含む。	良	
37	16	B層	弥生土器	底部	－	6.3	[3.1]	ﾀﾃ方向のﾅﾃﾞ，ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	7.5YR6/6橙 7.5YR5/6明褐	普 0.5mm以内～2mmの石英，長石を含む。	良	
38	16	A層	弥生土器	底部	－	6.4	[4.6]	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ，指ﾅﾃﾞ，指ｵｻｴ	7.5YR6/6橙 5YR6/6橙	普 0.5mm以内～4mmの石英，長石を含む。	良	外面焼成時剥離
39	16	A・B層	弥生土器	有孔鉢 底部	－	0.9	[9.7]	ﾅﾃﾞ，一部ﾊｹ	板ﾅﾃﾞ	7.5YR6/6橙 7.5YR5/6明褐	普 0.5mm以内～4mmの石英，長石を含む。	良	底部穿孔
40	16	B層	弥生土器	甕 底部	－	4.7	[2.5]	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	指ﾅﾃﾞ，ﾍﾗｹｽﾞﾘ	5YR4/4にぶい赤褐 7.5YR6/4にぶい橙	普 0.5mm以内～3mmの石英，長石を含む。	良	
41	16	B層	弥生土器	甕 底部	－	(6.4)	[2.3]	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ，指ｵｻｴ	2.5Y3/1黒褐 2.5Y3/2黒褐	普 0.5mm以内～3mmの石英，長石を含む。	良	
42	16	B層	弥生土器	甕 底部	－	3.8	[3.3]	ﾀﾃ方向のﾅﾃﾞ，底部一方向にｶｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ，指ﾅﾃﾞ	7.5YR4/6褐 7.5YR3/1黒褐	普 1mm以内～3mmの石英，長石を含む。	良	
43	16	A層	弥生土器	甕or鉢 底部	－	2.0	[5.3]	ﾅﾃﾞ，一部ﾊｹ	ﾅﾃﾞ	10YR8/4浅黄橙 10YR7/4にぶい黄橙	普 1mm～3mmの石英，長石，赤色粒を含む。	良	黒斑，底面に植物圧痕
44	17	V層	弥生土器	広口壺 口縁	－	－	[7.0]	ﾖｺﾅﾃﾞ，ﾏﾒﾜ，押圧突帯	指ｵｻｴ，絞り目	10YR7/3にぶい黄橙 10YR7/3にぶい黄橙	粗 2mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良	
45	17	V層	弥生土器	壺 体部	－	－	[6.0]	櫛描斜格子文8本1束，櫛描直線文8本1束	ﾏﾒﾜ	10YR7/2にぶい黄橙 10YR8/2灰白	粗 3mm以内の石英，長石を含む。	良	
46	17	V層	弥生土器	壺 体部	－	－	[8.0]	ﾀﾃﾊｹのち櫛描波状文，櫛描直線文	指ｵｻｴ，ﾏﾒﾜ	10YR7/2にぶい黄橙 N5/灰	普 2mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良好	
47	17	V層	弥生土器	甕 体部	－	－	[12.4]	ﾀﾃﾊｹのちﾅﾃﾞ，ﾀﾃﾍﾗﾐｶﾞｷ，櫛描直線文6本1束2条+α，櫛描連続刺突文	板ﾅﾃﾞ，ﾅﾃﾞ	10YR6/2灰黄褐 10YR7/2にぶい黄橙	普 1.5mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良好	
48	17	V層	弥生土器	広口壺 口縁	(12.4)	－	[2.3]	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ，板ﾅﾃﾞ	5YR6/4にぶい橙 10YR7/3にぶい黄橙	普 1.5mm以内の石英，長石を含む。	良好	
49	17	V層	弥生土器	細頸壺 口縁	(8.6)	－	[6.9]	ﾏﾒﾜ，櫛描直線文8本1束5条+α	ﾏﾒﾜ	7.5YR6/6橙 10YR8/3浅黄橙	粗 3mm以内の石英，長石を含む。	良	
50	17	V層	弥生土器	壺 頸・体	－	－	(25.85)	ﾅﾃﾞ，ﾊｹ，ﾀﾀｷのちﾊｹ	ﾊｹ，ﾅﾃﾞ，指ｵｻｴ	10YR8/3浅黄橙 10YR8/1灰白	普 1mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良	
51	17	V層	弥生土器	広口壺 頸～体部	－	－	[8.1]	ﾖｺﾅﾃﾞ，ﾀﾃﾊｹ	指ｵｻｴ，ﾖｺﾅﾃﾞ	10YR5/2灰黄褐 10YR6/2灰黄褐	普 1mm以内の石英，長石，雲母，角閃石を含む。	良好	下川津Ｂ類胎土
52	17	V層	弥生土器	甕 口縁	－	－	[3.8]	ﾖｺﾅﾃﾞ，ﾏﾒﾜ，口縁端部凹線1条	ﾖｺﾅﾃﾞ，ﾏﾒﾜ	5YR5/6明赤褐 5YR5/6明赤褐	普 1mm以内の石英，長石，雲母を含む。	良好	
53	17	V層	弥生土器	甕 口縁	(14.2)	－	[3.2]	丁寧なﾅﾃﾞ，口縁端部凹線文2条	丁寧なﾅﾃﾞ	7.5YR5/6明褐 7.5YR5/6明褐	普 1mm以内の石英，長石，赤色粒，角閃石を含む。	良好	
54	17	V層	弥生土器	甕	(12.9)	－	[8.0]	ﾖｺﾅﾃﾞ，ﾀﾃﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ，ﾖｺﾍﾗｹｽﾞﾘ	7.5YR7/4にぶい橙 7.5YR7/3にぶい橙	粗 2mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良	一部煤付着
55	17	V層	土師器	甕 口縁	(16.0)	－	[6.4]	ﾖｺﾅﾃﾞ，ﾀﾃﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ，指ｵｻｴ，ﾅﾃﾞ	2.5Y5/3黄褐 2.5Y6/3にぶい黄	精良 1mm以内の石英，長石，雲母，角閃石を含む。	良好	
56	17	V層	弥生土器	甕 口縁	(12.2)	－	[4.2]	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ，体部ﾊｹﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ，体部指ﾅﾃﾞ	10YR7/6明黄褐 10YR5/8黄褐	普 1mm以内の石英，長石を含む。	良	
57	17	V層	弥生土器	甕 口縁	(15.0)	－	[4.0]	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ，指ｵｻｴ，体部板ﾅﾃﾞ	口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ，体部ﾖｺﾅﾃﾞ	5YR6/6橙 7.5YR6/6橙	普 0.5mm以内の石英，長石を含む。	良	
58	17	V層	弥生土器	甕 口縁	(13.2)	－	[6.7]	ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾊｹのちﾅﾃﾞ，ﾍﾗｹｽﾞﾘのちﾊｹ	10YR8/2灰白 10YR8/2灰白	普 1mm以内の石英，長石，クサリ礫多く含む。	良	
59	17	V層	弥生土器	甕 口縁	(14.6)	－	[6.9]	ﾖﾃﾞﾞ，指ｵｻｴ，ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ，指ﾅﾃﾞ	5YR6/4にぶい橙 5YR6/6橙	普 0.5mm以内～1mmの石英，長石を含む。	良	
60	17	V層	弥生土器	甕	(9.1)	－	10.2	ﾖｺﾅﾃﾞ，ﾏﾒﾜ	指ｵｻｴ，ﾏﾒﾜ	5YR7/6橙 5Y7/6黄	普 2mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良	
61	17	Ⅳ層	弥生土器	高杯 口縁	－	－	[3.8]	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	7.5YR6/6橙 7.5YR6/4にぶい橙	普 1mm以内の石英，長石，クサリ礫を含む。	良	
62	17	V層	弥生土器	高杯 杯部	－	－	[4.3]	ﾅﾃﾞ	分割ﾍﾗﾐｶﾞｷ	10YR5/4にぶい黄橙 7.5YR6/6橙	普 1mm～3mmの石英，長石，クサリ礫を含む。	良	
63	17	V層	弥生土器	高杯 脚部	－	(16.2)	[2.0]	ﾅﾃﾞ，ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	10YR6/4にぶい黄橙 10YR5/4にぶい黄橙	普 0.5mm以内～2mmの石英，長石，角閃石，クサリ礫を含む。	良	
64	17	V層	弥生土器	鉢 杯部	(12.6)	－	[4.5]	ﾖｺﾅﾃﾞ，放射状の線刻	ﾖｺﾅﾃﾞ，ﾅﾃﾞ	7.5YR7/4にぶい橙 7.5YR6/6橙	普 1mm～2mmの石英，長石を含む。	良	
65	17	V層	弥生土器	鉢	(13.6)	(2.0)	4.75	指ｵｻｴ	指ﾅﾃﾞ	7.5YR6/4にぶい橙 7.5YR8/4浅黄橙	普 0.5mm以内の石英，長石を含む。	良	
66	17	V層	土師器	高杯 杯部	(20.2)	－	[5.3]	ﾏﾒﾜ	ﾏﾒﾜ	10YR8/2灰白 7.5YR7/4にぶい橙	精良 1.5mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良	

第 12 表　土器・土製品観察表③

＊（推定値）[残存値]を示す

掲載番号	挿図番号	遺構名 層位名	種類	器種 部位	法量 口径	法量 底径	法量 器高	調整・文様 外面	調整・文様 内面	色調 上：外面（釉薬） 下：内面・胎土	胎土	焼成	備考
67	17	V層	弥生土器	大型鉢 口縁	(43.5)	－	[5.0]	ﾖｺﾅﾃﾞ，ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ，板ﾅﾃﾞ	10YR5/3にぶい黄褐 10YR4/2灰黄褐	普 1mm以内の石英，長石，黒雲母を含む。	良	
68	17	V層	弥生土器	大型鉢 口縁	(60.4)	－	[5.3]	ﾖｺﾅﾃﾞ，ﾅﾃﾞ，刻み目文，凹線3条	ﾖｺﾅﾃﾞ，指ｵｻｴのちﾖｺﾅﾃﾞ，ﾅﾃﾞ	2.5YR5/6明赤褐 10YR7/3にぶい黄橙	普 1mm～3mmの石英，長石，赤色粒を含む。	良	
69	18	V層	弥生土器	壺 底部	－	(8.0)	[4.9]	板ﾅﾃﾞ，ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾜ	10YR7/2にぶい黄橙 N5/灰	粗 3mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良好	
70	18	V層	弥生土器	壺 底部	－	8.4	[6.5]	ﾍﾗﾐｶﾞｷ(部分的)	板ﾅﾃﾞ	2.5Y8/2灰白 5Y7/2灰白	普 1mm以内の石英，長石を含む。	良	体部に黒斑，底部「十」の線刻
71	18	V層	弥生土器	底部	－	(12.4)	[3.9]	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	7.5YR6/6橙 7.5YR6/6橙	普 0.5mm以内～2mmの石英，長石を含む。	良	
72	18	V層	弥生土器	底部	－	(11.5)	[4.0]	ﾐｶﾞｷ，ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ，指ｵｻｴ	7.5YR7/4にぶい橙 2.5YR5/6明赤褐	普 1mm～3mmの石英，長石を含む。	良	
73	18	V層	弥生土器	壺 底部	－	(6.0)	[10.4]	ﾀﾀｷのちﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ，一部指ｵｻｴ	7.5YR6/6橙 2.5Y3/1黒褐	普 1mm～5mmの石英，長石を含む。	良	
74	18	V層	弥生土器	甕 体部	頸径 (13.6)	－	[13.3]	体部 ﾀﾀｷ，指ｵｻｴ	胴上半ﾖｺﾊｹ，胴下半指ﾅﾃﾞ	5YR6/4にぶい橙 7.5YR6/4にぶい橙	普 0.5mm以内の石英，長石を含む。	良	胴下半 煤付着
75	18	V層	弥生土器	甕 底部	－	2.8	[10.8]	ﾊｹ，ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	5YR6/6橙 7.5YR7/4にぶい橙	普 0.5mm～4mmの石英，長石を含む。	良	底部被熱
76	18	V層	弥生土器	脚部	－	8.2	[2.5]	板ﾅﾃﾞ，ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾜ	5YR5/6明赤褐 7.5YR5/6明褐	粗 5mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良	
77	18	V層	弥生土器	甕or鉢 底部	－	2.1	[4.4]	ﾅﾃﾞ	指ﾅﾃﾞ	5YR5/6明赤褐 5YR6/6橙	普 1mm～3mmの石英，長石を含む。	良	
78	18	V層	弥生土器	底部	－	3.8	[1.75]	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	7.5YR6/6橙 7.5YR5/8明褐	普 1mm～4mmの石英，長石を含む。	良	
79	18	V層	弥生土器	甕 底部	－	(3.4)	[4.2]	ﾊｹのちﾅﾃﾞ	指ﾅﾃﾞ	7.5YR7/4にぶい橙 10YR7/4にぶい黄橙	普 0.5mm以内～3mmの石英，長石を含む。	良	
80	19	第2遺構面精査中	弥生土器	甕 口縁	－	－	[2.3]	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	10YR4/6褐 10YR6/4にぶい黄橙	普 1mm以内の石英，長石，黒雲母を含む。	良	
81	19	第2遺構面精査中	弥生土器	甕 口縁	－	－	[2.1]	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ(不明瞭)	7.5YR4/6褐 7.5YR4/6褐	普 1mm以内の石英，長石を含む。	良	
82	19	第2遺構面精査中	弥生土器	甕 口縁	－	－	[4.2]	ﾖｺﾅﾃﾞ，指ｵｻｴ	ﾖｺﾅﾃﾞ	10YR5/4にぶい黄褐 10YR4/4褐	普 1mm～2mmの石英，長石を含む。	良	
83	19	第2遺構面精査中	弥生土器	高杯 杯部	(23.9)	－	[3.4]	ﾖｺﾅﾃﾞ，ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ	7.5YR5/4にぶい褐 7.5YR5/6明褐	普 1mm以内～3mmの石英，長石，黒雲母を含む。	良	下川津Ｂ類胎土
86	22	SA101 SP3046	土師質土器	皿	(6.4)	(5.6)	[0.9]	回転ﾅﾃﾞ，底部回転ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	10YR6/2灰黄褐 10YR5/2灰黄褐	普 1mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良	
87	22	SA101 SP5041	土師質土器	皿	(6.2)	(5.4)	0.9	回転ﾅﾃﾞ，底部回転糸切り	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR7/4にぶい橙 7.5YR7/4にぶい橙	普 0.5mm～4mmの石英，長石を含む。	良	
88	22	SA101 SP3051	土師質土器	皿	(6.4)	(5.0)	[0.8]	回転ﾅﾃﾞ，底部回転ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR7/4にぶい橙 7.5YR8/3浅黄橙	普 1mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良好	
89	22	SA101 SP3051	土師質土器	皿	(6.4)	(4.8)	[1.1]	回転ﾅﾃﾞ，底部回転ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2灰白 10YR8/2灰白	普 1mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良好	
90	22	SA101 SP5041	土師質土器	杯 口縁	－	－	[2.0]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2灰白 7.5YR7/4にぶい橙	普 0.5mm～1mmの石英，長石，赤色粒を含む。	良	
91	22	SA101 SP3051	土師質土器	杯	(10.4)	(5.6)	[2.3]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2灰白 10YR8/2灰白	普 1mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良好	
92	22	SA101 SP3049	土師質土器	杯	(12.4)	－	[2.8]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2灰白 10YR8/2灰白	普 1mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良好	
93	22	SA101 SP5086	土師質土器	椀 口縁	(14.2)	－	[3.15]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR7/3にぶい黄橙 2.5Y6/1黄灰	普 1mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良	産地不明
94	22	SA102 SP3025	土師質土器	杯	(12.5)	(8.4)	[2.5]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2灰白 10YR8/2灰白	普 2mm以内の石英，長石を含む。	良好	
95	22	SA303 SP3065	土師質土器	杯 底部	－	(6.6)	[1.4]	回転ﾅﾃﾞ，底部回転糸切り	回転ﾅﾃﾞ	10YR6/2灰黄褐 10YR6/2灰黄褐	普 1mm以内の石英，長石，金雲母，赤色粒を含む。	良好	
96	22	SA101 SP3051	土師質土器	鍋	(42.0)	－	[3.6]	ﾅﾃﾞ，板ﾅﾃﾞ，指ｵｻｴ	板ﾅﾃﾞ	10YR5/2灰黄褐 10YR5/2灰黄褐	普 1.5mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良好	外面に煤付着
97	22	SA102 SP3010	土師質土器	甕 口縁	(27.4)	－	[8.8]	ﾅﾃﾞ，ﾀﾃﾊｹ，指ｵｻｴ	ﾅﾃﾞ， 板ﾅﾃﾞ	10YR6/3にぶい黄橙 7.5YR6/4にぶい橙	粗 3mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良好	
99	24	SB101 SP5106	土師質土器	皿	(6.6)	(5.4)	0.85	回転ﾅﾃﾞ，底部回転糸切り	回転ﾅﾃﾞ	10YR7/2にぶい黄橙 10YR8/2灰白	普 1mm以内～1.5mmの石英，長石，赤色粒を含む。	良	
100	24	SB101 SP4004	土師質土器	皿 口～底	(7.0)	(5.8)	[0.7]	回転ﾅﾃﾞ，底部不明	回転ﾅﾃﾞ	5YR7/6橙 5YR6/6橙	普 1mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良	
101	24	SB101 SP1038	土師質土器	杯	(10.6)	－	[2.4]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR8/4浅黄橙 10YR5/1褐灰	普 1mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良好	
102	24	SB101 SP1057	土師質土器	杯	(11.2)	－	[2.1]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/3浅黄橙 10YR8/3浅黄橙	普 1mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良	

第 13 表　土器・土製品観察表④

＊(推定値)[残存値]を示す

掲載番号	挿図番号	遺構名層位名	種類	器種部位	法量			調整・文様		色調	胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	上:外面(釉薬) 下:内面・胎土			
103	24	SB101 SP1057	土師質土器	杯	(11.2)	－	[2.9]	回転ﾅﾃﾞ,底部回転ﾍﾗ切ﾘ	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR8/4浅黄橙 7.5YR8/4浅黄橙	普 1mm以内の石英,長石,赤色粒を含む。	良好	
104	24	SB101 SP5108	土師質土器	杯 口縁	(10.0)	－	[2.2]	回転ﾅﾃﾞ,底部回転ﾍﾗ切ﾘ(R),板目状圧痕	回転ﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ	10YR8/3浅黄橙 10YR8/3浅黄橙	普 0.5mm以内の石英,長石,赤色粒を含む。	良	
105	24	SB101 SP1038	土師質土器	杯 底部	－	(5.7)	[1.5]	回転ﾅﾃﾞ,工具痕	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR8/3浅黄橙 7.5YR8/3浅黄橙	普 1.5mm以内の石英,長石,赤色粒を含む。	良好	
106	24	SB101 SP1057	土師質土器	杯	(13.4)	－	[2.4]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2灰白 10YR8/2灰白	普 1mm以内の石英,長石,赤色粒を含む。	不良	
107	24	SB101 SP5018	土師質土器	杯or椀 口縁	(14.0)	－	[3.3]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/灰白 N7/灰白	普 1mm以内の石英,長石を含む。	良	口縁端部煤化,披熱
108	24	SB101 SP1052	青磁	碗	－	－	[1.95]	施釉,鎬連弁文	施釉	5GY7/1明オリーブ灰 胎土:N8/灰白	普	良好	龍泉窯系 横田,森田Ⅰ-5b類
109	24	SB101 SP1057	東播系 須恵器	捏鉢	(25.0)	－	[6.3]	回転ﾅﾃﾞ,指ｵｻｴ	回転ﾅﾃﾞ,指ｵｻｴ	5Y7/1灰白 5Y7/1灰白	普 1.5mm以内の石英,長石を含む。	良好	
110	24	SB101 SP5104	東播系 須恵器	捏鉢 口縁	(29.0)	－	[4.0]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR5/2灰黄褐 10YR6/1褐灰	普 1mm以内～2mmの石英,長石を含む。	良	外面煤付着
111	24	SB101 SP5102	土師質土器	足釜 口縁	(24.0)	－	[5.0]	指ｵｻｴ,ﾅﾃﾞ	指ｵｻｴ,ﾅﾃﾞ	2.5YR6/8橙 2.5YR6/6橙	普 1mm以内～4mmの石英,長石を含む。	良	煤付着,披熱,鍔部直下に爪形圧痕,体部片に格子ﾀﾀｷ,非楠井産
112	24	SB101 SP1052	土師質土器	鍋 口縁	(25.4)	－	[4.9]	板ﾅﾃﾞ,指ｵｻｴ	板ﾅﾃﾞ	7.5YR6/3にぶい褐 7.5YR7/3にぶい橙	普 1mm以内の石英,長石,赤色粒を含む。	良	口縁端部～外面に煤付着 楠井産
114	25	SB102 SP5083	土師質土器	皿	6.6	5.35	1.1	回転ﾅﾃﾞ,底部回転ﾍﾗ切ﾘ(R)	回転ﾅﾃﾞ,底部ﾅﾃﾞ	2.5YR7/3淡赤橙 2.5YR7/4淡赤橙	普 1mm以内の石英,長石,赤色粒,黒色粒を含む。	良	内外面煤化,披熱
115	25	SB102 SP5019	土師質土器	杯 口縁	－	－	[2.4]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR6/1褐灰 10YR5/1褐灰	普 0.5mmの石英を含む。	良	
116	25	SB102 SP5023-1	土師質土器	杯	(8.8)	(4.8)	[2.38]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2灰白 10YR8/2灰白	普 1mm以内の石英,長石,赤色粒を含む。	良	
117	25	SB102 SP5083	十瓶山産 須恵器	杯? 口縁	－	－	[1.4]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/2灰白 2.5Y7/4浅黄	普 1mm以内の石英,長石,黒色粒を含む。	不良	口縁部外面に炭素吸着
118	25	SB102 SP5020	十瓶山産 須恵器	椀 口縁	－	－	[1.7]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/灰白 N7/灰白	普 1mm以内の石英,長石,黒色粒を含む。	良	
119	25	SB102 SP5083	十瓶山産 須恵器	椀 口縁	(10.8)	－	[2.4]	回転ﾅﾃﾞ,ﾊｹ	回転ﾅﾃﾞ	5Y7/1灰白 N6/灰	普 1mm以内の黒色粒を含む。	良	
120	25	SB102 SP5019	十瓶山産 須恵器	杯 口縁	(13.0)	－	[1.9]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR7/1灰白 N8/灰白	普 0.5mm～0.8mmの石英を含む。	良	口縁部黒色化
121	25	SB102 SP5020	十瓶山産 須恵器	椀	(12.8)	－	[3.3]	口縁部ﾅﾃﾞ,回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y7/1灰白 5Y8/1灰白	普 1mm以内の石英,長石,黒色粒を含む。	良	産地不明
122	25	SB102 SP5084・ 5030	吉備系 土師器	椀 口縁	－	－	[3.1]	回転ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾐｶﾞｷ?	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/2灰白 2.5Y8/2灰白	普 1mm以内の石英,長石を含む。	良	
123	25	SB102 SP5083	吉備系 土師器	椀 底部	－	(3.3)	[2.1]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ,板ﾅﾃﾞ	5Y8/1灰白 5Y8/1灰白	普 1mm以内の赤色粒,黒色粒を含む。	良	山本Ⅲ-3期
124	25	SB102 SP5083	土師質土器	鍋 口縁	－	－	[3.1]	ﾅﾃﾞ,指ｵｻｴ	ﾊｹ	2.5Y6/2灰黄 2.5Y6/2灰黄	普 1mm以内の石英,長石,黒色粒を含む。	良	楠井産
125	25	SB102 SP5019	土師質土器	捏鉢 口縁	－	－	[3.0]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y7/1灰白 2.5Y6/1黄灰	普 0.5mm～2mmの石英,長石,赤色粒を含む。	良	産地不明
126	27	SB103 SP5050	土師質土器	皿	(7.0)	(5.8)	[1.1]	回転ﾅﾃﾞ,底部回転糸切ﾘ	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR8/3浅黄橙 10YR8/2灰白	普 0.8mmの石英,赤色粒を含む。	良	
127	27	SB103 SP5070	土師質土器	皿	(6.8)	(5.36)	[0.92]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR7/4にぶい橙 10YR7/2にぶい黄橙	普 0.5mm～1mmの石英,長石を含む。	良	外面炭化物付着
128	27	SB103 SP5049	土師質土器	皿 口縁	－	－	[2.15]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR8/3浅黄橙 10YR8/2灰白	普 0.5mmの石英を含む。	良	焼きぶくれ
129	27	SB103 SP5070	土師質土器	杯 口縁	－	－	[1.7]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/3浅黄橙 10YR7/2にぶい黄橙	普 0.5mmの石英,赤色粒を含む。	良	
130	27	SB103 SP5044	白磁	皿 口縁	(11.0)	－	[2.0]	施釉	施釉	5Y7/1灰白 胎土:5Y7/1灰白	普 1mm以内の石英,長石を含む。	良	沈線 篦描き花文
131	27	SB103 SP5066	土師質土器	捏鉢 口縁	(28.0)	－	[3.8]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ,ﾊｹ	2.5Y7/2灰黄 10YR7/4にぶい黄橙	普 1mm以内～2mmの石英,長石を含む。	良	楠井産or西村産
132	27	SB103 SP5045	東播系 須恵器	捏鉢 口縁	－	－	[2.6]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/3浅黄橙 10YR7/3にぶい黄橙	1mmの石英,長石を含む。	不良	接合痕有り。口縁部に炭素吸着
133	27	SB103 SP5045	土師質土器	足釜 口縁	(22.0)	－	[2.7]	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ,ﾊｹ	10YR5/2灰黄褐 10YR5/2灰黄褐	普 1mm以内～2mmの石英,長石を含む。	良	
134	27	SB103 SP5044	土師質土器	足釜 脚部	長さ (19.7)	幅 [3.7]	厚み 2.0	ﾅﾃﾞ	－	10YR7/2にぶい黄橙	普 1mm以内～2mmの石英,長石を含む。	良	煤付着
136	30	SD101	須恵器	蓋	(19.8)	－	[1.5]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/灰 N5/灰	普 1mm以内の石英,長石,赤色粒を含む。	良好	
137	30	SD101	黒色土器 B類	底部	－	(6.0)	[0.7]	ﾅﾃﾞ,貼付高台	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	N3/暗灰 N3/暗灰	普 3mm以内の石英,長石を含む。	良	

第 14 表　土器・土製品観察表⑤

＊(推定値)[残存値]を示す

掲載番号	挿図番号	遺構名層位名	種類	器種部位	法量			調整・文様		色調	胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	上:外面(釉薬) 下:内面・胎土			
138	30	SD110	黒色土器 A類	椀 口縁	－	－	[2.1]	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	10YR8/2灰白 N3/暗灰	普 1mm以内の石英,長石を含む。	良	
139	30	SD104	土製品	管状土錘	長さ 4.5	幅 2.8	厚み 2.5	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	10YR6/4にぶい黄橙 10YR6/4にぶい黄橙	粗	良好	
140	30	SD109	陶器 (唐津)	碗	－	(5.0)	[1.9]	回転ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,施釉	回転ﾅﾃﾞ,施釉	2.5GY6/1オリーブ灰 胎土:7.5YR7/4にぶい橙	普 1mm以内の石英,長石を含む。	良好	削り出し高台
141	30	SD109	土師質土器	椀	－	(10.9)	[1.0]	回転ﾅﾃﾞ,貼付高台	回転ﾅﾃﾞ	10YR5/6黄褐 10YR5/4にぶい黄褐	普 1mm以内の石英,長石を含む。	良	
142	31	SD105	土師質土器	皿	－	－	1.05	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR7/3にぶい黄橙 10YR7/3にぶい黄橙	普 0.5mmの石英を含む。	良	
143	31	SD105	土師質土器	杯 口縁	－	－	[1.55]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/3浅黄橙 10YR8/3浅黄橙	普 微細な石英,長石,赤色粒を含む。	良	
144	31	SD105	土師質土器	杯 口縁	－	－	[2.2]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/3浅黄橙 10YR8/3浅黄橙	普 微細な石英,長石,赤色粒を含む。	良	
145	31	SD105	土師質土器	杯 口縁	－	－	[1.9]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR8/4浅黄橙 7.5YR8/4浅黄橙	普 0.5mm～1mmの石英,長石,赤色粒を含む。	良	
146	31	SD105	土師質土器	杯 口縁	－	－	[2.2]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/2灰白 2.5Y8/2灰白	普 0.5mm～2mmの石英,長石を含む。	良	
147	31	SD105	白磁	碗 底部	－	(5.6)	[1.25]	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,施釉,露胎	回転ﾅﾃﾞ,施釉,沈線1条+α	釉薬：7.5GY8/1明緑灰	精良	良好	削り出し高台
148	31	SD105	十瓶山産 須恵器	椀? 口縁	－	－	[2.85]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5Y8/1灰白 5Y7/1灰白	普 0.5mm以内の石英,長石を含む。	良	口縁部に重ね焼き痕
149	31	SD105	十瓶山産 須恵器	杯 口縁	(15.1)	－	[1.8]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1灰白 2.5Y8/1灰白	普 0.5mm～1mmの石英,長石を含む。	良	重ね焼きのため、口縁部黒色化
150	31	SD105	須恵器	杯 口～底	(13.0)	(7.8)	[3.75]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5Y5/1灰 7.5Y5/1灰	普 0.5mm以内の石英,長石を含む。	良	口縁部炭素吸着 産地不明
151	31	SD105	東播系 須恵器	捏鉢 口縁	(23.2)	－	[2.15]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/3浅黄橙 N4/灰	普 1mm以内の石英,長石を含む。	良	口縁端部～内面にかけて灰色
152	31	SD105	土師質土器	足釜 口縁	－	－	[3.6]	ﾖｺﾅﾃﾞ,指ｵｻｴ,貼付突帯	ﾖｺﾅﾃﾞ,板ﾅﾃﾞ	7.5Y2/1黒 7.5Y2/1黒	普 0.5mm～2mmの石英,長石を含む。	良	内外面黒色化
153	31	SD105	土師質土器	足釜 脚部	長さ [14.2]	幅 [5.0]	厚み 3.4	指ﾅﾃﾞ,板ﾅﾃﾞ	板ﾅﾃﾞ	10YR5/3にぶい黄褐 10YR8/4浅黄橙	普 1mm以内の石英,長石を含む。	良	
154	31	SD105	土師質土器	鍋 口縁	－	－	[2.95]	ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	ﾊｹ	10YR3/2黒褐 10YR3/2黒褐	普 1mm～3mmの石英,長石を含む。	良	楠井産
155	31	SD105	須恵器	壺 底部	－	15.0	[12.6]	ﾏﾒﾂ	体部板ﾅﾃﾞ,底部ﾅﾃﾞ	N7/灰白 N6/灰	粗 2mm以内の石英,長石を含む。	不良	外面に著しいﾏﾒﾂ
157	34	SD117	弥生土器	鉢	(16.0)	－	[3.5]	ﾅﾃﾞ,ﾀﾀｷ	ﾅﾃﾞ	10YR8/2灰白 7.5YR6/6橙	普 1mm以内の石英,長石,赤色粒を含む。	良	
158	35	SK101	須恵器	底部	－	(8.5)	[1.5]	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	N7/灰白 10YR6/6明黄褐	粗 2mm以内の石英,長石を含む。	良好	
159	35	SK101	土師質土器	杯 口縁	－	－	[2.5]	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	10YR8/6黄橙 10YR8/4浅黄橙	普 1mm以内の石英,長石,赤色粒を含む。	良	
160	35	SK101	土師質土器	杯 口縁	－	－	[1.5]	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	7.5YR5/6明褐 5YR4/4にぶい赤褐	普 1mm以内の石英,長石を含む。	良	
161	36	SP3037	土師質土器	皿	(9.2)	(6.4)	[1.3]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/3浅黄橙 10YR8/2灰白	普 1mm以内の石英,長石,赤色粒を含む。	良好	
162	36	SP3037	土師質土器	椀 口縁・底部	(14.2)	(6.0)	[3.8]	回転ﾅﾃﾞ,ﾏﾒﾂ,貼付高台	回転ﾅﾃﾞ,ﾏﾒﾂ	7.5YR8/4浅黄橙 7.5YR8/4浅黄橙	普 2mm以内の石英,長石,クサリ礫を含む。	良好	被熱
163	36	SP3038	黒色土器 A類	椀 口縁	－	－	[3.85]	ﾏﾒﾂ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾏﾒﾂ	10YR8/2灰白 N4/灰	普 1mm以内の石英,長石,赤色粒を含む。	良好	
164	36	SP3037	黒色土器 A類	椀 底部	－	(5.8)	[2.2]	回転ﾅﾃﾞ,貼付高台	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	10YR8/2灰白 N3/暗灰	普 1mm以内の石英,長石,赤色粒を含む。	良好	
165	36	SP3037	黒色土器 A類	椀 底～体部	－	6.8	[3.2]	回転ﾅﾃﾞ,貼付高台	ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾏﾒﾂ	10YR8/2灰白 N3/暗灰	普 1mm以内の石英,長石,赤色粒を含む。	良好	
166	36	SP3037	土師質土器	鍋 口縁	(35.4)	－	[3.6]	ﾅﾃﾞ,指ｵｻｴ	ﾅﾃﾞ	5YR6/6橙 5YR6/6橙	粗 2mm以内の石英,長石を含む。	良好	楠井産　BⅡ
167	36	SP3016	土師質土器	甕 口縁	(25.2)	－	[5.8]	ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾏﾒﾂ	ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ	7.5YR6/4にぶい橙 7.5YR7/4にぶい橙	粗 2mm以内の石英,長石,角閃石,赤色粒を含む。	良	
168	36	SP5003	土師質土器	鍋 口縁	(29.0)	－	[10.3]	板ﾅﾃﾞ,指ｵｻｴ	板ﾅﾃﾞ,指ｵｻｴ	5YR5/2灰褐 10YR4/2灰黄褐	やや粗 1mm以内～5mmの石英,長石を含む。	良	体部に煤付着 楠井産
169	36	SP5077	土師質土器	皿	6.4	4.4	0.9	回転ﾅﾃﾞ,底部回転ﾍﾗ切ﾘ(R)	回転ﾅﾃﾞ	10YR7/3にぶい黄橙 10YR8/2灰白	普 1mm以内～2mmの石英,長石,赤色粒を含む。	良	
170	36	SP5077	土師質土器	杯	(10.3)	－	3.12	回転ﾅﾃﾞ,底部回転ﾍﾗ切ﾘ,板目状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y7/1灰白 2.5Y8/1灰白	普 0.5mm以内～1mmの石英,長石を含む。	良	産地不明
171	36	SP5077	十瓶山産 須恵器	杯	13.3	8.2	3.5	回転ﾅﾃﾞ,底部回転ﾍﾗ切ﾘ(R),板目状圧痕	回転ﾅﾃﾞ,底部ﾅﾃﾞ	10YR8/1灰白 10YR7/1灰白	普 1mm以内の黒色粒を含む。	良	口縁内外面炭素吸着

第 15 表　土器・土製品観察表⑥

＊（推定値）[残存値]を示す

掲載番号	挿図番号	遺構名 層位名	種類	器種 部位	法量 口径	法量 底径	法量 器高	調整・文様 外面	調整・文様 内面	色調 上：外面（釉薬） 下：内面・胎土	胎土	焼成	備考
172	36	SP5077	十瓶山産須恵器	杯 口縁	(13.2)	－	[3.0]	回転ﾅﾃﾞ，板ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5Y3/1オリーブ黒 N7/灰白	普 1mm以内の石英，長石，黒色粒を含む。	良	口縁部炭素吸着，煤付着
173	36	SP5035	土師質土器	皿	(6.0)	(4.2)	[0.8]	回転ﾅﾃﾞ，底部回転ﾍﾗ切り?	回転ﾅﾃﾞ	5YR7/3にぶい橙 2.5Y7/1灰白	普 1mm以内の石英，長石，黒色粒を含む。	良	
174	37	SP5054	土師質土器	皿	(6.0)	(5.9)	0.8	回転ﾅﾃﾞ，底部回転ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR8/3浅黄橙 7.5YR8/3浅黄橙	普 0.5mmの石英，長石を含む。	良	
175	37	SP1032	弥生土器	甕 口縁	(13.2)	－	[3.6]	ﾖｺﾅﾃﾞ，指ｵｻｴ，ﾏﾒﾂ	ﾖｺﾅﾃﾞ，ﾏﾒﾂ	5YR5/6明赤褐 5YR5/6明赤褐	普 1mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良好	
176	37	SP1032	東播系須恵器	捏鉢	(28.1)	－	[4.1]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/灰白 N7/灰白	普 1mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良好	口縁：重ね焼きの痕跡
177	37	SP1033	弥生土器	高杯 脚部	－	－	[2.9]	ﾏﾒﾂ，円孔1個	ﾏﾒﾂ	7.5YR4/6褐 7.5YR5/4にぶい褐	普 2mm以内の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む。	良好	
178	37	SP1033	土師質土器	杯	(10.2)	－	[2.7]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR8/3浅黄橙 7.5YR8/4浅黄橙	普 1mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良好	
180	37	SP1036	土師質土器	足釜 口縁	(17.2)	－	[3.2]	ﾅﾃﾞ	板ﾅﾃﾞ	10YR6/3にぶい黄橙 10YR7/3にぶい黄橙	普 2mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良好	鍔部～下体部に煤付着
181	37	SP4016	土師質土器	杯 底部	－	(6.8)	[1.5]	回転ﾅﾃﾞ，底部回転ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	5YR7/6橙 5YR6/6橙	普 1mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良好	被熱
182	37	SP4016	土師質土器	杯 口縁	(10.2)	－	[2.5]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2灰白 10YR8/3浅黄橙	普 1mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良好	
184	38	第1遺構面精査中	土師質土器	皿	(7.2)	(5.7)	[1.0]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR8/2灰白 7.5YR8/3浅黄橙	普 1mm以内の石英，長石を含む。	良	
185	38	第1遺構面精査中	土師質土器	杯	(11.6)	(7.0)	2.1	回転ﾅﾃﾞ，底部不明	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/3浅黄橙 10YR8/3浅黄橙	普 0.5mm以内～2mmの石英，長石を含む。	良	
186	38	第1遺構面精査中	土師質土器	杯	(10.0)	(6.4)	2.8	回転ﾅﾃﾞ，底部回転ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/3浅黄橙 10YR8/3浅黄橙	普 1mm以内の石英，長石を含む。	良	
187	38	第1遺構面精査中	須恵器	杯 口縁	(11.4)	－	[2.9]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR4/1褐灰 7.5YR3/1黒褐	普 1mm以内の石英，長石を含む。	良	
188	38	第1遺構面精査中	陶器（瀬戸美濃）	碗 底部	－	(4.4)	[1.2]	施釉	施釉	透明 －	普 1mm以内の石英，長石を含む。	良好	削り出し高台
189	38	第1遺構面精査中	土師質土器	足釜 口縁	(20.8)	－	[4.4]	ﾅﾃﾞ	指ｵｻｴ，板ﾅﾃﾞ	7.5YR6/4にぶい橙 7.5YR6/4にぶい橙	普 1mm以内～4mmの石英，長石を含む。	良	煤付着
192	39	SD001	土師質土器	焙烙	(40.0)	－	[10.75]	ﾖｺﾅﾃﾞ，ﾅﾃﾞ，指ｵｻｴ，指ﾅﾃﾞ，ﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ，ﾊｹ，ﾅﾃﾞ	7.5YR3/2黒褐 7.5YR4/2灰褐	普 1mm以内～3mmの石英，長石，赤色粒を含む。	良	外面全体に煤付着 脚厩座
193	39	SD001	瓦	軒平	長さ [11.5]	厚み 1.4	瓦当厚 1.8	板ﾅﾃﾞ	板ﾅﾃﾞ，ﾅﾃﾞ	N5/灰 N7/灰白 胎土：N8/灰白	普	良好	
194	39	SD001	瓦	丸瓦	長さ (18.0)	幅 12.95	厚み 1.55	ﾅﾃﾞ	ｺﾋﾞｷB，布目，ﾅﾃﾞ，ｹｽﾞﾘ	N4/灰 N6/灰白 胎土：N8/灰白	普	良	
196	41	SK001	須恵器	蓋	(15.7)	－	[1.3]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1灰白 2.5Y8/1灰白	普 1mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	不良	
197	41	SK001	土師質土器	焙烙	－	－	[2.55]	ﾏﾒﾂ	ﾅﾃﾞ，円孔1個	10YR2/1黒 10YR4/1褐灰	普 1mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良好	外面に煤付着
198	41	SK001	磁器（肥前系?）	碗 口縁	(9.8)	－	[2.5]	回転ﾅﾃﾞ，染付	回転ﾅﾃﾞ	7.5GY8/1明緑灰 7.5GY6/1緑灰 胎土：N8/灰白	精良	良好	
202	42	Ⅱ・Ⅲ層	須恵器	蓋 つまみ	－	－	[1.65]	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/灰 N6/灰	普 1mm以内の石英，長石を含む。	良	
203	42	Ⅱ・Ⅲ層	土師質土器	椀 底部	－	(5.2)	[1.0]	ﾅﾃﾞ，貼付高台	ﾅﾃﾞ	2.5YR6/6橙 10YR6/4にぶい黄橙	普 1mm以内の石英，長石，赤色粒を含む。	良	被熱
204	42	Ⅲ層	土師質土器	足釜 口縁	－	－	[3.7]	ﾖｺﾅﾃﾞ，貼付突帯	ﾖｺﾅﾃﾞ	10YR7/3にぶい黄橙 10YR7/3にぶい黄橙	普 1mm～3mmの石英，長石を含む。	良	煤付着
205	42	Ⅲ層	土師質土器	足釜 脚部	長さ [20.6]	幅 [5.25]	厚み 2.55	ﾅﾃﾞ，指ｵｻｴ	ﾅﾃﾞ	10YR4/2灰黄褐 2.5Y4/1黄灰	普 1mm以内～3mmの石英，長石を含む。	良	
206	42	水田耕作土③ Ⅱ層	陶器（備前）	擂鉢 口縁	－	－	[2.8]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5YR5/4にぶい赤褐 2.5YR5/4にぶい赤褐 胎土:2.5YR5/4にぶい赤褐	普 1mm以内の石英，長石を含む。	良	
207	42	Ⅱ・Ⅲ層	陶器（備前）	壺 口縁	(14.0)	－	[2.9]	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5YR4/2灰褐 5YR4/2灰褐 胎土:5YR5/3にぶい赤褐	普 1mm以内の石英，長石を含む。	良	
208	42	Ⅱ・Ⅲ層	陶器（瀬戸美濃）	碗	(21.2)	－	(3.6)	施釉，口縁部貼付	施釉，染付	透明 暗青色 胎土：10YR8/2灰白	普 微細な赤色粒を少量含む。	良	
209	42	水田耕作土③ Ⅱ層	陶器（刷毛目唐津）	碗 口縁	－	－	[3.3]	回転ﾅﾃﾞ，施釉	回転ﾅﾃﾞ，施釉	7.5Y4/2灰オリーブ 10YR6/1灰 胎土：7.5Y5/1灰	精良	良好	
210	42	水田耕作土② Ⅱ層	陶器	口縁	－	－	[2.0]	回転ﾅﾃﾞ，施釉，口縁部に圏線2条	回転ﾅﾃﾞ，施釉	透明 7.5Y6/1灰 胎土：7.5Y7/1灰	精良	良好	

写　真　図　版

＊5 区はオルソデータの作成を行っていない。

第 1 遺構面オルソデータ

写真図版1

1．三谷町日山から見た北山下遺跡

2．東西方向土層断面　C-C'（北から）

写真図版2

1．遺跡近景（南から）

2．2区北壁①土層断面（南から）

3．3区北壁土層断面（南東から）

4．1区東壁土層断面⑤（西から）

5．3区西壁土層断面（東から）

写真図版3

1．3区第2遺構面完掘状況（西から）

2．2区第2遺構面完掘状況（南から）

写真図版4

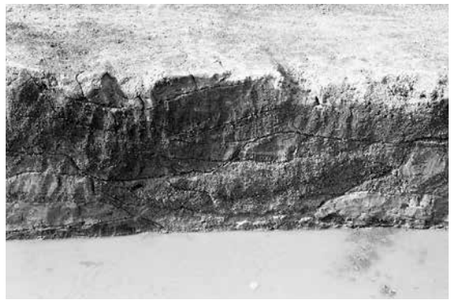
1．SD201 完掘状況（南西から）

3．SD202 完掘状況（北西から）

2．SD201　b-b' 土層断面（東から）

4．SD202　c-c' 土層断面（南から）

5．SD203 完掘状況（北から）



7．SD201・SD202　a-a' 土層断面（南から）

6．SD203　d-d' 土層断面（南から）

8．SD203 遺物出土状況（東から）

写真図版5

1．SD204 完掘状況（北から）

3．SD205 完掘状況（南から）

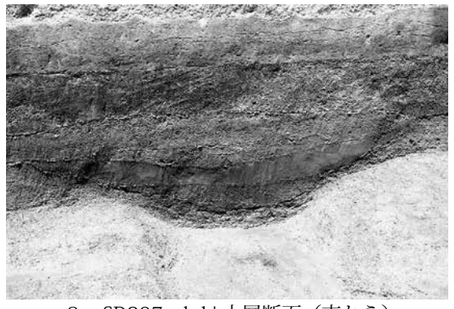
2．SD204　e-e' 土層断面（南から）

4．SD205　f-f' 土層断面（南から）

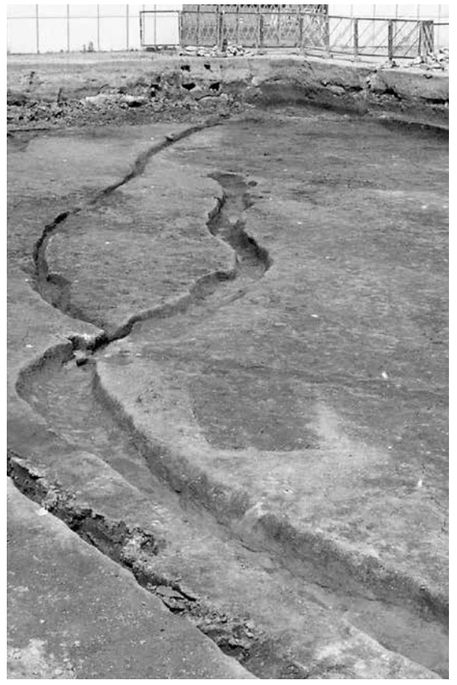
5．SD206 完掘状況（南から）

7．SD207　i-i' 土層断面（北から）

6．SD206　g-g' 土層断面（南から）


8．SD207　h-h' 土層断面（南から）

写真図版6


1．SD210・SD211 完掘状況（南西から）

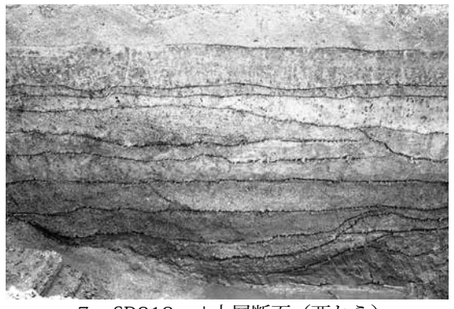
2．SD210　b-b' 土層断面（北東から）

3．SD211　d-d' 土層断面（西から）

4．SD213 完掘状況（西から）

6．SD212 完掘状況（東から）

5．SD213　f-f' 土層断面（東から）


7．SD212g-g' 土層断面（西から）

1．SD214 完掘状況（西から）

3．SX203 完掘状況（北から）

2．SD214　h-h' 土層断面（西から）

4．SX203 土層断面（南西から）

5．SD214　i-i' 土層断面（西から）

7．SK201 完掘状況（南西から）

6．SD214　j-j' 土層断面（西から）

8．SK201 土層断面（北西から）

A・B 層遺物出土状況

1．3区第1遺構面完掘状況（西から）

2．5区SB102・SB103完掘状況（西から）

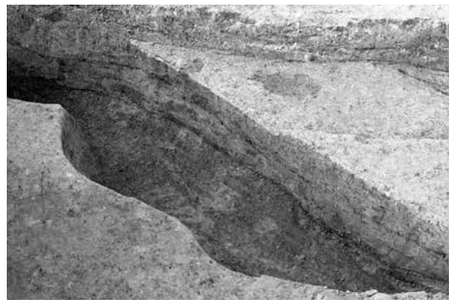
3．3区SA101完掘状況（南東から）

4．4区ＳＢ101南東部完掘状況（東から）

5．1区SB101完掘状況（東から）

1．1区SB105完掘状況（北から）

2．1区SD105完掘状況（南から）



3．SK101土層断面（南西から）

4．SD117完掘状況（南から）

5．SD101・SD102完掘状況（北から）

6．SD118完掘状況（南から）

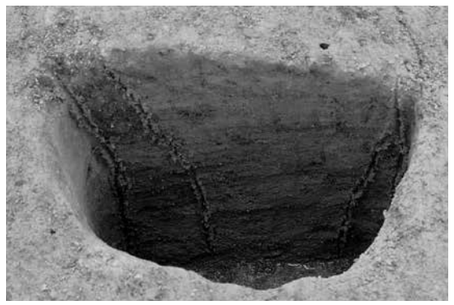
7．SD104・109・110・111完掘状況（東から）

8．SD118土層断面（南から）

1．SP1039 根石検出状況

2．SP1028 土層断面

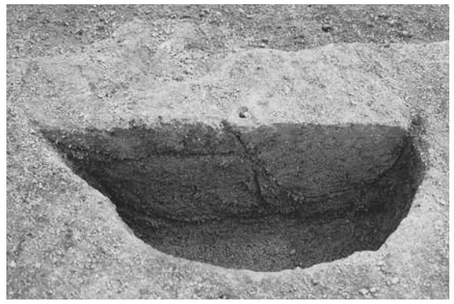
3．SP4003 土層断面　（東から）



4．SP4004 土層断面（東から）

5．SP5077 遺物出土状況（北から）

6．SP5070 古銭出土状況（南から）



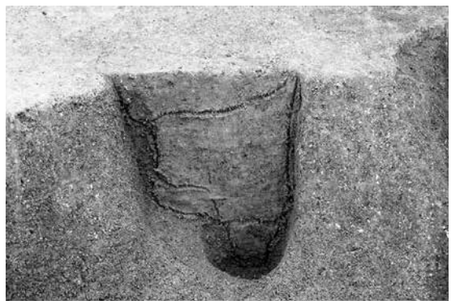
7．SP3037 土層断面（南から）

8．SP3038 土層断面（南から）

1．SP1032 土層断面（南東から）

2．SP1036 土層断面（南東から）

3．SD001 完掘状況（西から）



4．SP4016 遺物出土状況　（西から）

5．SE001 土層断面（北から）

6．SE002 土層断面（西から）

7．SK001 土層断面（南から）

8．水田遺構検出状況（南から）

11

18

13

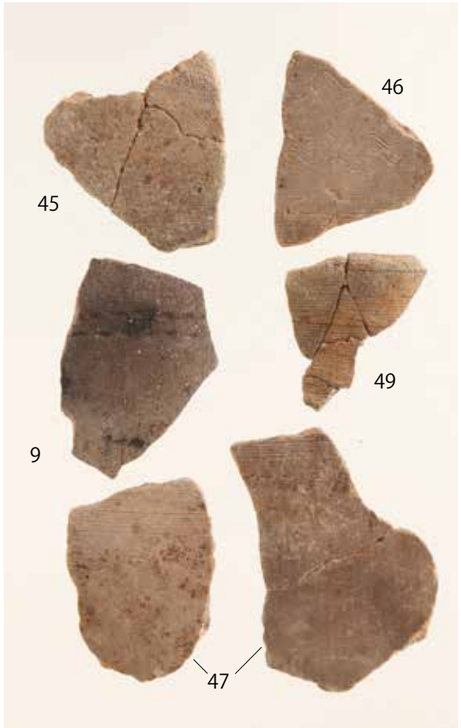
10

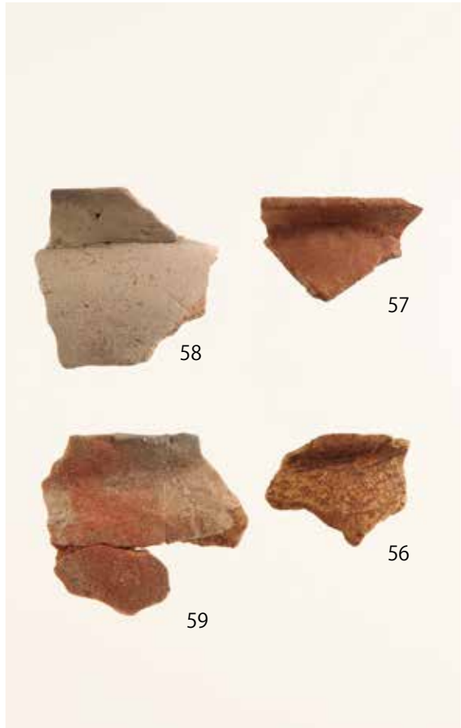
68

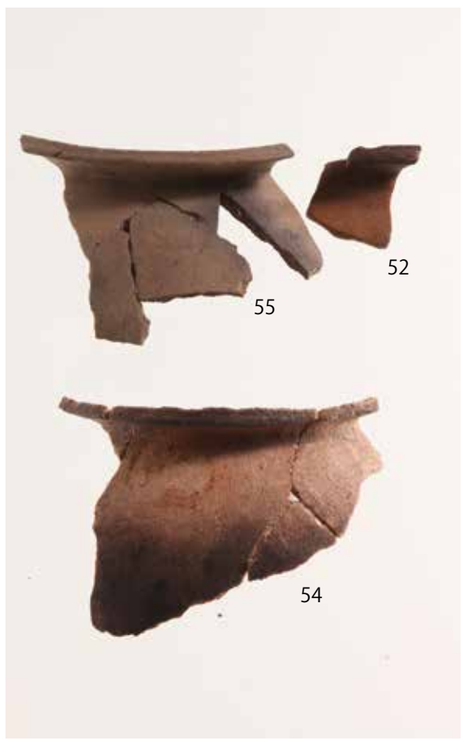
2

53

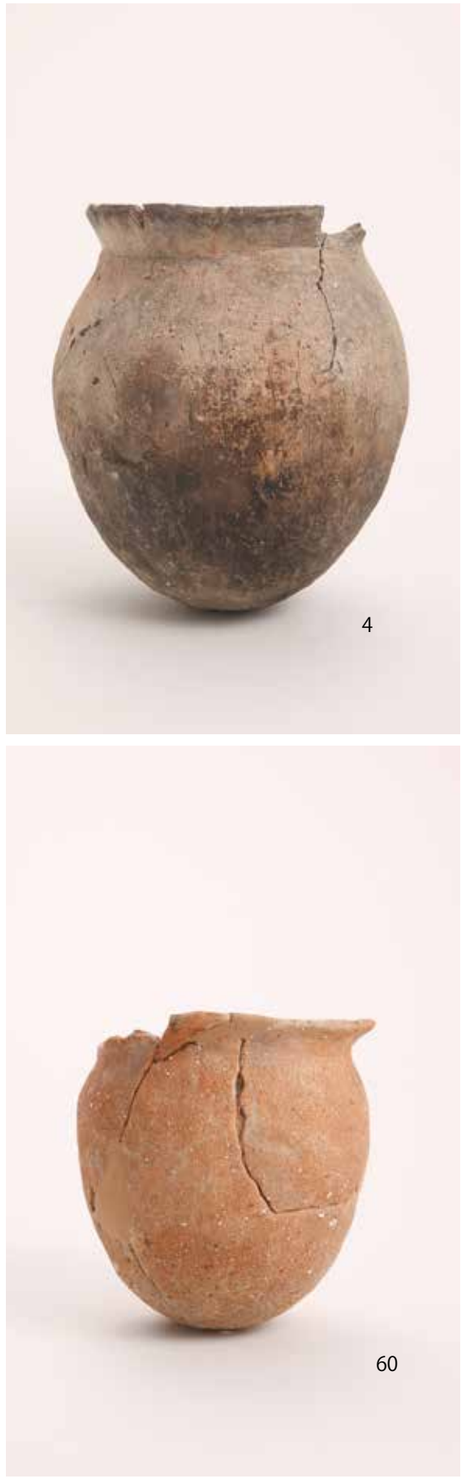
139







17


4

27

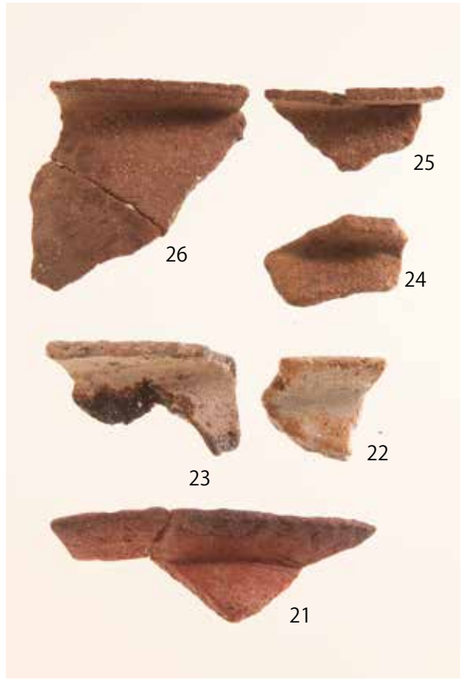
60

12

30

19

20

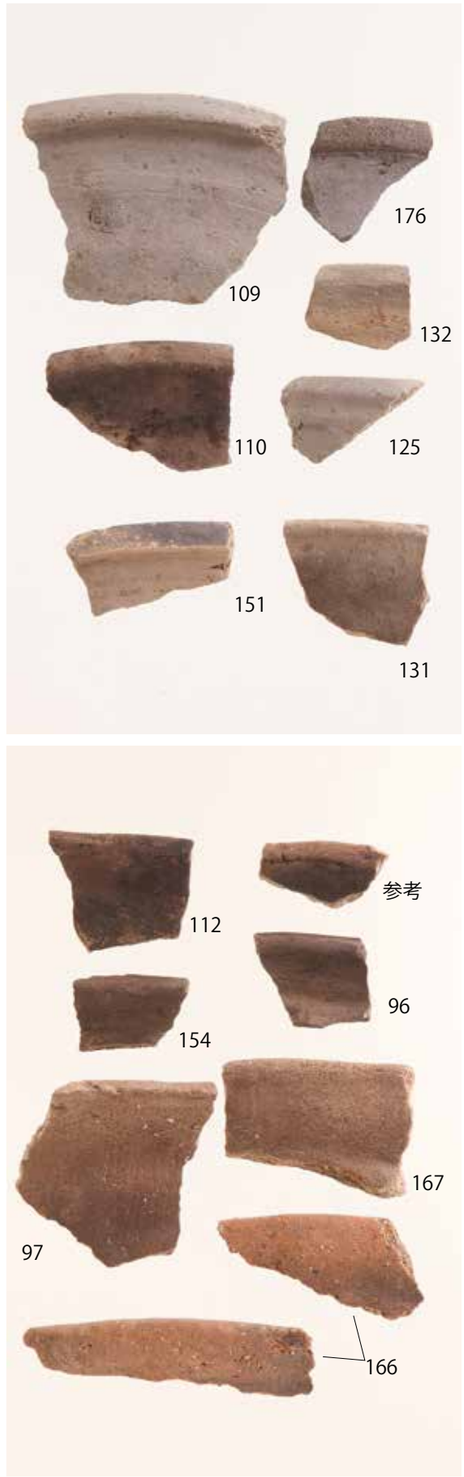

26
25
24
23
22
21

169
89
114

171

169
89
114

170
95


176
109
132
110
125
151
131
112
参考
96
154
167
97
166

180
152
189
111
204
162
203
141
123
164
137

108
147
130

165

192

85
211
190
183

135

113

191

報　告　書　抄　録

ふりがな	きたやましたいせき
書名	北山下遺跡
副書名	高松市立山田中学校校舎改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第160集
編著者名	森原　奈々・高上　拓
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760－8571　香川県高松市番町一丁目8番15号　　TEL087－839－2660
発行年月日	西暦2015年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	発掘期間	発掘面積	発掘原因
きたやましたいせき 北山下遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 かわしまひがしまち 川島東町			34° 26′ 69″	134° 09′ 10″	2014.3.3 ～ 2014.7.31	2032㎡	中学校建設

所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物	特記事項
北山下遺跡	集落	弥生時代 中世 近世	溝 土坑 柵列 掘立柱建物 溝 土坑 井戸 溝	弥生土器 石器 土師質土器 黒色土器 貿易陶磁器 銅銭 石製品 瓦	

要約	本遺跡は、春日川中流域東岸における調査例の乏しい地域での貴重な遺跡の一つである。調査の結果、第１遺構面では中世の掘立柱建物や区画溝など集落に関わる遺構や遺物を検出した。第２遺構面では、弥生時代から古墳時代前期に属する多条の溝を検出した。

高松市立山田中学校校舎改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

北山下遺跡

平成 27 年 3 月 31 日

編　集 /発　行　高松市教育委員会
高松市番町一丁目 8 番 15 号

印　刷　有限会社　中央ファイリング